
締切前はキスだけ！
Kazumi NITTA
新田一実
Illustration 藤河るり
ECLIPSE ROMANCE

締切前はキスだけ！

新田一実

Illustration／藤河るり

ECLIPSE ROMANCE



肩にキス。

ねっとりと舐めて軽く歯を立て、もう一度キスをしてくる。

「もう……。本当に仕事が……」

「原稿なら、幾らでも書いてやる。……お前のとこの編集長なら、胡麻化されるだろう。色仕掛けして、原稿を取ってきたって言えよ……」（本文P.129より）

締切前(しめきりまえ)はキスだけ！

●●●

新田一実(にったかずみ)
illustration／藤河(ふじかわ) るり

ECLIPSE ROMANCE



ECLIPSE ROMANCE

CONTENTS

締切前はキスだけ！……004
ダウト……131
あとがき……219

初出一覧
締切前はキスだけ！——本書のために書き下ろし
ダウト——本書のために書き下ろし

締切前(しめきりまえ)はキスだけ！

1

一生のお願い、なんていうものを軽々しく口にするのは、幼児か頭の足りない恋人が色仕掛けと共に使うだけだと思っていた。

まさか、三十も過ぎたむさ苦しい男に、電話口で懇願されることがあるなどと、考えたこともなかった。

同性が恋愛対象である人間にとって、男に色仕掛けをされることは大いにありなのだが、恋人にするには余りにも掛け離れた相手では、話にもならない。

それは、会社の先輩だった。

『氷野原(ひのはら)ぁ。……頼む。一生のお願い……。やっと、ウチの雑誌に書くのオッケーさせたんだ。頼むから、引き継いでくれ……』

弱った男を甘やかすのは嫌いではないが、趣味ではない男が相手では、少しも心は動かない。

「……判りましたよ。近藤(こんどう)さん、判ってます？　健康管理も仕事の内って言ったのは近藤さんですよ。倒れちゃったら意味ないでしょ。――で、本当に入院するんですか？」

普段は、近藤相手に使ったこともない丁寧な口調で、せいぜい厭味(いやみ)に聞いてやる。

『いや……あの……。明日、しゅーつなんだ』

しゅーつ、というのは、手術なのだろうな、などとぼんやり考えながら、氷野原は溜め息を吐いた。

下手をすると、救急車で運び込まれたのかもしれない。

編集者に限らず、仕事を持つ人間なら、自ら医者に行く者など、ほとんどいないだろう。待合室でのんびり待っていられるほど暇ではないし、具合が悪ければ、余計に待合室の人ごみに紛れる気などなくなるものだ。結果、余程の痛みでも、鎮痛剤や胃薬で誤魔化してしまう。

氷野原の勤める中小の出版社、大陸図書も、もちろん例外ではない。中小の出版社の編集部は、はっきり言って、入院している暇などない職場である。

仕事は常に山積み、冗談ではなく午前様など当たり前、会社を出るのが深夜の二時三時という日も儘あるのだ。会社に泊まり込むことも珍しくはない。

お蔭で、ストレスも溜る。

そして、ストレス解消を言い訳に、決してストレス解消にはならない深酒を煽ることになる。

胃が悪いなど、病気自慢にもならないし、肝臓は悪くて当たり前。

「で、近藤さん。どこを切るんです？」

『十二指腸……』

「判りました。……邦光先生の連絡先は？」
『デスクに……』
言いかけた言葉を遮り、きっぱりと言う。
「ミスがあるといけませんので、今お願いします。判るんでしょう？」
明日手術という人間に酷だとは思うが、必要事項を引き継がない限り、仕事にならない。
相手が絶句したのを幸いに、厭味半分に捲くし立ててやる。
「近藤さんのゴミ溜めのようなデスクを漁るのはごめんです。頼むというからには、ちゃんと必要なことは教えてもらわないと。ミスがあったら、困りますから」
『可愛い顔して厳しいんだから……。みんな、その綺麗な顔に騙されてるんだ！』
確かに奇麗な顔とはよく言われるが、顔で仕事などしないし、騙した記憶もない。
「近藤さんを甘やかしても楽しくないからなぁ」
『悪かったねぇ……』
明らかに辛そうな声を出す男から、電話番号を聞き出し、仕事相手の情報も聞き出す。
必要な話が終る頃、電話の向こうで誰かが近藤を叱責する声が聞えた。
想像はしていたが、どうやらベッドを抜け出して電話をしているらしい。
仕事の途中で入院するなどというヘマをやらかしても、責任感はある男なのである。
「できる限り素早い復帰を祈りますよ」

ストレスが一番の敵だと知りながら、氷野原は軽くプレッシャーをかけて電話を切った。
自分の仕事で手一杯なのに、余分な仕事を増やしてくれたのだ。ゆっくり養生してくださいなどとは、口が裂けても言いたくない。だいいち、この程度の厭味が本当にストレスになるようでは、出版社の編集部になど勤めていられないだろう。
さて、どうしてくれよう。
電話を切って、真っ先に思い浮かんだのがその言葉だった。
担当を引き継いでくれと言われた作家は、氷野原も知っている。
邦光志郎（くにみつしろう）――。
若手の中では、かなり売れている部類だ。
しかも、氷野原としてはあまり得意ではない、ハードボイルド作家という輩（やから）である。いわゆるミステリー物から、冒険小説と言った方がしっくりくる物まで書くのだが、とにかく、主人公は厭になるほど〝男〟を売り物にしたハードボイルドなのだ。それも、恐ろしく、プロトタイプ的と言うか、絵に描いたようなというべきか、そんな男ばかりだ。
売れているからには、それを読者が望んでいるのだろうということは判る。
実際、それが売り物の作家なのだ。
しかし、氷野原の好みではない。さらに氷野原の知り得る限りの情報からすると、それを書く作家本人も、絵に描いたようなハードボイルド作家だという噂だった。

作中人物さながらに、男臭さがプンプン漂う人物――想像しただけでも、勘弁だ。

「……参ったなぁ」

原稿待ちの編集者が応接間から玄関まで列をなしている、などという伝説を持つ大先生ではないにしても、大手にはほど遠い出版社のマニアックなミステリー月刊誌に書いてくれるような相手では到底ない。

近藤に何かコネがあるとも聞いていないし、どうやって、締切を割り込ませたのだろう。

雑誌のマニアックさに相手がシンパシーを持ってくれたのか、相手の気の迷いか。

それでも、相手が引き受けたのは現実だ。

それを落とさせたりしたら、さすがにまずい。

「うーん……」

書き留めたメモを、改めて見る。

時間はまだあった。

ただ、名前が欲しい訳ではない。書いてもらうからには、最高の作品が欲しかった。

2

五階建の古い建物は、三階あたりまで黒い染みが広がっている。これが夏場だったら、一面の蔦に被われているのだろうが、生憎と葉が枯れ落ちた今は、ただの汚らしい汚れでしかない。しかも、その上部には罅割れ。中々恐ろしい外見のマンションだ。

「住んでて恐くないのかねぇ」

心の中で密かに呟いた氷野原は、しみじみと建物を見上げた。

手入れされていないのは、持ち主が管理を放棄している証拠だろう。一応、エレベーターも付いているのだが、ドアにスプレーされたヘタクソな落書きを見ただけで、利用する気は完全に失せた。

どう考えてもメンテナンスが行き届いているとは思えないのだ。

「……アナクロい……」

ボロボロのビルに住む飲んだくれのハードボイルド作家。

あまりにもできすぎて、まったくリアリティがない。

だが、それが邦光志郎のリアルなのだ。

はっきり言って、ダサイ。

「中はまあまあか……」

階段に段ボールが積まれているようなことはない。ただ、砂ぼこりが溜っているあたり、掃除したのはかなり昔のようだった。階段の踊り場を倉庫代わりにするような非常識な住人はいないらしいが、きれい好きな住人もいないようだ。

三階まで上がった氷野原は、一番奥の部屋を目指した。

廊下の突き当たりに他とは違う素っ気ないドアがあり、その向こうは非常階段がいるらしい。

非常階段に一番近い部屋。如何にも、ハードボイル探偵が好きそうな設定だ。

「……わざとだったら笑ってやる……」

呟きながらドアに向き直った氷野原は、チャイムを鳴らした。

邦光志郎。本名・青海志郎の部屋のはずだ。

だが、表札もなければ、部屋番号もない。通り過ぎてきた部屋を見る限り、嘗てはドアにプレートがあったらしいが、この部屋はドアごと交換されているようだった。

他のドアと合わせるなどということは、微塵も考えていないようだ。

再びチャイムを鳴らす。

「逃げたんじゃねぇだろうな……」

今日、この時間に訪ねると言うことは、ファックスで流してある。留守番電話にもメッセージを残したし、メールも送信した。

恐ろしいことに、メールは携帯電話へのものだった。邦光は執筆にパソコンを使っているくせに、未だにパソコンに電話線を繋ごうとしないのだ。携帯電話もほとんど電源が切られているから、一番確実なのが、ファックスという有り様だった。

いや、一番確実なのは、本人を直接捕まえることだ。それには、こちらも時間を選ぶ。

午後三時。

捕まる可能性が高いこの時間に訪ねてやったのは、単に近藤の頼みだったから、である。せめてもの誠意である。

正直言って、どこから見てもマニアックな雑誌の中に、邦光の小説が入る必然は、あまりないと思う。それこそ、「ハードボイルド特集」に邦光が入るなら目玉にもなるだろうが、彼の作品が掲載される号の特集は、「密室トリック」なのである。

だいたい、ウチの雑誌の読者層が、邦光の小説を喜ぶとは思えないのだ。

とはいえ、編集長がOKを出してる以上、しがないヒラ編集者の氷野原が文句を放れる筋合いではなかった。

当然ながら、次号予告に入っている原稿を氷野原も落としたくなかった。

それは、編集者としての意地だ。

現実には、仮に近藤が担当ではないなら書かないと言われたとしても、次号予告から邦光の名が消えるだけのことなのである。

もちろん、編集長は怒り狂うだろうし、近藤は手術中でも、今すぐ原稿を取りに行けと言われるかもしれない。実際、近藤は邦光のファンだから、本当に腹が開いたまま、手術室を飛び出すかもしれなかった。

そんなことは実現不可能だとしても、間違いなく病室を抜け出すくらいはする。

それでは、こちらも寝覚めが悪い。そもそも、それくらいのことをしかねないと思ったから、近藤の頼みを引き受けたのだ。

「まぁ、おめおめと引き下がる気もないけどな」

引き受けたからには、やれるだけのことはやる。

少々後ろ向きの思考になるのは、趣味の問題と思って大目に見てほしかった。

折角、マニアックな小説誌の編集者になれたのに、何が悲しくて、メジャーな作家と付き合わねばならないのか。

氷野原の一番の本音はそれだった。

子供の頃から本が好きで、それが嵩じて某有名大手出版社に就職した。児童書の編集をしていたのが、入社して一年目。二年目の途中から、いわゆる文芸出版部に移動させられたのだが、そこで氷野原はメジャー作家と言われる先生方への偏った評価が植え付けられた。好きだったはずの本が、商品にしか見えなくなったのもその頃だ。

氷野原は人に不快感を与える容姿をしていなかったし、猫を被るのだけは巧かった。

担当した作家のお気に入りになることはあっても、嫌われることはなかったから、多分、仕事もできる方だっただろう。ベストセラーを手がけたこともある。

ところが、ある程度自由に企画の立ち上げや作品のチョイスができるようになった途端に、編集長と折り合いが悪くなった。

と、いうか趣味が合わなかったのだ。

それでも、氷野原も一応は我慢した。

だが、結局は編集長と大喧嘩をして、会社も辞めてしまったのである。

今になってみると、自分の趣味が充分に偏ってたと自覚できるようにはなった。

氷野原自身にも問題はあったのだ。おそらく、編集長の目からは、売れることより、個人的に好きな話や企画を選んでいるように見えたのかもしれない。実際に、好みが重要な選択の基準だった。そういう意味では、辞めたのは正解だった。

現在の職場はほどよく趣味に合っていたし、雑誌に寄稿してくれる作家も趣味に走った話を嬉々として書いているのが判るから、やるべき仕事は増えたが楽しくできる。

それが、何が悲しくて、邦光志郎の担当なのだ。

氷野原としては、はっきりいって避けて通れるのなら確実に避けるだろうタイプの作品を書く相手の担当を、ピンチヒッターとはいえ、引き受けさせられる嵌めに陥るとは。

近藤はいい。自分の好きな作家を必死に口説いたのだから。

「しかし……趣味じゃないんだよな」
溜め息と共に呟いて、手帳を取り出す。
来たことだけは証拠に残すつもりで、再訪を告げるメモを書き付けた。
ゴミ箱直行は覚悟の上だが、目にはするだろう。
邦光という男は、締切近くになると、気分転換と称して飲み歩くらしい。書き下ろしを書かせれば製作部が真っ青になり、雑誌に書かせれば校正は総て電話での遣り取り。要するに、編集者泣かせの作家なのだ。前の編集部にいた時、散々聞いた話である。
幸いなことに、氷野原自身は邦光の担当になったことはないが、当時も仕事を引き伸ばすのが豪快で男らしいなどと、露ほども思わなかった。
ところが、邦光にはそうではないらしい。
そもそも、締切が怖くないと言うなら、堂々と編集者に向かって、まだできていないと言えばいいのだ。飲み歩いているなど、逃げているとしか思えない。
「酒に逃げるのも、ハードボイルドの定番……てか？」
どうやら、持久戦になりそうだ。
近藤への義理もある。が、氷野原自身のポリシーからしても、作品が趣味ではなかろうが、雑誌に合わないと思っていようが、邦光には約束は守ってもらう。
決意も新たに、氷野原はマンションの廊下から、周囲の町並みを見渡した。

「……さて……と。近所にマトモな店はあるかな……」
コートの中で首を竦めて、ドアの前を後にする。
ここで、待つのは、さすがにこちらが辛い。
こういう作家と付き合うには、まずは時間を潰す有効な方策を見付けなければならない。できれば、旨い家庭料理を食わせる定食屋があればベストだ。ついでに、マンションの入り口を見張れる位置に長居できる喫茶店があってくれると有り難い。
まるで、浮気調査をしている探偵にでもなった気分だが、邦光が腰を据えて掛らなければならない相手だということは今まで耳にした話からも明らかだった。
マンションの玄関の前に立ってゆっくりと周囲を見まわす。
住宅街とも商業地とも言えない中途半端な裏通り。周囲の会社を相手にしていそうな喫茶店が一軒ある。マンションの斜め向かい。場所としても丁度いい。
「……あそこだけか……」
店に足を向けながら、外観から値踏みする。
はやっていそうにない店だ。味は期待薄だった。せめて、テーブルが広ければいいが。
早速、その店に向かった氷野原は、飾り窓に並んだコーヒーを見て、眉を潜めた。
いつから並んでいるのか、考えたくもないような古いコーヒー豆。ガラスに封印されたそれらが客に出される訳ではないと判っているが、コーヒーに期待しない方がよさそうだ。

ドアに貼り付けられた文字は〝ＴＩＭＥ〟。時間潰しに使おうという店の名前としては、皮肉である。

どんな店だろうと、ここしかないのだから、仕方がない。

氷野原は意を決して、木枠の格子にガラスの嵌まったドアをゆっくりと押し開けた。

間抜けなドアベルが響くと、のんびりした声が掛かる。

「いらっしゃい」

これもまた、絵に描いたようなマスターが、コーヒーを淹れていた。

しかも、他に従業員のいる様子はない。床から天井までの古びた木造りの内装や、微妙に小汚い調度、さらに一人で切り盛りしていそうなところ。それこそ小説の中の探偵が、無駄話をしにくる喫茶店か、バーそのものだ。ここまでくると見事としか言いようがない。

もしかして、この周辺には、ハードボイルド同好の士が集まっているのだろうか。

ならば、邦光がここに住んでいるのも、偶然ではないだろう。

バカなことを考えながら、氷野原はマスターの仕事振りを眺めた。

客は一人もいないのに、マスターはたっぷりと淹れていたコーヒーを保温ポットに注いだ。そして、スティックシュガーとミルクのポットをトレイに乗せる。

氷野原はカウンター席に腰を下ろし、マンションの方を見やった。

直接玄関は見られないが、通りを見通すことはできる。



一応、邦光の顔も知っていた。
居留守を決め込んでいたにしろ、どこかに出掛けているにしろ、ここからなら、見つけることができるだろう。
少なくとも、店の開いている間は、張り込める。
と、ドアベルが鳴った。
「すみませーん。あ、できてます?」
入って来たのは、制服姿の女だった。コートも羽織っていないあたり、すぐ近所の会社の社員らしい。マスターは愛想笑いを返していた。
「丁度、できたとこ」
「じゃ、もらっていきますね」
「ご苦労様」
にっこりと笑った事務服の女は、ポットを抱え、ミルクポットとスティックシュガーを持って店を出ていった。
豪勢なことだ。
このご時世に、わざわざ喫茶店にコーヒーを発注する会社があるとは、驚きだ。
大抵の会社はコーヒーメーカーを備えていたし、その余裕もなければ、インスタントコーヒーを飲む。そんな社会状況なのだ。

或いは、予想に反して、美味いコーヒーを淹れるのか。だとすれば、思わぬ拾い物だ。
氷野原は注文を取りに近づいてきた男を、少しばかりの期待と共に眺めた。
そう思って見ると、如何にも、こだわりがありそうな男に見えてくるから不思議である。
「え……と、ご注文は」
「コーヒーと……サンドイッチ」
「ブレンドと、サンドイッチですね」
注文を繰り返した男は、カウンターの中で作業を始めた。
手回しのミルが立てる音が、静かな店内に響く。
コーヒーを待つ間に、テーブルの上にモバイルを乗せて、メールを確認した。ついでに携帯電話のメールと留守録も確認する。
いくつものメッセージが残されていた。
「……ったく、どうして何もかも重なるんだ」
中には、頭の痛いものもある。担当している作家から、親知らずの痛みで締切を守れそうにないという泣きのメールが入っていた。
半分、精神的なものだろう。締切が近付くと痛みがぶり返すというのだ。生えている角度が悪過ぎて、大きな病院で手術をするしかないと言われて、治療を先延ばしにしている。
まぁ、その気分は判らないでもない。

痛みの収まった歯を抜くために、顎の骨を切開すると言われたら、治療を受ける気になるはずがない。だが、氷野原が返すメールは一言。

「医者に行け……だな」

もちろん、見舞いの言葉と、さり気ない脅しを混ぜ込んで、メールを送る。

私信のひとつも入っていないのは、それだけ忙しく働いているからだった。もしくは、忙しい所為で、私信を入れてくれる相手を失ったと言うべきか。

最後の私信メールは、別れを告げるものだった。

もう一年近く前のことだ。

別に、その別れが後を引いている訳ではない。ただ、忙しいのを理由に、次の相手を捜す努力を放棄しているだけだった。

「荒んでるなぁ……」

何と言っても、それで不自由を感じないあたりが、終っている気がする。

まだ二十六歳。

恋人を捜すのが面倒になったら、人類として終っている気がする。もっとも、同性の恋人ばかり選んでいるのだから、どうせ人類の未来には何の影響もないだろうが。

「お待たせしました」

マスターが、コーヒーとサンドイッチを運んできた。

いい香りだ。
ひょっとすると、本当に拾い物だったかもしれない。
マンションの方を見ながら、遅過ぎる朝食を取る。
かなり上等の部類に入るコーヒーに比べて、サンドイッチは褒められたものではなかった。それでも、腹の足しにはなる。
しばらくはここに通い詰めることになりそうだったから、何より、コーヒーがおいしかったのが、有り難い。
どうせなら、マスターに良い印象を持ってもらった方がいいだろう。
そのコーヒーを淹れたマスターは、カウンターの一番奥の席に座っていた。
本を読んでいるようだ。
「あの……すみません」
声を掛けると、男は即座に立ち上がった。
「はい。なんでしょう」
こういう、機敏な反応は好きだ。
「いえ……ちょっと伺いたいことが」
少しだけ、首を傾げたマスターが、本を片手にこちらに近付いてくる。
そうして、通路を挟んだ席に座ると、ちらりと件のマンションの方を見やった。

テーブルの上に置いた本は、〝夜を駆ける〟。邦光の著書だ。
マンションを見遣った目が、ゆっくりとこちらに戻ってくる。
なんだか、自分の正体を探られている気分だった。
と、言うか、編集者だとバレている気がする。
賭けてもいい。このマスターは、ハードボイルド・マニアだ。それも、古典系、ハメットとかチャンドラー。好きな俳優はボガートで決まりだろう。
「お客さん、初めてですよね」
「はい」
「どちらの編集さん？」
ほら、やっぱり。
邦光の本を読んでいるくらいだから、彼の仲間かスパイか。
「えーと……大陸図書ですけど……」
「あれ？　近藤さんは？」
これは知っていて、当然かも知れない。彼も、ここで張り込んでいたのだろう。
「近藤が……入院しまして、それで、僕が」
「ありゃ、もしかして胃潰瘍？」
そう言えば、近藤は時々腹を押さえて呻いていた。胃が悪いと連想しても不思議はない。

「いえ……十二指腸潰瘍ですけど……そんなこと言ってました？」
「胃が痛いって言ってたからさ。そうか十二指腸か。もしかして、邦光さんの所為？」
「と言うより、半分職業病でしょう」
氷野原が苦笑を浮かべると、マスターは同情の籠った目で頷いた。
「……どうして僕が編集だって判りました？」
マスターがくすりと笑う。
「それ、みんな聞くけどね。……編集さんで初めて邦光さんのところにきた人は、その席に座って、マンション睨んでる」
「もしかして、邦光さんも来ますか？」
「締切前は来ないよ。ここで待ってる編集さん多かったから……出前も取ってくれなくなっちゃった。……前に、配達装って乗り込んだ人がいてね」
なんだか、凄い話を聞いた気がする。
もしかして、編集というだけで、このマスターに恨まれるのだろうか。
「なんか、すみません」
人のしたことでも、つい謝りたくなる。
締切前の作家が人ではない、というのはよく聞くが、原稿を取れずに追い詰められた編集者だって、人ではないのだ。

今はまだ氷野原にも、人の代わりに謝るくらいの余裕があるが、人の迷惑なんぞ、構っていられない時がある。
「いや、悪いのは邦光さんでしょう。それで、近藤さん、具合どうなの？」
「え？　あ……今日手術だって話ですが」
「そりゃ、大事だ。……そっか、手術か……。よし、近藤さんのお見舞い代わりに教えて上げよう。ここで見張ってても、出ていくとこは見れないよ。邦光さんはね。ウマいんだよ、籠脱けが。ホテルから逃げられて、カエルみたいだって言ってた人がいたな。マンションのドアの前で張ってたのに、逃げられた人もいた。だから、最近はここにくるのは、近藤さんみたいな人だけ」
「ちょっと待ってくださいよ」
そこまでは聞いていない。それでは、ここにいても無駄ということだ。
氷野原の内心を察したのか、マスターがにっと笑う。
「……でも、飲んで帰ってくると、その妖術も使えないらしいんだよね。――八時から九時の間に帰ってくるよ。朝だけど」
「そんな時間に？」
「帰ってくるならね。――他の人に言っちゃダメだよ。あくまで近藤さんのためだからね。それに、あの人原稿落としたことはないはずだよ。出来上がるとここに持ってくるんだ」

いや、確かに落としたことがないというのは、本当だ。綱渡りではあるが、ぎりぎりに間に合うのである。そうでなければ、とっくに仕事などなくなっているかもしれない。

しかし、氷野原としては、その綱渡りが嫌なのだ。

編集作業がきつくなるのももちろんだが、それ以上にどうしたってミスが増える。自分が楽をするという以上に、真っ当な本を出すために、ある程度の余裕は持ちたい。

何食わぬ顔をして、相手の性格や仕事のスピードに応じて締切にサバを読むのは編集の常識のようなものだが、今回は近藤の見込んだ余裕なので信用ができないのだ。

何しろ、彼の編集作業は綱渡りどころか、糸渡りなのである。それでも、穴は開けないし、とんでもないミスをやったこともないのだから、彼が有能であることは事実だろう。

しかし、引き継いだ者には堪らない。

自分なりに仕事を熟すためにも、やはり、一度は本人ときちんと話しておきたいのだ。

主のいないマンションを見上げ、氷野原は溜め息を吐いた。

3

電話やメールで事足りることは、総てそれで済ませるのは簡単だった。

危なそうな担当作家はただひとり。それも奥歯の具合次第となれば、氷野原にできることは限られている。幸いにも、彼は敵前逃亡するようなタイプではないから、本当に落すとなれば、自己申告するだろう。編集長にも状況は伝えてあるし、代原は用意されている。つまり、氷野原がしばらくは邦光に貼り付いていても問題はないということだ。というより、年末進行が本格化する前に、邦光の件を片付けるしかない。

今が唯一のチャンスといえるのだ。

という決意と段取りの上、氷野原は邦光のマンションの前に立っていた。

時間は七時半。

朝の、だ。

もちろん、早起きしてこんな時間に詰めているのではない。これから一週間、一度も出社しないという覚悟で、徹夜で仕事を熟してきたのだ。

氷野原の鬼気迫る様子に、同僚たちは無責任な励ましの言葉をくれた。

〝頑張れよ〟だの、〝近藤の敵を討ってやれ〟だの。まるで、近藤の入院の原因が、邦光だと決め付けているような言いように、氷野原は笑うしかなかった。

「……さて……覚悟しろよ……」

会えるまでは、ずっとここで張り込んでやる。

そう思い決めた氷野原は、邦光の部屋の前で、ベンチコートを着込み、ブランケットを突っ込んだバッグに腰を下ろしていた。

完全防備だ。

学生の頃、席取りのためにスタジアムの前で徹夜したことが何度かある。野球なら最悪の時期でも十月だからどうということはないが、野外ライブは真冬でも催される。雪の降る中、吹き曝しの場所で徹夜したことを思えば、屋根と壁がある場所で座っていることなど、楽なものだった。

九時になれば、ＴＩＭＥも開店するから、旨いコーヒーにもありつける。

それを楽しみに、一時間半。ここで粘るしかない。

幸いこの扉より奥には非常階段しかなかった。

災害が襲ってこないかぎりは、通行の邪魔にはならないだろう。

この一週間の間に、原稿が取れるのかどうかの目処が立たないと、近藤のお願いは適わぬままに終るのだ。それを思えば、人の目なぞ、気にならない。

氷野原は固い決意を胸に、ドアに背を凭れる。

どれくらいそうしていたか。おそらく三〇分も過ぎていないだろう。

「……くそ……。洒落になんねぇぞ……」
用意周到過ぎたかもしれない。いい具合に温かくて、座り心地がいい。
ぎりぎりで仕事をしているところに、飛び込みで鬱陶(うっとお)しい仕事が入ってしまった所為で、肉体以上に精神が疲れてしまっていた。
やれるだけはやったという思いと、肉体の疲労が相まって、頭の芯が痺れている。
このまま眠ったら、さぞや気持ちがいいだろう。
氷野原の記憶はそこで途切れていた。
次に意識が戻ったのは、男に起こされた時だった。
「ここは三階だ。ほら、君の部屋はもうひとつ上だろう」
いい声。
これは、天性の女たらしの声だ。
とろりと甘ったるくて、セクシー。
「締め出されたのか？　まったく、こんなとこで寝てたら、風邪を引くだろう」
眠気に逆らい、渾身の力を振り絞って目を開けた氷野原は、目の前の男に顔を顰めた。
ハンサムなのに洒くさい。
いい感じに伸びた不精髭もセクシーで、だらしない服の乱れ方もなかなかオツなものだ。
オールバックに撫で付けた髪が、額にぱらりと落ちるという風情も、かなり好みだ。

しかし、いかんせん酒の匂いが強過ぎる。ライターの火を翳してやったら、火がつくんじゃなかろうか。

まるで、身体がアルコールで充満している勢いだ。

それでも、呂律がしっかりしているところが凄い。

――で、これは誰だろう。

少々低血圧気味の氷野原の脳味噌は、起きたばかりでは働いてくれなかった。

「起きたか？　だったら、自分の部屋に帰れ」

「え……あ……」

もう一度、相手の顔を正面から見ることになって、氷野原は突然狼狽えた。

こいつは、邦光志郎ではないか。

なんと、初日から遭遇できるとは、これは天恩である。

が、ここで詰め寄っても、逃げ出されたら話にならない。廊下で捕り物をするのはまずいだろうし、ここはやはり、うまいこと部屋に上がり込まねば。

氷野原は回らぬ頭を必死で叩き起こし、部屋に上がり込む算段をし始めた。

「どうした？　具合でも悪い？」

頷いたら、どうだろう。

いや、この男は部屋まで送るなどと言い出しそうだ。

とにかく、鍵を開けさせねば。
「いえ、大丈夫です。ちょっと、低血圧だもんで」
これは、嘘ではない。日頃から、血圧は低めなのだ。
言いながら、氷野原はふらりと立ち上がる。
「どうも、ご迷惑をおかけしました」
ぺこりと頭を下げる。
「いや、気を付けて……」
言いながら、邦光はコートのポケットを探り出した。
「あれ……」
「どうしました？」
「いや、カギ……」
受け答えはしているが、まるで横に立った人間への興味は失せてしまったらしい。
真剣な顔で、ばたばたとあちこちのポケットを探っていたが、やがて、喜色満面の笑みを浮かべる。
「あった！」
氷野原のことなど全く無視して、ガチャガャと騒がしい音と共に鍵を開ける。
邦光がドアを引き開けた瞬間、氷野原は声を掛けた。

「邦光先生」
「え？」
驚いて、振り向いた邦光と、ドアの間に身体を滑り込ませ、にっこりと笑う。
「大陸図書の氷野原と申します」
目を剥いた邦光の手から、鍵を取り上げる。
「あ？」
まともに見えても、酔いの影響はあるのか、邦光の反応は鈍い。
それとも、単に動転しているだけか。
「上がらせてもらいますよ。……近藤が急に入院したもので、改めて打ち合わせを」
言いながら、邦光をドアの中に引き摺り込む。
電話やファックスや、その他諸々、散々無視して頂いたのだ。これくらいの強引さは、当然だろう。
氷野原が鍵を閉め、チェーンまでしっかり掛ける間も、邦光は何も言わなかった。
驚いているというより、呆れているらしい。
靴を脱ぎ、先に玄関を上がった邦光は、壁に片手を突いて、値踏みするようにこちらを見ていた。氷野原の身長は一七三センチ。決して背が低い方ではないし、玄関の上がり口にさしたる段差もないのに、随分高いところから見下ろされている気がする。

「よろしいでしょうか？」
「何を今更。……しっかり、チェーンまで掛けてるくせに……」
怒ってもいないらしい。壁に背中を付けて、道を開けてくれた。
「言っとくが、何にも出ないよ」
「期待してません」
遠慮なく上がり込み、少し狭い廊下を奥まで進む。
廊下の左手に二つ並んだ扉はトイレにバスルームというところか。右は何もないただの壁だ。突き当たりのスモークガラスのドアがリビングだろう。
見当を付けて、押し開けると、だだっ広い部屋が現われる。
外から見た限り、２ＬＤＫか３ＬＤＫと踏んでいたのだが、どうやら、普通の部屋割りではないらしい。今通ってきた廊下以外がワンルームになっている。
奥の部屋の広さに比べて、妙に廊下が狭い気もしたが、古いタイプのマンションと思えば、こんなものなのかもしれない。
それにしても、こんな妙な造りのワンルームは見たことがない。
おそらく、間仕切りを総て取っ払ったのだろう。
そのだだっ広い空間で目を引くのは、なんだか知らないが無闇に居心地の良さそうなソファーセットと、一人暮らしには無用の長物にしか見えない大きなダイニングテーブル。

妙に立派なオーディオ器材が右手の壁際にあるが、テレビはない。
仕事場とか、書斎というイメージは全くなかった。
思わず振り返ると、邦光がなんだか楽しげな顔で、こちらを見ている。
「まあ、どうぞ。お進みください」
笑いを含んだ声で言った邦光は、氷野原を部屋の中に押し込んだ。
「ワンルーム……ですか？」
「そんなもんかな……ちまちま区切ってるのが嫌いでさ」
大欠伸を漏らした邦光が、コートを脱ぐ。
ばさっと投げ出した先は、ダイニングテーブルだった。
ジャケット、セーター、シャツ、パンツ。
「うー……さむさむ……」
身体を竦めて奥に向かった邦光の姿が消える。
眉を寄せて後を追った氷野原は、ダイニングテーブルで見えなかった巨大なベッドマットを見付けた。
ベッド本体はどこにもない。
フローリングの床に、直接マットが置かれているだけだ。
温かそうな羽ぶとんに包まった邦光は、すでにもう幸せそうな寝息を立てていた。

やはり、まともに見えただけで、しこたま酔っていたらしい。傍からみると酔っているようには見えないという、一番始末の悪いタイプの酔っぱらいだ。

「おいおい、おっさん……」

プロフィールでは、今年三十になったばかりだという。アイドルならジジイだが、この業界では立派な若造だ。だが、初対面の人間の存在も無視して寝こけるほど酒に飲まれるというのは、ジジイの証拠のように思えた。

少なくとも、氷野原自身はここまで酔ったことはない。単に、酒に強い体質というだけかもしれないが。

「邦光先生！　邦光さん！　……起きてください！　原稿は？　進行具合はどうなってます？」

氷野原が羽毛布団に包まった身体を、ゆさゆさと揺すっても、男は目も開けない。

「ああぁ……」

何か喋ったらしい。

だが、それは言葉をなしていなかった。

「勝手に捜しますよ！　いいですね！」

耳元で怒鳴ってやる。

もちろん、邦光は布団に潜り込んだままだった。



「……しょうがない……」
巨大なカタツムリは放っておいて、室内の探索を始める。
巨大なワンルームの端に、キッチンスペースがあった。カウンター式のキッチンは、使われた形跡が全くない。レンジは染み一つなくピカピカ。鍋の類はしまい込まれているようで、見えるところにある食器といえるものは、コップだけ。
何もないのは台所だけではない。
「……どこで仕事しているんだ？」
更に見回してみても、机もなければパソコンもない。ベッドマット横の壁面一面が本棚になっているのが、唯一作家かもしれないと連想させる点だった。
「なんなんだ、この家は……」
生活感があるのかないのか。隠れ家にはなるかも知れないが、生活には向いていない。
そもそも、収納というものが見当たらないのだ。
まさか、ダイニングテーブルに乗った服一式しか持っていないということはないだろう。
それなのに、タンスも、収納ボックスも見当たらなかった。
「出来の悪いドラマだな、まるで……」
酒ビンはある。グラスも。それなのに、バスタオルの一枚どころか、着替えもないのだ。
「まさか、酔っぱらった時の待避所か？」

だが、それなら〝TIME〟のマスターが教えてくれるだろう。だとすれば、この殺風景な部屋で、邦光はしっかり生活しているということだ。

この際、着替えが見当たらないことなどどうでもいい。

パソコンがないのはどうしてだろう。

向かいの喫茶店まで原稿を届けているというのだから、ここで仕事をしているのは間違いないのだ。氷野原の頭の中は、ますます疑問符だらけになった。

「まさか……手書き？」

だとしたら、予定が土砂崩れだ。手書き原稿をリライトしてもらうとなると、さらに二日、予定がずれ込む。当然、ミスも多くなるし、校正作業も常以上に手間が掛かることになる。

「冗談じゃない……」

どこかに、パソコンが隠れているはずだ。

そもそも、手書きだとしても、この部屋にはボールペンの一本も見当たらない。

「校正ぐらいしているだろう。赤ペンはないのか、赤ペンは……。そうだ、ファックスだ、ファックス。どこにあるんだ？」

度を失っているのが、自分でも判った。らしくもなくパニックに陥って、部屋を見回す。

だが、どこにもない。

「……くそ。ふざけやがって……」
ポケットから携帯電話を引っ張り出して、登録したばかりのナンバーをコールする。
と、くぐもった電子音が聞えた。
壁の向こうが鳴っている。
「なんだと？」
オーディオの横あたりだ。
「……壁面収納か？」
というよりは、まるで隠し扉のようだ。
白木の壁は、簡単に押せた。蛇腹状に、開いていく。
「あった……」
そこに、ファックス兼用の電話はあった。
自在にセットできる棚を、ファックス置きとして利用しているらしい。もっとも、収納しているのか押し込めているのかは定かではなかった。山のように吐き出された用紙が筒状に丸まって、溜っているあたり、後者の可能性が強いような気がする。
「あーあ。……ったく」
この感熱紙の山には、担当編集者たちの恨みが籠っているような気がした。
当然、自分が送った通信文も、この中に紛れているのだろう。

溜め息がでる。

このファックス用紙は、ただのおまじないにもなっていないと言うことだった。どんな脅迫めいた文面でも相手が読んでくれないのでは、意味がない。

ちかちかと本体のランプが光って、伝言メッセージがあることを伝えている。おそらく、このメッセージも滅多なことでは再生されたりしないのだろう。

要するに、どの編集者も、邦光のペースに合わせて、ただひたすら待ち続けていたのだ。急かそうにも、相手に通じていないのだから話にならない。

確かに、作品を書くのは作家だ。彼等の都合が優先するのは仕方がない。しかし——。

「そのうち、痛い目見るぞ……」

色々な意味で。

とりあえず、氷野原は紙の山をいい加減に纏めると、パソコンを捜索し始める。

ファックスの置かれたスペースの続きは、一応書斎と呼べる空間らしい。

巨大クローゼットの一角に設えられた作り付けのデスクに、丁度その下の空間に納まるように作られたワゴン式のサイドテーブルと、機能的な椅子。

デスクとは段違いに少し低く取り付けられた棚は、おそらくプリンター用だろう。どれもがダークブラウンの木目も美しいデザイン家具のような代物だ。これで、ここに英文タイプライターでも置いてあったら笑えるのだが、さすがにそんなものはなかった。

デザインそのものは実用的なのに、使っている様子がないのも気に掛かる。
それこそ、インテリア雑誌に出てきそうな、機能的でお洒落なスペースだが、肝心要のブツがない。
そうパソコンがないのだ。
もちろん、原稿用紙がある訳でもないし、ペンの一本もない。
この事実には、氷野原も唖然とするしかなかった。
ワゴンの引き出しも開けてみる。
筆記用具が少しと、フロッピーやCD—ROM、MO、それに、ファイルブックが、整然と並んでいるだけだった。
兎にも角にも、パソコンで仕事をしていているらしいことは判ったが、ファイルはともかく、他は中味を見る手段さえないのは、何故なのだろう。
まさか、ただ並べてあるだけではあるまい。
「……一体どうやって仕事してるんだ?」
謎だ。
世の中には、色々な手段で小説を書く作家がいる。かの曲亭馬琴も後年は、口述筆記をしていたという話だし、どんな書き方があってもおかしくはない。
だが、フロッピーの類に、直接、文章を書き込める人間だけはいないだろう。

これは、もう本人に聞くしかなさそうだ。
諦めて、クロゼットを閉じようとした時、とんでもない物を見付けた。
スーツの掛けられた衣装スペースの下に、大きな箱がある。
「なんだと……」
パソコンだ。
大きくパソコンの絵柄と品番がプリントされた箱は、きっちりと梱包されたまま伝票まで貼り付いてる。配達されたままの状態でここに放り込まれているとしか見えなかった。
どうして、こんな場所に、パソコンが箱ごと仕舞い込まれているのだろう。
本当に訳が判らない。
見付けたフロッピーなどの内容を確かめてやりたいのは山々だが、さすがに未開封の箱を開ける訳にも行かない。
あまりの事態の不条理さに、ようやく氷野原も我に返った。
そもそも、勢いに任せて家探しをしていること自体、問題アリなのだ。
おとなしく、邦光が起き出すのを待つしかないのか。
部屋に上がり込んだ以上、原稿を取るまで引き上げない。
新たな決意をした氷野原は、ソファーの一角を当座の居場所を定めた。

4

結局、氷野原の選んだ原稿取り作戦は、恐ろしく古典的なものだった。

とにかく、〝貼り付く〟だ。

そのために、最初にした仕事は、近場の便利屋を探し出して、食料品の買い出しを依頼することだった。コンビニがすぐ近くにあるのはリサーチ済みだが、何しろ、買い物に行っている間に逃げられないとも限らない。

そう思って、この部屋から一歩も出ずに居座って、六時間。

そろそろ邦光も起き出してくるだろう。

起き出した時に食べ物でもあれば、少しはこちらの話を聞いてくれるかもしれない。

ただ原稿をくれと迫るばかりでは、嫌われるに決まっている。懐柔策は必要だろう。

そんな下心もあって食料品を調達したものの、キッチンに立ってみると、それも無駄なような気がしてきた。

見たところ、使った形跡のないキッチンに見えたが、調理道具は一通り揃っている。というより、妙なものがあって、当然と思うものがない。

チーズ下ろしはあるのに、普通の下ろしはなかったり、オリーブの種抜きがあるのに、菜箸（さいばし）がなかったり。鍋はあらゆるサイズが揃っていて、パエリア用のものまである。

その癖、不思議なことに、炊飯器や電子レンジがない。炊飯器はともかく、普通一人暮しの男の部屋に、電子レンジは必需品だろう。にも拘らず、明らかに後から入れたと思しきシステムキッチンに、巨大なオーブンが組み込まれていたりするのだ。

それに引き換え、冷蔵庫の中味はお粗末だった。

ビールを始めとして水物ばかり、材料と呼べるものはほとんど何もない。代わりにスパイスの類が、あちこちから出てきたりする。

ある意味では、とても判り易い。おそらく、料理をする男にありがちに、ひたすら凝った料理をたまに作るというタイプだ。口も奢っているに違いない。

つくづく扱いが難しそうな男である。

口に合わないものを作ったら、山ほど文句を言われそうだ。

どうせ、今まで待ったのだ。起きるのを待って、リクエストを聞くべきだろう。

「……ったく。俺は料理なんて趣味じゃないからな……」

餓えたくないから作る。所詮その程度だ。得意料理は中華粥と味噌汁。かなり情けないが、風邪の時の定番料理と、二日酔いの朝にどうしても欲しくなるものだ。それさえ作れれば、後は冷凍食品でもレトルトでもどうとでもなる。

「しかし……電子レンジがないとは……」

冷凍食品なら、簡単なのに。今時の冷凍食品は、それなりに喰えるものだ。

「まさか、レトルトは喰わないとか言わないよな……」
氷野原はぶつくさと文句を言いながら、フライパンに冷凍のピラフを開ける。
電子レンジを使わずに済む冷凍食品など、こんなものしか思い浮かばなかった。
コンビニで売っているパックのサラダに冷凍ピラフ。それで、朝飯は充分だ。
徹夜開けで、一時間ばかり眠っただけだから、腹いっぱい食べたら寝てしまいそうだが、睡眠不足の上に食事まで抜いたら倒れてしまう。
「……さて……どうするか……」
キッチンで立ったまま、スープボウルに入れたピラフをウーロン茶で流し込んで、美味くもないサラダをばりばりと音を立てて噛み砕く。
意地でも野菜を食うのは、一種のまじないのようなものだった。サプリメントの方が便利だとは思うのだが、今のところは修行のような気分で、本物の野菜を食っていた。
「……いつまで寝てるんだか……」
キッチンで騒音を立てても、邦光は起きる気配もない。
まぁ、思いきり酔っていたことを考えれば、夕方まで起きなくても不思議はなかった。
メールをチェックし、歯を磨いた氷野原は、コートを着込んでから、玄関に向かう。
3階のこの部屋でベランダから逃げるなら、非常階段まで必死のダイブをするか、壁伝いに降りるしかないのはチェック済みだ。

いくらなんでも、それを実行するほど、邦光もまだ切羽詰まっていないだろう。家中の靴は玄関に集めてやったし、ここを通らなければ、裸足で出ていくしかないのだ。

ブランケットを敷き、ドアに寄りかかって目を閉じた途端、すとんと、意識が落ちる。

目覚めると、四時間ほど経っていた。思いの他、ぐっすりと眠れた。

決して寝心地がいいとは言えない場所だったが、どこででも熟睡できるというのが、氷野原の特技でもあるのだ。

見上げると、ドアチェーンはしっかりと掛かっていた。

どうやら、邦光先生はご在宅のようだ。

ひょっとすると、まだ眠っているのだろうか。

ぎしぎしと軋みを上げる身体を伸ばしながら、リビングに向かう。

邦光は、相変わらず眠っていた。

「ハードボイルド気取るんなら、気付いて起きろっての……」

元々、時代錯誤なハードボイルドにはシンパシーを感じないのだ。どうしても、評価は辛くなるし、シニカルに考えてしまう。

それこそ、邦光が彼の描く世界を実践しているというのなら、他人がいる部屋で無防備に眠らないでほしい、とか。大酒を飲んだ直後でも、バリバリと原稿を書くぐらい、嘘っぽい生活をしてほしい、とか。

ちょっと、悪戯っぽい気分で、氷野原は味噌汁を作り始めた。
白飯はレトルトだが、出し巻き卵はフライパンで作る。
見た目はオムレツだが、味つけはしっかり出し巻きだ。これに、漬け物でもあれば、パーフェクトに邦光の世界とは離反しているのだが、とりあえず便利屋に買い出してきてもらった品の中には、ぬか漬けは入っていなかった。
「……さて……と。もういくらなんでも起きてもらうか……」
午後五時。
窓の外は暗くなっていた。そろそろ仕事に入ってもらわなければ困る。
「邦光先生。邦光先生！　起きてください」
ぷんぷん臭っている和食の香りは、邦光の世界には無縁のもののはずだ。下手をすれば、機嫌を損なうかもしれないが、その時はその時だ。
「あぁ……。誰だ？」
目を瞬かせた邦光が、鼻をひく付かせた。
「……味噌汁？」
ぎゅっと、眉間の皺が深くなる。
味噌の匂いも嗅ぎたくない、などと言い出すのだろうか。
反応を待っていた氷野原に、意外な言葉が掛けられた。

「白みそ？……飲ませてくれ……」
格好をつける余裕もないのか。それとも、二日酔いの朝は、ハードボイルド作家でも味噌汁がいいのか。
「どうぞ」
「ちょっと、シャワー浴びてくる」
返ってきた答えは、これだった。
それ以上は何も言わず、だらだらと起きてきた邦光は、下着一枚の姿で、バスルームの方に消えていく。
一瞬、脳裏を過ったのは、このまま逃げられるかもという不安だった。
「いや……シャワーは浴びるよな」
自分に言い聞かせるように呟いたものの、結局、確認しにバスルームまで行ってしまう。
この商売をしていると、猜疑心ばかりが強くなっていけない。
まぁ、〝ＴＩＭＥ〟のマスターに、邦光は籠脱けの名人だと吹き込まれた所為もあるが。
注意していれば、逃げられない。今まで、邦光に逃げられた編集者たちは、注意力が散漫だったのだ。
氷野原はそう信じている。まさか、本当に妖術を使うはずもないし、わざわざ編集から逃れるために脱出マジックを仕込んだりはしないだろう。

バスルームの磨りガラスの向こうに人影があることを確かめ、ついでにリビングと廊下との間のドアも開け放して、キッチンに戻ってくる。

邦光が戻ってきたら、味噌汁を出せるようにしておいた方がよさそうだ。

鍋と一緒に発見できたのは、洋食器ばかり。味噌汁をスープカップに入れるのは、どうしても抵抗があるが、この際、止むをえない。

そう言えば、箸もない。ここまで偏っていると、いっそ見事だ。

「それにしても……」

どんな食生活をしているのだろう。

パスタ用の鍋は氷野原にも見分けが付いたし、円錐形のザルはフランス料理で使うものだったような気がする。

「フレンチとイタリアンか？」

それにしても、極端だ。

味噌汁を飲みたがったあたり、嫌いな訳ではないだろうに、一番簡単な和食を完璧に無視しているのが、不思議だった。

やがて、バスルームのドアの開く音が聞えてくる。

待つまでもなく、バスローブ姿の邦光がキッチンに現われた。

「あー。……で、編集だよね？」



そう問いながら、邦光は眉を顰めて氷野原をつくづくと眺めていた。
しっかり髭をそり、濡れた髪はオールバックに撫で付けられている。こうして見ると、噂通りのハンサムだった。
ただし、氷野原の好みではない。隙がなさ過ぎるのだ。
行動はずさんなくせに隙のない容貌というのは、最低だった。仕事に自分の趣味を持ち出す気はなかったが、やはり、好みの人間の方が点が甘くなる。
その点では、邦光に対しては手心を加えてしまう可能性がないと断言できた。
「どうやって入った？」
予想以上に見事な酔っ払いだったらしい。記憶障害を起こしているとすればアルコールの量が許容量を超した証拠だった。酒飲みの戯言は無視して、スープカップを指し出す。
「はい、味噌汁です。大根と油揚げですけど」
「あ……ああ」
立ったまま、スープカップで味噌汁を飲む姿は、情けない中年オヤジそのものだ。
「うまっ。……出汁取った？」
「普通の粉末に昆布足しただけです」
「そっかぁ……」
舌がいいのか悪いのか。徹底的に中途半端な男を見やって、氷野原は苦笑を浮かべた。

「和食は作らないんですか？」
「て言うか、マズイもん作るぐらいなら、喰いに行った方がいいし……」
欠伸を噛み殺した邦光が、壁に向う。
ばたばたと開けた壁面収納の中には、クローゼットも含まれているのは、中を漁った氷野原も知っている。その中から一通り着替えを出した邦光は、手早く着替えた。
身体を使わない職業の、しかも大酒呑みの三十男にしては、邦光は締まった身体付きをしていた。
ざっくりとしたセーターとウールパンツを身に着けた邦光は、バスローブで髪を拭きながら、キッチンに戻ってきた。
「で、どうやって入った？」
真顔で聞いてくる。
「本当に憶えていないんですか？」
「いや……なんとなく……。誰かの代理とか……アルバイト？」
失礼な、と怒るのは簡単だった。元々、歳相応には見てもらえないのだ。そう言えば、朝も誰かと間違えていた。
「上の部屋の人と間違えていましたよね」
「ああ、大学生。……じゃなさそうだね」

確かに、社会人には見えない恰好だろう。廊下で寝ることになると覚悟していたから、随分とラフな恰好をしているのだ。日頃から、スーツなど滅多に着ないから、カジュアルな服装が馴染んでしまっているかもしれない。

「ご挨拶が遅れました。大陸図書の氷野原晴海と申します」

社会人も四年目ともなれば、名刺を出すのも慣れたものだ。

氷野原は肝心の要件を切り出した。

「あ……ああ。……大陸図書？」

「近藤が入院しまして、代わりに伺いました。急なことですが、よろしくお願いします」

きっぱりと頭を下げる。

名刺を受け取った邦光は、まだ釈然としない顔をしていた。

だが、それは見なかったことにして、氷野原は話を続ける。

「……さっそくですが、原稿の進行状況はいかがでしょう」

「ああ、原稿ね……」

そのなんとなく投げ遣りな言いように、ぴんときた。

おそらく、まだ手も付けていないだろう。

何しろ、前任が〝糸渡りの近藤〟。作家に総てを任せて、ギリギリに受け取るのが日常なのである。催促もしていないだろう。無理やり割り込ませた仕事に、催促もされないの

に取り掛かる作家など、氷野原が知る限りほとんどいない。
しかし、氷野原には綱渡りだけでも充分に心臓に悪いかった。それをさらに糸まで細くする勇気はない。
「パソコンが見当たらないようですが」
「……あれね。壊れちゃったんだ」
「壊れた、ですか？」
締切から逃れるためにやくたいもない嘘をつく作家は、幾らでもいる。マンガ家よりはマシだと慰めてくれた編集もいたが、いい歳をして、贔屓の野球チームが負けたからとか、贔屓のサッカーチームの応援に行ったから、などという言い訳が通用すると思っている輩までいるのだ。作家なら、もう少し旨い嘘をでっち上げろと言いたくなったことも一度や二度ではなかった。
パソコンが壊れたというのは、中でも一番ありふれている。
「いやぁ、ちょっと怒らせちゃってね。思い切り酒ビン投げられて、クリーンヒット」
だが、邦光の場合は言い訳ではないようだ。何しろ、新品のパソコンが届いているのだから、これでただの言い訳だったら、徹底し過ぎている。
「データは？　バックアップは取っていたんでしょうね」
デスクコーナーには、ＣＤ―ＲＯＭだのＭＯだのがしこたまあった。文字原稿だけなら、

フロッピーディスクでもかなりの原稿が保存できる。
「入稿する時に、一緒に記録するからね」
人を食ったような笑みを見せる男は、現在の状況がまるで判っていないようだった。
「取り掛かってください。今すぐ。憶えている分だけでも、書いて。締切は一週間後です。泣いても笑っても、それがデッドです」
肩を竦めた邦光は、再び壁に歩み寄った。コートを取り出す。
「どこに行くんですか？」
「クリーニングに……」
「そんなもの、僕が手配します」
「それと、ファックス用紙が……」
「注文します」
有無を言わせぬ勢いに、氷野原の覚悟を読み取ったのだろう。邦光は大きく溜め息を吐いた。
「……判ったよ。……じゃあ、本を買ってきてくれるか？」
逃げ出す気だろう。
もちろん、氷野原はそんな単純な手には乗らなかった。本なら取り寄せることはできるし、急ぐというなら、便利屋を頼めばいいだけだ。

幸い、玄関のすぐ横がトイレだ。
二十四時間、トイレも睡眠中も、玄関を見張ることができる。風呂が使えないのが難点だが、幸い真冬だ。一週間ぐらい、風呂に入らなくたって、どうということはない。
「厭なヤツだな。……なんでそんなに警戒しているんだ？　ここで見張られてたら、仕事にならないだろう」
うんざりした口調で、邦光が宣う。
それでも、折れる気はあるようだ。クローゼットの下から引っ張り出した箱からパソコンを出して、気乗りしない風に接続している。
「判りました。……では、何時でもお呼びください。僕は玄関にいますから」
逃がさない、という意思表示だ。もちろん、それは邦光にも伝わったらしい。
「……いいけど。食事はどうするんだ？」
「簡単なものなら作ります。世の中にはコンビニもあるし、デリバリーもあります」
「コンビニ？」
如何にも嫌そうに顔を歪める邦光に、氷野原は全開の笑みを投げた。
「大丈夫です。不味くても死にはしません」

5

コーヒーが欲しいと言えば淹れてやり、腹が減ったと言えば食事を出し、資料がいると言えば、書棚から目的の本を探し出す。室内のもので賄えなければ、便利屋に電話する。そして、部屋を出れば、玄関の前から一歩も動かない。

そんなことを丸二日続けた。

一言も急かすようなことは言わなかったが、さすがにここまで徹底してやると、邦光も観念したらしい。本日は起き出してくるなり、ちゃんとパソコンに向かっている。

昨日まで指一本でキーを押しているような有り様だったのが嘘のように、今日のキーを叩く音は快調だ。

小一時間過ぎたところで、コーヒーを出してやると、ディスプレイにはちゃんと文章が並んでいた。

内心、小躍りしたい気分を押さえ付けて、そそくさと廊下に引き上げる。

ようやくやる気になったのに、気を削ぐようなことは絶対にしたくない。

依頼したのは原稿用紙でほぼ百枚程度。

取り掛かれば手が早いと言う噂の邦光なら、なんとでもなる枚数だろう。

近藤もそんなことを言っていたから、そのあたりは信じるしかない。

「なぁ……腹減らない？」
突然、ドアが開いて、邦光が顔を覗かせる。
「え……ああ、何か食べます？」
「三色御飯」
「……三色御飯？」
「鳥のそぼろと卵と、絹さやの乗ったメシ……」
バカに指定が細かいが、モノは判った。
そんなものが、コンビニに売っていただろうか。あったような気もするし、なかったような気もする。
氷野原がコンビニの弁当の棚を思い浮かべていると、邦光は見透かしたように言った。
「コンビニのはマズイからヤだ」
「ということは……僕に作れと？」
「その通り」
しかし、この家には炊飯器がない。
「金は出すから、炊飯器買ってこい」
眉を寄せた氷野原を、邦光はにやにやと笑いながら眺めている。
残念ながら、これくらいで降参する気は毛頭ない。

「判りました。……でも少し時間が掛かりますよ」
「いいよ。後で領収書くれ」
それだけ言って、邦光が引っ込む。
全く、大した我が侭野郎だ。
携帯電話を取り出した氷野原は、今や、すっかり常連になった便利屋を呼び出した。
米と、鳥の挽き肉、絹さや、それに幾つかの品の買い出しを頼むと、キッチンに向かう。
卵はあるし、鍋があれば、メシくらいは炊いて見せる。料理が得意とは言わないが、鍋でメシを炊くのは得意だ。言ってしまえば、飯盒炊飯の延長だった。学生の頃に、鍋で炊き込み御飯を作ったこともある。
メシを炊くのに丁度良さそうな鍋を探し出し、ざっと洗っていると、邦光がキッチンを覗く。
「マジに作ってくれるの？」
「もちろんです」
ただし、味の保証はしない——とは、もちろん心の中で呟くに留める。
休憩すると決めたのか、邦光はキッチンと部屋の境に作られたカウンターに寄りかかって、氷野原を眺めていた。
「もしかしなくても、かなり意地っ張りでしょう？」

妙なことを言い出した邦光は、何が楽しいのか、にやにやと笑っている。
「そうですか？　人並みだと思いますけど？」
「いやいや、そんなことないよ」
「頑固だとは、よく言われますけどね」
「それも、当たりだね」
喉で笑った邦光は、氷野原の目から見てもセクシーだ。
言っていることは他愛のないことなのに、なんだか口説かれているような気になるのは何故だろう。妙にリラックスした口調の所為だろうか。
「三色御飯ができるまで見張ってるつもりですか？　まだ、材料も届いてないですよ」
少しばかり、厭味に言ってやっても、邦光は飄々と受け流す。
「いいじゃないか、ちょっとくらい息抜きしても……。人間の集中できる時間なんて、一時間がいいとこなんだ」
氷野原もそう思ったから、コーヒーを淹れてやったのだ。
インスタントはダメだと初日に言われたから、豆を挽いて、ドリッパーを使って。
まぁ、コーヒーメーカーがないのだから、それ以外には方法はないのだが。
「いつもなら、豆挽いて、ゆっくりコーヒー淹れるのが、気分転換なんだ。……それを、君に盗られちゃったからさ」

――そいつは悪うございました！――。
心の中で思いっきり毒突いたものの、口では穏やかに詫びる。
「すみません」
「たまには、人に淹れてもらうのもいいけどね」
一体、この男は何が言いたいのだ。要するに、氷野原に厭味を並べて、気分転換をしているのだろうか。だとしたら、呆れるしかない。
「たまになんて仰しゃらずに、コーヒーくらい何時でも淹れますから……」
継ごうとした言葉は、ドアのチャイムに遮られた。
「ちょっと失礼します。……材料が届いたみたいです」
玄関に向かうと、何故か邦光も付いてきた。
何が何でも、今は休憩タイムらしい。
代金を支払い、品物を受け取る間も、邦光はぼうっと廊下で待っていた。
まぁ、逃げずに仕事をしてくれるなら、少々の休憩にはもちろん、目を瞑る。厭きれば、後をついて回るのもやめるだろう。
まず、手早く米を洗い、ザルに移す。洋風のスープを漉すためのザルでも支障はない。
だが、鳥のそぼろを作るのには、問題があった。
四角いチーズおろしでは、生姜がおろせない。

つい、溜め息が出てしまう。
「何？　何か問題がある？」
邦光が聞いてくる。
妙に嬉しそうな顔を見上げて、氷野原はにっこりと笑った。
「大丈夫です。臨機応変が料理の基本ですから」
見上げたことで、相手が自分より、十センチは背が高いということを、今更のように気付いてしまった。でかい図体をしたオッさんが、にやにやと笑っている。そのシチュエーションだけで、うんざりとした気分になった。だいたい、かなりの長身なのに身体のバランスがいいところが、憎らしい。
もちろん、表情を隠すために下を向き、意地になって生姜を細かいみじん切りにする。この包丁がペティナイフというのも、気に入らない。何しろ、このキッチンには肉切り包丁とペティナイフしかないのだ。
氷野原も人に自慢できるようなキッチンツールを持っている訳ではなかったが、万能包丁は切れ味のいいものを使っている。
たとえ、切れ味が良くても、小さなナイフはひどく使いづらいし、大きな肉切り包丁は、野菜を切るのには向いていない。その点、万能包丁は偉大だ。大抵のものは処理できる。
「上手いもんだねぇ」

人が悪戦苦闘しているというのに、悪気なく褒めた挙げ句に、ぱちぱちと手まで叩いてくださる邦光に、氷野原はにっこりと笑って見せた。

「先生も、料理なさるんでしょう？」

「それ、やめない？」

「は？」

間抜けに声を出した氷野原に、邦光が片眉を引き上げてみせた。

器用なものだ。

欧米の小説ではよく出てくる表現だが、日本人はまずやらないのが、この片眉を上げるという表情だった。何故なら、大抵の日本人が片眉だけを上げることができないからだ。

ところが、邦光はいともたやすく片眉だけをひょいと上げてみせた。

「先生ってヤツ。……そんなベテランでもないし、弟子がいるわけでもない。そもそも、先生って呼ぶなって教わらなかった？」

古いタイプの編集者が言うことだ。氷野原も、以前にそう注意されたことがある。

だが、現実には先生と呼ばれないと臍を曲げる作家もいるし、先生と呼ばれて厭がる人間は少ないから、誰に対しても先生と言っている。

教師を先生と呼ぶのと同じで、氷野原にとっては単なる職業に対する符丁でしかない。

別に、ポリシーがあって言っている訳ではないので、呼び方を変えるのに否はなかった。

「……そうですね。失礼しました。……では、邦光さんでよろしいですか」
「青海でも邦光でも」
「では、邦光さん」
「はい」
「ウインクできますか？」
「ウインク？」
ばちっと音がしそうなウインクを披露される。
邦光にとっては、唐突な話題だったはずだが、案外付き合いがいい人物のようだった。片眉を引き上げられるほどの表情筋を持っているなら、同じく日本人が苦手だと言われているウインクもできるのではないかと思っただけなのだが。
律儀に応じてくれた男を、素直に褒める。
「器用ですね」
「できない？」
ウインクをして見せる。氷野原はウインクしたつもりでも、両目を瞑ってしまうことは、自分でもよく判っている。
「……なるほど……」
ふっと、唇の端だけが上がった。どうやら、それが邦光の笑いらしい。

あくまでもクラッシックタイプのハードボイルドだ。ゆで過ぎて、硫黄の匂いがするかもしれない固ゆで卵。

趣味じゃない男の行動を観察するよりは、料理に専念する方が良さそうだ。

きっと、三色御飯を食べさせるまでは、氷野原は仕事を再開する気はないだろう。

少し早い気がするが、米と水を鍋に入れて、火に掛けた。

小鍋で味醂を沸騰させて、鳥の挽き肉と生姜のみじん切りを入れる。割り箸で勢いよく掻き混ぜて解してから、醤油を加えた。

「見てて楽しいですか？」

「楽しい」

きっぱりと言い切った邦光は、スプーンで挽き肉を掬った。

真剣な顔をして、味見をしている。研究熱心な男ではあるらしい。和食を作らないのは、今まで、基本を知らなかったからだろう。身近に和食を作る人間がいなかったに違いない。邦光は見るからに、作るとなれば完璧でなければ気がすまないタイプだ。

小さなフライパンに湯を入れて、筋取りをした絹さやを茹でる。

「どうしてフライパンなんだ？」

「手順を間違えただけです。小鍋がもうないみたいだから」

「ソースパンなら、オーブンに入ってるぞ」

「あ……。そうなんですか」
ガスレンジの下に、オーブンがあるというセッティングは、馴染みのないものだ。しかも、そのオーブンがむやみに大きいときている。中を見ると、確かに片手鍋が重ねて収納されていた。
持ち手に至るまで総て金属製の小鍋は、そのままオーブンに入れるためのもののようだ。
「じゃあ、次から使わせてもらいます」
色良くゆで上がった絹さやを細長く切ると、水に昆布を入れて、コンロに掛けた。
「もう三日だよな。よく厭きないな」
「そうですか？」
監視役と家政婦役を兼任しているのだ。部屋に籠り切りということに気詰まりは感じても、厭きるような余裕はない。
沸騰寸前に昆布を引き上げて、粉末のカツオダシを入れる。
「ふーん。……なんか、中途半端に丁寧だね」
「昆布入れて湯を沸かすのは手間じゃないでしょ？　けど、カツオ節をたっぷり入れるってなったら、財布も痛いし、漉すだのなんだのって面倒だし……」
味醂と酒、塩と醤油で味を調える。
「味醂まで買ったんだ」

「……酒もですよ」
「え？　確か冷蔵庫に……」
邦光の視線が、言葉通り冷蔵庫の方に向けられる。
「生酒なんか、料理に使っても美味くないですよ」
「へえ、そうなんだ」
聞いているのかいないのか。いい加減な相槌を打つ男の前に、小さな瓶を突き出す。
「食べられます？」
邦光が思い切り眉を寄せた。
意表を突くことには成功したようだ。
「お吸い物の具になるものって注文したら、こんなものを買ってきてくれたんですよ」
「ジュンサイ？」
「食べたことあります？」
「ないな……」
「まぁ、そうでしょうね。そんなに癖はないから、ぜひ、チャレンジしてみてください」
この瓶を見た時には、氷野原も驚いたのだ。スーパーの棚に並んでいたのは知っているが、手を伸ばしたことはない。だが、便利屋の兄ちゃんは、お吸い物の具と言われて、真っ先にジュンサイを思い付いたらしい。

「……ひょっとして、和食が得意？」
「どっちかって言うと、そうですね。わざわざ作るのは、ここいう簡単なものが多いですよ。邦光さんはフレンチ？　イタリアン？」
問い返してやると、邦光は首を傾げた。
「どうだろうな。……バイト先で憶えたヤツだから」
そう言えば、邦光は以前、大学生の頃に飲み屋でアルバイトをしていたというエピソードを披露していたことがあった。その店が、こんな巨大なオーブンを使うような料理を出していたのだろうか。
「なんか、本格的ですよね」
「まあな。付き合う男は、たいてい料理ができるヤツだったし……」
男、と断定するあたりが嫌だ。邦光本人がクラシカルなハードボイルドでない唯一の点は、恋人の性別を選ばないというところだろう。
「女は？」
「料理自慢をする女ほど、信用できないからな。ろくでもないものを食わされるか、紙切れがセットで付いて来るか……」
「……なるほど……」
結婚を迫られるのだろう。それもおそらく、一度や二度の経験ではではなさそうだ。

まぁ、これだけのハンサムである。作家という職業も、彼女らにとってはプラス材料に違いない。実際は、気難しい変人の相手をすることになるのだが、男のレベルを張り合うタイプにとっては美味しい相手だった。

「結婚したい女とは結婚したくなくて、結婚なんて、という女と結婚したい訳ですか」

つい、いらぬことを言ってしまうのは、恋人が欲しいとさえ思えなくなってしまった自分が哀れに思えたからかもしれない。

邦光など、一夜の恋人も含めて、選り取り見取りなのだ。

その、華やかな生活の所為で、恋人に振られ、新しい恋人を捜す余裕もなくなった編集がいるかもしれないと思うと、意味もなく寂しい気分になってくる。

氷野原が振られたのも新しい恋人を捜せないのも、邦光の所為ではないし、もちろん他の作家の所為ではない。現実に、氷野原よりずっと忙しい近藤は、結婚を計画している。

「君。……凄く好みだ……」

しばしの沈黙の後、ひどく唐突な科白を、邦光は囁いた。

半オクターブ下げた声は、口説き用のものらしい。確かに、ぞくっとするようないい声だ。余程特別な趣味でもない限り、女はもちろん、男だって引っ掛かるだろう。

だが、氷野原は、特別な趣味を持っていた。

「残念です。僕は癒し系が好きなんですよ」

ひょいと、眉が上がった。やっぱり、器用な表情筋だ。どうでもいいことを考えながら、氷野原はぼんやりと邦光を眺めていた。
ゆっくりと、男の少し薄い唇が開く。
だが、声が発せられる前に、キッチンタイマーが鳴った。
ふと、現実に立ち返り、飯を炊いている鍋の火を落とす。
鳥のそぼろを温めて、フライパンに卵を割り入れた。
「油は？」
「炒り卵に油は使いません」
菜箸がないので、割り箸を纏めて持って、手早く掻き混ぜる。
濡れ布巾の上に置いて、半熟状態を保つ。
ジュンサイを茹でてスープカップに盛り、鞠麸と共にお吸い物を手早く造る。
「御席にどうぞ。……すぐに運びます」
「……どうも……」
ようやく、邦光が離れて行く。
ほっと息を吐いた氷野原は、三色御飯を仕上げると、お吸い物と共にテーブルに運んだ。
スープボウルに三色御飯を盛り、スープカップにお吸い物という、美的センスを疑うしかないものだった。しかも、箸の代わりにスプーンを使っていた。

「あ……うまい。……氷野原くん、料理のセンスあるな」
出汁のもとを使ったお吸い物を褒められても、全然嬉しくない。具が下味を必要としないジュンサイと鞠麸では、塩味の加減が趣味に合っていたというだけではないか。
不満そうな顔をしていたのか、三色御飯を口に運んだ邦光が真剣に味わっている。
「なんでだ？」
「え？　お口に合いませんか？」
慌てて、自分でも食べてみた氷野原は、眉を顰めた。会心作とまではいかないが、自分にしては上出来の方だと思う。何より、米が思ったより上手く炊けていた。
焚き立ての飯に、鳥そぼろ。不味いはずがない。
「ウマイ。……なんでこんなに美味いんだ？」
「さぁ……。ウチの親が作るのと、同じ味ですけど……」
不味くはないと思う。しかし、美味いと褒めてもらえる程上等の味だとは思わない。
「そうか……」
何やら、酸っぱい顔をした邦光が、三色御飯をガツガツと掻き込んでいた。
「お代わり、ある？」
あまり腹が膨れると、仕事ができなくなるのではないかと考えて、控えめに盛ったのが裏目に出たらしい。

「ありますけど……。そんなに食べて大丈夫ですか？」
「そんな量か？」
中年男には、充分過ぎる量だと思う。
こんなことなら、もう一皿、消化にいいものを作っておけばよかった。素人の悲しさで、サイドメニューまでは気が回らなかったのだ。
もっとも、邦光はお吸い物すら無視していたから、気に入ったものは、そればかり食べるというタイプなのかもしれない。
まるで子供だ。
ハードボイルドの登場人物を気取る男の意外な弱点を見付けて、氷野原は内心で笑っていた。
機嫌良く仕事をしてもらうためには、これはいいヒントになるかもしれない。
とにかく、一刻も早く仕事モードに入ってもらわなければ。
スープボールにふんわりと飯を盛りながら、氷野原は策略をめぐらしていた。

6

「あー！　くそ！　ダメだ！」
雄叫びが聞える。
草木も眠る丑三つ時。
快調にキーボードを叩いていた邦光が、ばっと立ち上がった。
キッチンのカウンターに凭れるようにして、床に座っていた氷野原も立ち上がる。
「コーヒーですか？」
つかつかと歩いてきた邦光が、ばっと、氷野原の肩を掴んだ。
「君だ！」
「はぁ？」
「俺を監禁しておくためなら、何でもするんだろう」
監禁ではなく、缶詰というのだ。
頭の中で、邦光の言葉に赤入れする。
「何をすればいいのでしょう」
「セックスだ」
「はぁ？」

素っ頓狂な声が上がってしまう。
「男も大丈夫なんだろう」
「はあ……」
大丈夫も何も、氷野原は女はダメだった。友人にはなれても、恋愛対象にはならない。邦光が何を思って誘いかけているのか知らないが、嫌がらせのつもりなら、お門違いだった。
氷野原の恋愛対象は男だけである。子供の頃から、好きになるのは男ばかりという、筋金入りのゲイだった。何かトラウマがあるとか、そんな記憶はないから、本当に生まれつきだろう。
あまり、自分の性癖について悩んだことはないから、真剣に考えてみたこともなかった。特に周囲にカミングアウトした訳ではないが、さり気無く匂わせているおかげで、みな面と向かって聞いてくることもなく、女を紹介してくるような友人もいない。
その点に置いて、邦光とセックスするのに抵抗はない。
ただし、趣味においては、話は別だ。
「じゃあ、いいだろう？」
「ちょっと、待ってください。それとこれとは……」
「じゃあ、一日、目を瞑ってくれ。これから店に行って」

「ダメです！」
間髪入れず、きっぱりと言う。
冗談じゃない。原稿に行き詰まった邦光を放流したら、帰ってこないに決まっている。それこそ、糸渡りの近藤が青くなるような時期に原稿を寄越されても、氷野原は何もできないのだ。
「そのお相手をここに呼び出してください。僕はドアの前で待ってますから」
こんなことで、逃がしてたまるものか。コトが終るまで待っていて、相手を追い出すぐらいのことはしてみせる。
「君がいいんだ……」
「餌付けされたんですか？」
「そうかもしれない。……俺は胃袋で惚れるタイプだから……」
何を偉そうに言っているのか。男としては、かなりみっともない部類に入るその言葉を、邦光は堂々と吐いていた。
「じゃあ、ゲイのシェフを紹介しますよ」
「だから、君がいいんだ」
どうやら、切羽詰まった状態らしい。
どうしても、〝君がいい〟ではなく、〝君でいい〟に聞えてしまうのだ。

これが、女に言ったのなら、セクハラだと問題になるだろう。しかし、男が男を口説いたというのは、笑い話になる。特に、両方がゲイ、もしくはバイセクシャルだった場合は、笑い話ですらなかった。ゲイは節操がないものだと、大抵の人間が思っているのだ。

趣味ではないが、いい男だと思える相手に迫られた、というのは嫌がらせになるのか。

はっきり言って、微妙過ぎる。

「臭いですよ、きっと……。ここ、三日も風呂に入ってないし……」

口籠りながら言い訳する氷野原を、邦光は苦笑とともに眺める。

「風呂ぐらいいつでも——そうか、見張ってたんだよな」

「まぁ……そんなものです」

「だったら一緒に風呂に入ろう」

くらっと、目眩いを憶えた。

「……かなり、キテますね……」

「キテるよ。……こんな、生殺し状態で……」

「生殺し？」

まったく心当たりがない。

だが、どうやら邦光はかなり切羽詰まっているようだ。

氷野原は溜め息を吐くと、邦光をちらりと見遣った。

ここで、小一時間、付き合ってやれば原稿が書けると邦光が言うのなら、付き合ってやろう、と腹をくくる。
「判りました」
「よし！」
何が、よし、だ。
次の瞬間には氷野原の腕を掴んで、バスルームに引っ張って行かれる。
正直、みっともない、と詰りたいところだが、それではぶち壊しだ。
今更、逃げ出す気はないから、せめて、もう少し冷静に行動してほしい。
それとも、そんなことを考えている氷野原の方が、冷静すぎるのだろうか。
これではまるで、やりたい盛りのガキのようだ。
「ちょっと……」
「なんだよ。怖じ気付いた？」
意地悪く聞き返してくる邦光を、呆れ顔で見返す。
朝に剃ったはずの頬に、黒い影がさして、それがなんともセクシーだ。
別の場面で誘われたら、簡単にその気になるだろう。
「そうじゃなくて……お先にどうぞ……」
「おいおい。まさか、俺がシャワー浴びてる間に、逃げる気じゃないだろうな」

——んな訳ねぇだろ！——。
氷野原は、思わず心の中で叫んでいた。
心の中の叫びを押し殺し、冷たく言い放つ。
「僕がここで何してると思ってるんですか」
「そりゃ、そうだ」
自嘲気味に笑った邦光は、あっさり手を離し、さっさとバスルームに行ってしまう。
本当にやる気満々だ。
シャワーを浴びることで、正気を取り戻してくれればいいのだが、多分、期待薄だろう。
と、言うより、この場合は正気に返られる方が始末が悪いかもしれない。手近で済ますよりは、好みにあった男なり女なりを捜しに行こうと、決心してしまうかもしれないのだ。
如何に有能な編集者でも、書けないと言い張る作家に、無理やり書かせることだけは不可能だった。おだてようが何をしようが、書く気になってもらうしかないのだ。
「確か……」
キッチンに戻って、引き出しを漁る。
「あった……あった」
ビニール袋に入った結束バンド。
にっと笑った氷野原は、中から数本を取り出しすと、緩い輪にした。

どうせ、邦光は鴉の行水だ。すぐに出てくるに決まっている。
後は、自分がバスルームにいる間、如何にして邦光を逃げられないようにしておくか。
せっかく、何日か振りに風呂に入れるのだ。邦光の動きを気にしながら、シャワーを浴びたくはない。この際、本当に邦光と寝ることになっても、別に後悔はなかった。
邦光に逃げられるよりはマシだ。
恋人は今現在いないから、操を立てる相手もいない。
今まで、身体で接待したことはないが、正直言って意に染まないセックス一回と、原稿を天秤に掛けたら、どちらが重いかは考えるまでもなかった。
はっきり言って、身体を餌に仕事を取るなど、本意ではない。
けれども正直に言えば、絶対に寝たくない相手ではないところが、ミソだった。困ったことに、一度くらいならいいか、などと思う程度にはいい男なのだ。
奇麗なおねぇさんに誘われて、趣味ではないからと断る男が少ない様に、邦光のようなタイプの男の誘いを断るゲイの男は少ないと思う。
実際、氷野原自身、プライベートで男日照りが続いているのもまずかった。
「困ったね……」
そんなことを考えている間に、邦光がバスルームから出てくる。
バスローブを羽織っただけの邦光は、髪から水を滴らせながら、キッチンにやってきた。

思った通りの鴉の行水だ。一応、不精髭がなくなって、見た目はこざっぱりしていた。
さて、どう騙くらかすか。
「さあ、出たぞ」
どうやら、シャワーを浴びたくらいで、気は削げなかったらしい。
小さく首を竦めた氷野原は、指先で邦光を招いた。
「何？」
「後ろを向いてくれませんか」
訝しげな顔をしながらも、邦光は背中を向けた。
「ついでに手を後ろに」
「ええ？」
「ダメですか？」
ちょっとばかり、甘えた声で言ってみる。
「いや……いいけど」
邦光は明らかに戸惑いながらも、後ろに手を回す。
その両手の親指を纏めると、結束バンドで絞めた。親指手錠というヤツだ。
「お……おい」
「まぁまぁ」

邦光の背を押して、ベッドまで連れていく。
「もしかして、こういうプレイが趣味？」
「お望みなら、付き合いますけど……単なる逃亡防止です」
マットの上に座らせると、邦光は態とらしく斜めに氷野原を見上げた。
「傷付くなぁ……マジで口説いたのに……」
「そうだったんですか。では、ゆっくり待っててくださいね」
言いながら、ついでのように両足の指も結束してしまう。
「――やり過ぎじゃない？」
「脱出の名人と聞きましたので」
少々厭味を込めて言ってやると、邦光は苦笑を浮かべた。
「まぁ、いいや。さっさと風呂入ってこい！」
これでも、やる気が萎えないあたり、いい根性をしている。
「はいはい」
少しやり過ぎかもしれないが、これで逃げられる心配なく、シャワーを浴びられる。
本当なら、湯船に浸かって、三日分の疲れをすっかり落としたいところだが、さすがに、それは諦めた。あまり待たせると、臍を曲げてしまいそうだし。
ベッドに座っている邦光をちらりと見遣って、氷野原はバスルームに直行した。

7

シャワーを浴びて、部屋に戻ると、邦光は最後に見た格好のまま、律義にベッドマットに座っていた。

バスタオルを借りて腰に巻いただけの姿で邦光の前に立つ。邦光は目を細めて、値踏みするように見たものの、どうやら、野郎の裸に、戦意喪失ということはないらしい。

「遅いぞ。……俺と寝るからって、隅から隅まで奇麗に洗ってたのか？」

あまりに自信たっぷりな態度に、思わず苦笑した氷野原は、邦光の前に膝を突くと、その頭を胸に抱えた。

「……いい子で待ってましたね。……ご褒美をあげましょう」

精々、声を響かせてやる。

途端に、邦光の身体がびくりと緊張した。

やはり。

邦光はゲイではない。バイセクシャルというより、ただひたすら節操がないというだけ。相手が男だろうと女だろうと、やることは変わらないというタイプのようだった。

ベッドでの主導権は、常に自分が握っていたのだろう。まさか、男に押し倒されるなどと、考えたこともないに違いない。

だが、手足を戒められた状態では、氷野原に主導権があると認識したようだ。
「……俺がやられるわけ？」
「大丈夫です。何から何までやってさしあげますよ」
ハードボイルド男が思い切り脅えている。それを必死で隠そうとしているのが、おかしくてならない。
ゆっくりと屈み込んで、臍にキスする。
ひくひくと動く腹筋が、妙におかしかった。
逃げ出さないために手足の親指を縛られたと信じていたらしい。
スパイだの国家の陰謀だのという話を書いているわりには、迂闊なヤツだ。
「邦光さんの話だったら、ナイフで抉られてますよね」
「……と、思わせて、美女が助けてくれるっていうのもあったな……」
「そうですか？」
にっと笑った氷野原は、ハサミを取り出した。
臍から下に向かって、キスを落としていく。
感心なことに、邦光は縮んではいなかった。どうやら、ちょん切るとは思っていないようだ。
足の指を止めた結束バンドを切る。

「あーあ。これで筋肉痛っていう言い訳はなしか……」
呑気なことをいう邦光の背後に回って、親指の結束バンドを切った。
おとなしくしていたらしく、傷も付いていない。
無駄な努力はしない主義のようだ。
こういう人間が、一番扱い辛かった。何が何でも、自分の土俵でしか勝負をしない。立場が悪ければ悪いなりに凌いで、最終的には自分のテリトリーに相手を引き込んで喧嘩をする。
きっと負けは認めないタイプだ。
「放置プレイする気かと思ったよ……」
「放置プレイ……ですか？　何でしたらリクエストに応じますけど」
「冗談だろ」
肩を上下させた邦光は、ゆっくりとマットの上に座りなおす。
「後でつまらなかったとか言っても、責任取りませんよ」
幸制のつもりで言ったのに、邦光は小さく首を竦めただけだった。
どうせなら、マグロになると宣言してやれば良かっただろうか。
「それって、俺に責任があるってこと？」
口の減らない男である。

反撃するのもバカバカしくなって、氷野原は口を噤んだ。
唇の端で笑った邦光は、ベットマットの真ん中に座った氷野原に、にじり寄ってくる。
「なんか、照れるな……こういうの……」
誘ったのはそっちだろう、という代わりに、にっこりと笑い返す。
とはいうものの、雰囲気で雪崩れ込むとの違って、ちょっと妙なのは確かだ。
けれど、時間の方が気になる。
いつまでも、だらだらと遊んでいたら、邦光の思う壺だ。
「照れてる場合じゃないんじゃないんですか」
「そりゃそうだ」
邦光が笑いながら、氷野原の濡れた髪に指を這わせる。
それなりにムードを大事にしているのか、本当に照れているのか。まだるこしい。
こちらから仕掛けないと、埒が明かなそうである。
あくまで、氷野原の最終目的は原稿を書く気になってもらうことだ。無駄な時間を掛けたくはない。
思い切って、手を伸ばし、バスローブの胸元に忍び込ませた。
あまり暖房を利かせていない部屋の中で、肌がすっかり冷えている。
「寒くないですか……」

邦光は首を竦め、囁くように聞いた。
「キスしていい？」
セックスの時に、キスをしないなんて馬鹿げてる。
答える代わりに、氷野原の方から顔を寄せた。
軽く唇を合わせて、相手の目を見詰めながら、口づけを深くしていく。
口中を舌が巧みに愛撫し始めた。
はっきり言って、上手い。
妙な対抗意識が湧いてくる。
口内を探る舌を捕えて、柔らかく咬んでやった。
しばらくはそんな攻防を続けていたが、さすがに息が上がってくる。
小さく息を吐いた邦光が、笑いながら言う。
「……喧嘩じゃないんだから……」
氷野原は鼻先で笑って、男の薄い唇の端に口付けた。
そのままマットに押し倒し、顎、首から胸元まで舌先で擽りながら、辿る。
意外に肌は滑らかで、若い張りがあった。虚仮威し(こけおどし)でなく張り詰めた筋肉は、触っていても心地いい。
ちらりと顔を見やると、邦光は苦笑を浮かべていた。

その顔に、笑みを返して、更に下肢に手を伸ばす。
中々立派な持ち物だ。
指を這わせながら、唇を寄せる。
と、不意に髪を掴まれた。
「……俺にやらせろよ」
言いながら、氷野原を乗せたまま、上半身を起こす。
唇の端に、少し荒れた唇が触れた。
氷野原がしたのと同じように、唇が肌を啄ばんでいく。
違うのは、指の方も休んでいないことだ。脇を擽るように撫で上げる手が、何かを捜すように動いている。しつこく胸を彷徨う手が、やがて、諦めたように下に降りていく。
遠慮がちに伸ばされた指が、確かめるように性器に触れる。
少しばかりぎこちない指の動きが、返って氷野原を煽った。
思った通り、サービス精神旺盛な相手ばかりと付き合っていたようだ。少なくとも、男に関しては、奉仕されるより、する方が得意な経験豊富な連中が相手だったと、見た。
大袈裟に声を上げたり、感じるポイントに導いてやったりはしない。と言って、無理に熱を上げなければならないほどヘタクソでもないし、下手に盛り上がられても困るのだ。
すっきりして、さっさと仕事に戻ってもらいたい。

そんな計算ができる程度には、大人なつもりだった。
同じ男なだけに、余計な言い訳も口説き文句もいらない。どうせ溜りすぎて、周りが全部運命の美女に見えているだけなのだろうから、すっきりすれば正気に戻るだろう。
煽られていく身体とは別に、頭の中ではそんな計算をしていた氷野原だったが、それもだんだんとどうでもよくなっていく。
この男は、上手いし、優しい。
テクニック云々以前に、他人の反応を見るのが上手いのだ。こんな風に扱われたら、大抵の人間は夢中になるだろう。
「んっ……」
熱心な奉仕に、思わず息が漏れる。
「いい？」
前と内に執拗に愛撫を施しながら、問う。
「いいよ……もう……」
氷野原の脚を肩に掛けた邦光は、膝にキスを落とした。
ゆっくりと、氷野原の表情を見守りながら、入ってくる。
まるで、何も知らない子供でも相手にしているかのように、注意深く、傷付けないように慎重に。

その上、気遣う声まで掛けてくる。
「大丈夫？」
ふっと笑った氷野原は、上体を起こして邦光を抱き締めた。
「子供じゃないよ……」
耳に、息を吹き込んでやる。
途端に、熱いものがびくりと動いた。
意味もなく可笑しい。
いい歳をした大人の癖に、反応が素直だ。
くすっと笑う。
途端に、邦光の表情が曇った。
確かに、ちょっとマナー違反だったかもしれない。
そう反省した氷野原は、邦光の耳を軽く咬んだ。
「お姫様じゃないんだから……。楽しもう」
きゅっと、締め上げてやる。
本人とは裏腹に、素直な反応を見せるそれが、びくびくと暴れていた。
「……みたいだな」
ゆっくりと、動き始める。

それでも、氷野原のいいところを捜して、逐一反応を確かめていた。焦れったいほど丁寧な動きは、邦光の余裕を現わしている。

もっと、乱れさせてやりたい。

自分をコントロールすることに自信を持っている男に、無我夢中というヤツを味わわせてやりたい。

そんな衝動に駆られ、氷野原は奇麗に筋肉の発達した背中に指を這わせた。弱みを捜し、同時に、邦光の動きに逆らって、腰を回した。

「このっ……」

邦光が呻く。

負けず嫌いの男は、身体を起こすと、氷野原の肩をマットに圧し付けた。

ゆっくりと腰を回しながら、小刻みに突き込んでくる。

持ち物を存分に使うテクニックはさすが、色男だ。

サイズに自信がある男に限って、ただ乱暴なだけだったり、何の工夫もなかったりするのに、邦光は相手を喜ばせようとしている。

「ああっ……。いい……」

邦光の努力に報いるためにも、声を漏らしてやる。

口を開き、熱を逃がしながら腰を振って、さらに熱を煽る。

「このっ……じゃじゃ馬っ」
邦光も感じてくれているらしい。
「もっと……もっと……くれっ……」
手を伸ばす。
汗の浮いた胸に触れる。
奇麗に筋肉を纏った胸を撫で回す。指に触れたモノを抓ると、邦光が身体を強ばらせた。
「んっ……」
激しく突き込んでくる。
その動きは、氷野原に細やかな勝利感を与えてくれるものだった。

べたべたと引っ付いてくる大男を引き剥がして、パソコンの前に座らせる。ドアを開けたまま手早くシャワーを使って、慌ててリビングに戻った氷野原に、邦光は力ない笑みを見せた。
「……そんなに信用ない？」
「自業自得だと思いませんか？」
溜め息を吐いた邦光が、パソコンに向き直った。



ぽちぽちと、キーボードが音を立てる。
あまり露骨に信用していないと表明した所為で、どうやら拗ねているらしい。
ハードボイルド男が拗ねるというのも、妙な図だ。近藤の見舞いに行ったら、是非披露してやろう。手術は成功したという話だから、見舞いには笑い話を持っていくに限る。などと考えている氷野原の頭の中を読んだように、邦光が背中を丸めた。
「……俺、そんなに下手だった？」
「いえいえ。久しぶりに堪能させていただきました」
「……そんな言い方……」
また拗ねている。
無性におかしくなった氷野原は、笑いを噛み殺しながら邦光に歩み寄った。
「男相手にロマンティックを求めないでください」
そんなことを言いながらも、ついつい抱き締めてしまう。
気分よく仕事をしてもらうため、などと言い訳しながらも、子供っぽい反応を見るのが楽しくなってしまった。ただし、恋人にしようとは思わない。
楽しいのは確かだが、逐一恰好をつける邦光を見ていると、気が休まる隙がないのだ。どうせなら、一緒にいてつられてだらけてしまうような男と付き合いたい。
究極の癒し系と言えばいいのか。

表情一つとっても、逐一恰好つけが激しい邦光は、揶揄って遊ぶには楽しい相手だが、決してそれ以上の感情は湧いてこなかった。
「……これからも付き合ってくれる？」
「監視はこれきりにしたいですね」
「それは……賛成だ」
うんうんと頷く邦光は、氷野原の腕に頬を擦り寄せた。
セックスの相手に、礼儀を尽くすのも邦光の流儀なのだろう。原稿を書いている間は存在を主張していた不精髭を、奇麗さっぱり剃り落すのも、流儀の一つらしい。
腕を擦る頬が、するすると滑りが良い。
それが、妙に引っ掛かった。
脳裏を過った疑問の正体が判らないまま、しばらくは邦光の好きにさせておく。
「外でデートしないか？」
邦光が不意にそんなことを言い出す。
「原稿が終われば、いつでもお付き合いしますよ」
あっさりとそんな返事が、氷野原の口を突いて出た。
「本当か？」
「ええ。……だから、早く原稿を上げてください」

「判った。……なるべく急ごう」
ぴしっと背筋を伸ばした邦光が、キーボードを叩き始める。
どうやら、ニンジンをぶら下げられた馬の気分になっているらしい。
まだしっとりと濡れている頭を撫でた氷野原は、夜食を作るためにキッチンに戻る。
キーボードを叩く音は、途切れることなく聞えていた。

8

原稿を取ろうとしている編集者の言葉など、信用する方が間違っている。無事に原稿を取るためなら、脅しも泣き落としも平気で使う。懐柔作戦など、初歩の初歩だ。

作家の家に泊まり込み、おさんどんを熟すくらいは、作戦とも言えないぐらいなのだ。

「あー。近藤さん？　大丈夫。邦光さんの原稿は、ちゃんと取ってきたから。……安心して、おとなしく入院していなよ。……ふらふら、勝手に出歩いてないだろうね」

近藤の入院した病院は、もちろん携帯電話の使用は禁止されていた。

病棟に一台しかない公衆電話の使用は、医療スタッフの許可がいるらしい。近藤の場合、ベッドを抜け出す許可だろうが、焦っていないところを見ると、無断で掛けてはいないようだ。

『本当にちゃんとした原稿なのか？　一枚めと最後しか字が書いてないなんて言うなよ』

「なんだ、それ。銀行の札束のダミーじゃあるまいし」

『やられたヤツがいるんだよ。珍しく早くもらえたって、喜び勇んで会社に帰って、見てみたら真っ白ってな……』

それは、焦っただろう。その時の編集者の心境は想像できるが、ちょっと確認すれば判ることなのに、うかうかと騙される編集者も間抜けである。

それにしても、本当に子供みたいなヤツだ。邦光という男は。
目の前の担当を追い返すことしか考えていなかったに違いない。
思い切り溜め息を吐いた氷野原は、ぱらぱらと原稿を捲った。
「フロッピーももらったし、ちゃんと、字は埋まってる」
『そうかぁ。……で、どうだ？　面白い？』
そう言われても困る。
元々、趣味ではないものを面白いかと言われても、判断のしようがない。まぁ、世の中でベストセラーになった本のほとんどが、どこが面白いのか判らないのだから、気に入らないと言っても、売れないという意味ではないのだが。
「……なんか、センチな話だ」
『はぁ？』
「黴（かび）が生えそうなぐらい湿ってる」
正直に言ってやったのに、近藤は喚き出した。
『なんだそりゃ！　ああ、くそ。……読みたい。読みたいぞぉ……』
元々、近藤が気に入って口説き落とした作家だ。自分が担当するはずだった作品を読みたいと言うのは、判らないでもない。
『なぁ、ひーちゃん』

ぞぞぞっと、背筋が粟立った。
「よせ！　気持ちが悪い」
『見舞いに来てくれよォ』
「忙しい。判ってるでしょ？　あんたがいない分、こっちに仕事が回ってくるんだ。呑気に入院してて、年末進行だってことまで忘れてんじゃないの」
本当に忙しいだけに、つい言葉もぞんざいになる。
『くそぉ……。どんな魔法使ったんだよぉ』
「おとなしく寝てなさいって。退院したら、教えてやるから」
そう言って、氷野原は電話を切った。
雑然とした、と表現したのでは余りにも控え目過ぎる、倉庫のような室内を見渡す。壁と言う壁にはスチール棚が並べられ、種種雑多な雑誌や単行本、ファイルが突っ込まれている。部外者が見れば、ゴミ溜めのような棚も、住人としては必然の配置なのだ。
貰った原稿の予告原稿を作ってぶち込んだら、まず、今月号を校了。同時に、原稿の行数チェックをして、挿し絵の手配。タイトルの字体や級数の指定をしつつ、多分ドンケツ入稿になるだろう作家の、進行具合を確かめて、イラストレーターに泣きを入れて。
それら総てが、年末に休みになる印刷所のスケジュールに合わせて、少しづつ早まっている。普段でも殺人的なスケジュールがさらにタイトなものになり、常軌を逸していた。

他にも、やる事は山ほどある。
しかも、普段なら、近藤のやるべきことの半分が、全部こっちに回ってきているのだ。
残りは女ながら、この編集部で誰よりやり手の副編集長の笹木に押し付けられている。
何しろ、この第二編集部にいるのは編集長と副編集長、近藤と自分。後はアルバイトくんだけだ。もちろん、単行本の発行も、別に編集人がいる訳ではない。編集長は他の雑誌の編集責任者も兼任している。
制作部が他にある訳ではないから、単行本を出すことになれば、デザイナーとの交渉も自分たちの仕事だ。雑誌の予告のレイアウトなどは、副編集長がやっている。
当然一人欠けたら、それはもう、大騒ぎだった。
「氷野原！　変なファックスが来てるぞ！」
入り口近くにある、大きなファックスがを覗き込んだ中年の男が、大声で呼ばわった。
この忙しい時に、ファックスごときで騒いでほしくない。
席を立った氷野原は、わざわざ呼び付けてくださった編集長を憮然と見やる。
「変なファックスですか？」
最近は、大抵の連絡はメールで行われる。わざわざファックスを使うのは、少数派だ。
ファックスに歩み寄った氷野原は、ゆっくりと吐き出される大きな文字の羅列に眉を寄せた。

「邦光さんか？」
腕組みして、ファックスを眺めている編集長は、眉間に皺を刻んでいた。
「……お前、何やったんだ？」
『デートはどこにする？　俺はいつでもオッケーだ。すぐに返事をくれ』
「デートねぇ……」
「そんな約束したのか？」
編集長が真剣に聞いてくるには、理由がある。普通なら、ジョークで済ますだろうが、氷野原がゲイだということを知っているから、どうしても内容通りに受け取るのだ。
ついでに言うなら、邦光がバイなのは編集長も知っている。
「原稿が上がったら、デートに付き合うって言ったような言わないような……」
原稿を取り上げるために、あることないこと言ったと、白状する。もちろん、それを責める編集長ではなかった。
「ほとんど一週間、泊まり込んでいたんだっけ？」
「そうです。もう、完全に家政婦でしたよ。……邦光さんて、餌付けがきくタイプですよ」
「ほお……」
この業界の人間の常として、編集長はゲイを理解している。少なくとも、男なら誰でも襲うなどと思ってもいないし、氷野原のストライクゾーンが狭いことも理解していた。

「邦光さんて、もてるんだってね」
唐突にそんなことを言われても、困る。
個人的な付き合いなどないのだから、邦光に付いて知っているのは貼り付いていた時に見聞きした分だけだ。
「さぁ、どうでしょう。見張っている間に、訪ねて来た人はいませんでしたけど……」
事実を告げると、編集長の口元が、少しだけ笑ったような気がした。
厭な予感がする。
「デートして来い」
「はい？」
「だから、約束したんだろ？　だったら、約束は果たせ」
「ちょっと待ってくださいよ」
「何を待つんだ？」
編集長の顔が、少し意地悪くなる。
「だから、弾みで言ってるだけですよ？　邦光さんだってマジじゃないですよ。嫌がらせみたいなもんです」
「それは、お前が決めることじゃないだろ。今すぐ、邦光さんに返事をしろ。冗談なら、お前が笑われて終わりだ」

しまった。
編集長は、確実によからぬことを考えている。
「……もしかして……あの……」
「次の号のページ開けられるぞ」
これはやっぱり、貰ってきた原稿の載る号が校了する前に、次の原稿の依頼をしてこいと言うことなのだろうか。だいたい、読者からの反応も見ずに、そんなことを決めていいのか。もともと、マニアックな雑誌なのだ。メジャーな作家が売り上げに貢献するかどうかなど、本が出てみなければ解らないと思う。
もちろん、口に出して、こんなことは言えない。
だから、精々胡乱に編集長を見やり、ごく正当な理屈を持ち出すしかなかった。
「そういうことなら、ちょっと、考えさせてください。元々、近藤さんが担当なんですから。相談しないと」
「ああ、近藤ね」
「だいたい、立て続けってのは無理がありますよ」
「……別にすぐでなくてもいいんだから……」
編集長が、ぶつぶつと口の中で呟く。
少なくとも、自分が無理無体を言っていると言うことだけは、理解してくれたようだ。

「しょうがない。……けど、接待と思えばいいだろ」
確かにそれは、そうだ。
「それは……そうですけど……。だったら、この前の便利屋と食料代の領収書、編集長で落としてもらえますか？」
本当は、半分近藤に回してやろうと思っていた。個人の裁量としては、ちょっと予算を使い過ぎたのだ。
だが、編集長なら別枠があるし、邦光はその枠を使ってもいい相手のはずだった。
「便利屋と食い物？　領収書付きで？　お安いご用だ。ただし、接待込みの取材旅行するだなんて、ふざけたことを言わせるなよ」
景気が良かった頃は、取材費と称する使途不明金が作家に渡されることもあったらしい。景気が悪くなってから就職した氷野原にとってはただの伝説だが、編集長にはその頃の記憶があるらしい。
「それはどう言う意味です？　まさか、俺が接待するとか？」
氷野原の言葉を遮るように、また、ファックスが仕事を始める。
またもや、氷野原宛だ。
しかも、この字は、邦光。
「おいおい……」

『約束を破る気か』
最初のものより、さらに大きな字の書き殴り。
お世辞にも、奇麗な字とは言えない。
「さっさと、電話しろ」
編集長がきっぱりと命令じる。
どうやら、観念して連絡を取るしかないらしい。
「何もそんなに厭な顔することないだろ?」
呆れ顔で言われても、厭なものは厭なのだから仕方がない。
ファックスは二枚目を吐き出し始めた。
『愛してるから、連絡くれ』
「なんじゃそりゃ!」
思わず、叫んでいた。
編集長の視線が痛い。
やっぱりなんかしたな、と目が言っている。
「言っときますけど、邦光さんは胃袋で惚れるそうですから……」
「別に何も言ってないだろ?」
こういう時の編集長はとても意地が悪い。

人の良さそうな顔をした編集長が、実は海千山千の強者だと言うことを、嫌と言うほど思い出させてくれる瞬間だ。

「判りました。連絡します」

言いながら、氷野原は携帯電話を取り出した。

「何見てるんですか？」

「いや……とにかく、失礼のないようにな」

肩を竦めた編集長が、ようやく離れていく。

全く、失礼なのは、邦光だ。職場にこんな文面を送ってきても、人気作家なら許されるとでもいうのだろうか。

どうしても、連絡が欲しいという、意欲は判る。なるほど、こんなことをファックスで送ってこられたら、電話をせざるを得ない。

たいした、策士である。

ファックスが、これ以上失礼な文面を吐き出さないのを確認すると、ゆっくり三つ数えてから、邦光のナンバーにコールを入れる。

呼び出し音が、鳴ったか鳴らないか。

『はい』

どうやら、邦光は電話の前で待ち構えていたらしい。

「邦光さんでしょうか？」
聞くまでもないことを態とらしく聞く。
『やっと声が聞けた』
「なんですか……それは」
やっとも何も、原稿を貰ってマンションから引き揚げたのは、一昨日だ。
『昨日一日、ずっと待ってたのに……』
この男は、何を子供みたいなことを言っているのだろう。
「何言ってるんですか。そちらの仕事が終ってからが、こちらの仕事ですから……」
『電話くらいできるだろ？』
それはできる。
できるが、そんなことは思い付きもしなかった。
もちろん、連絡をする気がなかった訳ではない。ゲラが上がれば、嫌でも連絡は取ることになる。だが、それはまだもう少し先の話だ。
などと、自分の中で言い訳を連発していた氷野原は、ふと、思い当たった。
普段自分が担当している作家が相手なら、どうだろう。一読したところで、感想を伝えるのが常だ。問題がなければ面白かったと言うし、扱うジャンルがミステリーなだけに、破綻していれば疑問点を伝える。

それをしていないのだから、文句を言われても仕方がない。
「申し訳ありません」
『え？』
「原稿は読まさせていただきました。新基軸のお話で、大変楽しく読まさせて頂きました。ゲラは一週間後に出ますので、疑問点等は、その時にご連絡申し上げます」
『氷野原くん……』
電話の向こうで、邦光が思い切り溜め息を吐くのが聞えた。
あの、男っぽい顔に皺を寄せて、恰好良く溜め息を吐いているのだろう。
「氷野原！」
編集長が怒鳴る。
わちゃわちゃと手を動かしているのは、即座にデートしろとでも言っているつもりらしい。まるで、人身御供だ。
冗談ではない。自分から駆け引きの材料にするのと、人に強要されるのでは意味が違う。
「すみません。ちょっと編集長が呼んでいるもので……。後程、またお電話します」
有無を言わせず電話を切る。
「ひぃのぉはぁらぁぁ」
「なんですか？」

「お前、正気か？　邦光先生に書いてもらうのに、近藤がどれだけ苦労したと思ってるんだ？　お前の我が侭で仕事をしくじったなんて知ったら草葉の陰で泣くぞ」
「何時の間に死んだんですか」
「ホント、洒落になんないこと言わないでください」
副編集長の笹木が口を挟む。
「今、抜けられたら、本、出ませんよ。それでなくたって、近藤さんいないのに」
きっぱりと言い切った女は、誰よりも現実を見据えていた。
「……けど、せっかく邦光先生が……」
どうやら、近藤だけでなく、編集長も邦光のファンらしい。自分の好きな作家で、しかも営業的にもおいしいとなれば、編集長が見逃すはずがなかった。
しかし、人出が足りないのは如何ともしがたいのだ。
「校了したら、行くってファックス流すってのはどうです？　デートに誘われてホイホイ付いてくってのは、甘く見られるわ。やっぱり、最初にガツンと言っとかないと」
にっこりと笑う笹木は、氷野原が振られた原因を誰よりも良く知っていた。
仕事と俺のどっちが大事だ、という、情けない電話を取り次いだのが彼女だったのだ。
仕事の連絡待ちをしている時で、ケイタイに掛かってきた電話に出てもらったのだが、氷野原が出ると信じていた男は、情けない繰り言をたっぷりと並べ立てたのである。

悪いことに、笹木は好奇心旺盛で、途中で話を遮るなどという勿体ないことをするはずがなかった。

「最初にガツンねぇ……」

「そうよ。仕事が一番ってしっかり自己主張するのよ。扶養家族やってんじゃないんだから、仕事への責任を主張するべきだわ。まぁ、そこんとこ上手くやるのは、私の方が先輩だから、何だったら、下書きしたげようか？」

別に、最初で最後にするつもりだから、どうでもいいのだが、このままだと、勝手に恋文を代筆しかねない勢いだった。

「結構です」

「えぇぇ？」

態とらしく声を張り上げた笹木は、原稿用紙を引っ張り出した。

「会いたいのは、僕も一緒です。……でも、僕が頑張らないと、アナタの――」

「やめてください！」

わざわざ読み上げながらメモ書きをする。その悪趣味さに、氷野原は溜め息を吐いた。

「それって、セクハラじゃないです？」

「どうして？　嫌がらせ？　アドバイスじゃない」

「だから、邦光さんと付き合う気なんてないんですから」

「勿体ない。邦光さんて、男女問わずモテモテなんでしょ？　お金持ちだし、ちょーっと付き合って、指輪とか買ってもらっちゃえばいいじゃない」
「どうして指輪なんですか」
「サイズは十号ね」
自分の指を眺めながら、けたけたと笑う女に逆らおうと思ったのが、間違いだった。
何が悲しくて、笹木の為の指輪を、邦光に買わせなければならないのだ。
「どうせなら、十三号にしますよ」
「えぇ？　十三？　嘘ぉ。そんなに細いのぉ？　だいたい、どうして指のサイズなんて知ってるのよ！　男なら結婚する時になって、初めて知るなんてのが普通でしょ？」
騒々しいことだ。こんな調子で騒ぎながら、いつのまにか仕事を熟してしまうあたりが、笹木の才能だろう。今も、手だけはしっかり動いている。
「あ。ファックスよ。ダーリンじゃない？」
ふざけるな、と言いたいところを溜め息で代弁して、ファックスに歩み寄る。
吐き出された用紙には、巨大な文字が踊っていた。
『縛ってもいいから会いたい』
文字はさらに汚く、内容はさらに酷い。
「……あの野郎……」

まだ続きがある。
『会いたい。会いたい。会いたい』
「……腐ってやがる……」
「まぁ。なんて情熱的なんでしょ。ひょっとして、邦光さんの話が変わったのって、氷野原くんの所為？」
ぎょっとして振り返ると、そこには笹木がいた。
「……ただの冗談でしょ」
「冗談にしては、露悪的よね。どっちかって言うと、見境がなくなっているって感じじゃない。ちょっと、切羽詰まってる感じだし……。印刷所に入稿するのは、明日の朝一で間に合うんだから行ってあげれば？　原稿はドア貼りすればいいんだし」
恐ろしいことをへらへらと言う。
今から出掛けて邦光を宥めてから会社に戻り、朝一で印刷所に原稿を渡す。その後、通常通りに仕事をしろと命じているのだ。上手く行けば、原稿を印刷会社のドアに貼り付けて帰宅することもできる。
どちらになるかは、氷野原の腕次第、ということだった。
「行ってこい、氷野原。近藤が復帰したら、二日…いや三日、休みをやる。だから……判ってるな！」



思い切り、溜め息を吐いた氷野原は、すごすごと自分のデスクに戻った。
どうやら、邦光はかなりキているらしい。
「……そんなに邦光の原稿がほしいんですか？」
「もちろんだ」
「あたり前じゃない！」
息の合った答え。
編集長と副編集長がこんなところで同調されても、ヒラの編集部員は困るだけだ。
「人身御供ですか……」
「ウ・ソ・ツ・キ。満更でもないんでしょ。氷野原くん、御機嫌じゃない」
「御機嫌、ですか？」
「そう。邦光さんのところから帰ってから、二割り増し美人になってるわ。ちゃんと頭セットして、服も毎日着替えてるし。違う？」
違う、と言いたかった。
最近になってちゃんとしたのではなく、昔からきちんとグルーミングしていたと、抗議したかった。
しかしながら、男を引っ掛ける気にもならない氷野原が、ここのところ手を抜いていたのも事実だ。

何しろ、会社には趣味ではない男と、範疇外の女しかいない。洒落ようという気になるはずもないのだ。

「判った？　じゃあ、とっとと行ってらっしゃい。ガンバってね。何だったら、書下ろしの枠も空けるから」

何を言うのか。

げっそりした氷野原は、携帯電話を取り出した。

――今から行く――。

そうメールを打つ。

昨日、衝動買いをしてしまったコートを手に、会社を出る。

そう言えば、最後に服を買ったのは、一年近く前だった。

案外、自分も可愛らしいところがある、などと思いながら、駅に向かって歩く氷野原は、ショーウィンドウに映る自分の姿をちらちらと眺めていることに気付いていなかった。

9

玄関を入った途端、部屋が荒れていると判る。
つい一昨日、原稿を待つ間、氷野原が徹底的に磨き上げた部屋が、何やら荒んだ雰囲気を漂わせていた。何しろ、邦光の邪魔をしてはならないなどと考えたから、掃除機も使わずに、隅々まで雑巾で拭き上げてやったのだ。
ところが、たった一日半で、部屋の中が荒れていた。
理由は簡単。
壁一面の収納が、中途半端に開き、物があふれ出ている。
それだけではない。コンビニの袋が散らばり、食品トレイが転がっていた。
「……何なんです、これは……」
「え？　氷野原くん？」
デスクに向かっていた邦光が、椅子ごと身体を回して、目を見開いた。
相変わらず、ムカツクようないい男だ。
ビックリ目をしながら格好をつけるというのは、どういう技だろう。
「人を呼び付けておいて、これですか？　ひょっとして、これを片付けさせるために呼び付けたんじゃないでしょうね」

「来るなら来ると……だいたい、チャイムぐらい鳴らして……」
「ドア、開いてましたよ」
「え？」
「新聞が引っ掛かって、ドアが開いたままでした」
「あ……と……」
「風変わりなご招待と思って、こっそり入ってきたんですけど……」
ドアに引っ掛かっていた新聞を、ダイニングテーブルに乗せる。その横には、楕円形のプラスチックトレイが置かれていた。
オムライスは、半分も食べられていない。
「料理が趣味なんでしょう？　どうしてこんなものを……」
「米が食べたいと思って……」
「で、どうでした？」
コートを椅子の背に掛けて、意地悪く聞いてやる。
「幕の内はまずかった。オムライスも……」
溜め息が出る。
やはり、この男は家政婦を呼び付ける気だったらしい。
いそいそと、仕事を放り出してやってきた自分が、情けなくなる。

「それで？　何を作ればいいんですか？　材料は……」
「いい。いい……。何もしなくていい」
慌てて立ち上がった邦光が、氷野原に歩み寄った。
「連絡してくれれば、花ぐらい買っておいたのに」
内心でほっとしながらも、つい、厭味が口を衝いて出るのは、すでに氷野原の性分のようなものだ。
「花を買うより、掃除しておいてほしかったですね。……それに、連絡はしましたよ。メールですけど」
見ていないのだろう。
案の定、天井を向いた邦光は、大きく溜め息を吐いた。
「ケイタイ、どこです？」
「……さあ、どこだろ……」
「どこかに入れた服ですか。それとも、どこかの店ですか」
「いや……。どこかに置いたはずなんだが」
「家の中にある？」
「ああ」
「電源は入ってます？」

「……と、思うが……」
「なら、その内、バッテリー切れの騒音が聞えますよ」
「そうか……」
ほっと溜め息を吐いた邦光は、氷野原に腕を回した。
「よく来てくれた……」
縋るように抱き締めてくる男を見上げて、氷野原は溜め息を吐いた。
「何、子供みたいなことやってるんですか。あんなバカなファックス流して……」
「……すまない」
「せめて、メールにするとか、ケイタイに……。メモってないんですね」
「あー……ファックスを発見して……。それで番号が判って……」
この間抜けな男は、それでも、やたらと芝居がかった表情を作っていた。
「口説くつもりなら、ケイタイの番号ぐらい憶えてください」
「教えてくれる？」
妙に下手に出る邦光がキスを求めてきた。
軽く唇を合わせ、御機嫌伺いしてくる。氷野原が怒っていると伝えるために、唇を開かずにいると、宥めるように上下の唇に触れ、唇の端に音を立ててキスをしてきた。
ふっと、笑った氷野原は、そろりと這わされた舌を唇で挟んだ。

キスが、恋人の会話になる。
「……ごめん」
「判ってます？　明日の朝一で入稿しないと、スケジュールが土砂崩れなんですよ」
「本当にごめん」
「……いいですけどね。……だから、付き合えるのは、二時間が限度です。どうします？　何か作りますか？」
聞いた途端に、邦光の表情が変わる。
「まさか」
ぎゅっと抱き締めてくる。
ふっと笑った氷野原は、伸び上がって、キスをしてやった。
ここで、飯が喰いたいなどと言い出したら、この場で縁を切ってやるつもりだった。たまに付き合ってやるぐらいならいいか、などと思い始めている自分が信じられないのだ。作品が気に入っている訳でもないのだから、下手に出る必要は感じない。
「編集ってそんなに忙しいんだ……」
「センセイが仕事をしているような大手はどうか知りませんけどね。ウチみたいな弱小は、過労死しないのが不思議っていうスケジュールですよ」
はああと、大袈裟な溜め息を吐いた邦光は、氷野原の肩を抱いてベッドに向かった。



時間がないとなれば、やることはひとつだろう。
感心なことに、シーツは新しいものに変えられていた。
「もしかして、僕が来るの待ってました？」
「当然じゃないか。原稿が上がったら何時でも付き合うって言ったろ？」
マジだった訳だ。
「僕の何がそんなに気に入ったんです？」
「何が？　……うーん、全部かな。料理が上手くて。頭もいいし、仕事もできる。強かでちょっと口が悪いとこもいい。俺に冷たいところも。それに美人で、スタイルが良くて、セックスが上手い」
頭が痛い、男だ。
真顔でこんなことを言われても、困るだけだ。
「一番最初が料理……ですか」
「言ったろ。俺は胃袋で惚れるタイプなんだ」
そう言えば、付き合う男はみんな料理ができると言っていた。
首を傾げた氷野原を、邦光がさり気無くベッドマットに座らせる。宥めるように、口元にキスをして、シャツのボタンを外し始めた。
器用な指先が、服を剥ぎ取りながら、肌の上を彷徨う。

それが、まだるこしくて、同時に心地よい。
されるがままなのも、腹立たしくて、噛み付くようなキスを返した。
セーターの裾から手を入れて、男の肌に触れる。
不意に、押し倒された。
「あ……ちょっと……。社に帰るって言ったでしょ」
慌てて、男の身体を押しやった。
着ているものをよれよれにされたら困る。
「いいから」
普通なら、何がいいんだと抗議するところだが、この声で囁かれると、本当にどうでもいい気分になってくるから不思議だ。
再び、男の手に身を委ねてしまう。
「邦光さんの声って……結構好きかも……」
訝しげに眉を顰めた邦光は、何も答えなかった。
気が付けば、驚くくらい手際よく服を剥がれ、空気に肌を晒している。
肌に触れるセーターの感触が気に入らないと思ったら、邦光はほとんど服も乱していなかった。
「素肌にセーターって……着心地悪くないですか？」

言いながら、邦光のセーターをたくし上げる。
邦光は苦笑を浮かべて、セーターを脱ぎ捨てた。
動きに連れて、筋肉が奇麗に動く。
釣られるように手を伸ばすと、その手が捕まえられた。
指先に口づけた邦光は、真っ直ぐに氷野原の目を見詰めている。
視線を逸らさぬまま、掌に唇が触れる。
手首、肘の裏、そのまま腕を辿って、胸まで。
胸筋に沿って舌を這わせる間も、ずっと氷野原を見ている。掴んだ手も放してくれない。
それだけのことなのに、頬が熱くなってくるのが判った。
恥ずかしいから、止めろという代わりに、自由な手で、邦光の耳を軽く引っ張る。
途端にふっと笑った目が、ゆっくりと逸らされた。
氷野原を気に入った理由の中に、美人だのセックスが上手いなどと列挙してくれたが、邦光の方が余程、奇麗でセックスが上手い。
下らないことでも考えて気を逸らしていないと、あっという間に上りつめてしまいそうだ。
膝を立てて、男の股間を刺激してやる。
慌てた様子で腰が引かれ、氷野原はつい笑ってしまう。

邦光から逃れるように身体を起こし、マットの真ん中に移動すると、邦光を手招いた。
苦笑を浮かべて、近付いてくる邦光に笑い掛ける。
「一緒に楽しまなくちゃ」
「……もちろんだ」
唇の端だけで笑う邦光の頬を抓る。そして、思い切り引っ張った。
「何を……」
「ちゃんと笑ってみて。どうしてこんな時まで恰好付けてんですか」
心外な、という表情で、邦光が眉を引き上げる。
「ここで恰好付けないで、いつ付けるんだ？　こっちは必死になって口説いてるのに……」
「だから……。僕は癒し系が好きだって言ったでしょ？　そんな、ガキが突っ張ってるみたいな恰好の付け方を見ていると、肩が凝るんです」
ふっと、眉が下がる。
やはり、表情筋の動きがいい。センチメンタルな男のロマンを書き散らすより、役者でもやった方が似合いそうだ。
氷野原がそんなことを考えていると知ったら、きっとショックを受けるだろう。それとも、いい男だと認められたと喜ぶだろうか。
「俺といると疲れる？」

「……でもないですね」
それが謎なのだ。
普通、こういう恰好付けが激しいタイプと一緒にいると、三十分もしないうちにぐったりと疲れてしまうものだった。
それなのに、一週間近く貼り付いていても、別に苦痛も憶えなかったのだ。そもそも、決して好きではない家事を、嬉々として熟した自分が信じられない。
もちろん、作家に機嫌良く仕事をしてもらうためなら、掃除ぐらいはするし、好物を調達することなど、初歩の初歩だった。
「じゃあ、相性はいいんだ」
「そうですね……」
違うと、主張するほどでもない。何しろ、身体の相性はいいのだ。
一年も一人でいたのだからここで気軽に付き合うのもいいかもしれない。恋人を選ぶのに、打算が加わるのを否定するほど子供ではないし、一目惚れして、何も判らないうちに突っ走るなどという経験は一度で充分だった。
「君が居心地がいい場所にしてみせる。だから……」
「お喋りはやめましょう。……今は、一緒にいなきゃできないことをやりましょう」
引き締まった腹を、ゆっくりと撫でてやる。

「そうだな」
にっと、口の端だけで笑う。
その表情を見たくなくて、氷野原は牡を握り込んだ。
いささか乱暴に擦り上げてやると、強引なキスが降りてきた。
口中を探り合い、舌を絡めて、熱を高めようとする。
「んんんっ……」
互いの牡を煽り立てる。
まるで、喧嘩。
互いの弱みを攻めたてあって、弱音を吐くのを今か今かと待っている。
そして、最初に負けたのは氷野原だった。
にっと笑った邦光が、意味ありげに指を舐める。妙に、芝居掛かった笑いだが、唇の端を引き揚げるだけの、プロトタイプ的なクールな笑みよりずっと良かった。
きっと、見た目と違って、中味はクールなんて似合わない男なのだ。
「んっ……」
ゆっくりと、指が入り込む。
相変わらず、丁寧な愛撫だ。壊れ物を扱うように扱われるのは、初めてかもしれない。
大事に扱われる優越感と同時に、焦れったさが身体の熱を煽る。

普段、女を相手にしている分、自然に潤うことがない男の身体を余計に気遣っているのだ。これは、きっとお姉さん方に持てたに違いない。

バイセクシャルを自認する節操のない男共は、男相手に気を使う必要などないと思っているらしいのだ。ところが、邦光は硬い男の身体に、愛おしげに愛撫を施していた。

「もういいよ……」

膝を開いて、がっしりとした腰を挟み込む。

「慣れて……」

いるから、と続けようとした言葉を、邦光が飲み込む。

「氷野原……。頼むから、他の男のことは忘れてくれ」

「ばーか」

放っておくと、とんでもないことを口走りそうだ。熱に浮かされたピロートークは、後で思い出すと顔から火を吹きそうな程恥ずかしい思いをするものだ。

そんな思いを、この恰好つけの激しい、クラッシックなハードボイルド男に味わわせるのは、余りにも忍びない。

だから、余計なことを喋らないように、舌を絡ませる。

だが、そんな配慮も、すぐに無駄になった。

荒い息を吐いて、身体の熱を逃がす。

「あぁぁ……。いい。……そこっ……」
捻り込まれる牡を、捕まえようと、締め上げる。
「くそっ……ちょっと、まて……」
「待てないっ」
身体が勝手に動くのだ。
全身で突き上げてくる男に縋り付く。
飾りでない筋肉がうねり、追い上げられる。
「あぁぁぁ……。あっあぁ……」
だらしなく開いた口から、声が漏れていく。
「くそっ、終っちまうだろ！」
痙攣のように、突き込んでくる。
「い…いいっ！　ひいぃぃ……」
がくがくと身体が痙攣する。
逞しい身体にしがみついた氷野原は、一瞬意識を飛ばした。
ほんの一瞬だ。
次の瞬間には、意識を取り戻して、息を整え始めた。
「……ちょっと……走り過ぎ……」

そう言った邦光が、小刻みなキスを落としてくる。
「でも……時間がない……」
「そういうことを……。せめて、こうしている間は……仕事のことは忘れろよ……」
息を乱したまま、邦光がぐいっと中を擦る。
まだ、萎えきっていないものが、内側を擦り上げた。
ぞくぞくと、快感が走りぬける。
「……やめ……。帰れなくなる……」
「帰るなんて言うなよ」
くいっと押し込んでくるものは、もう復活を始めているようだった。
青臭い話を書く男は、肉体まで若いのだろうか。
「ダメだって……」
背中でずりあがって逃れようとする氷野原の肩の上に手を突いて、邦光が止める。
「……やだっ…て……」
甘ったれた声が出る。
途端に、嬉しそうに牡がびくついた。
「やだって……」
「そんな声聞かされて、止るかっ」

「ダメだって……。仕事が……」
「そんなこと言うなよ」
肩にキス。
ねっとりと舐めて軽く歯を立て、もう一度キスをしてくる。
「もう……。本当に仕事が……」
「原稿なら、幾らでも書いてやる。……お前のとこの編集長なら、胡麻化されるだろう。色仕掛けして、原稿を取ってきたって言えよ……」
「やだぁ……」
口から、勝手に言葉が飛び出す。
もちろん、本心は別だった。
氷野原が持ち出すまでもなく、邦光が原稿を請け負ってくれたのだ。
これは、後々まで利用するに限る。
頭の隅でそんなことを考えながら、氷野原はくたくたに溶けていった。

ダウト

1

生まれて初めて一目惚れした相手が男だったというのは、邦光志郎にとって、ちょっと予想外の出来事だった。

それが、編集者だというのは、想像だにしなかったことだ。しかも、料理上手だったというオマケまで付けば、運命を感じてしまう。

キーボードを叩いていた邦光は、ベッドで眠る運命の恋人を見詰めて、溜め息を吐いた。仕事漬けで、よろよろのボロボロでも、美人だ。

氷野原を見ていると、とても自分と同じ男とは思えなかった。真っすぐな髪が額に乱れる白い顔は、ハンサムと言うより、美人である。

細い鼻梁に、ほんのり赤みの射した唇は、眠っているのに奇麗に引き結ばれていた。切れ長の少し冷たい印象の目で見詰められると、妙に落ち着かない気分になるが、今は、それも臥せられて、邦光が見詰めることを許している。疲れている所為か、いつもより血の気のない顔で、静かに眠っていると、本当に造り物の様に見えた。

自分より、一回り小さな氷野原の身体は、少々細過ぎるきらいはあるが、適度に筋肉が付いていて、貧弱な印象はない。シーツの下で時折蠢く長い手足が、しなやかに自分の身体に絡む様子を想像しただけで、ちょっとアブナイ状況になりそうだ。

もっとも、本能の赴くままに、襲い掛かったりしようものなら、怜悧な視線で睨まれ、形の良い唇が冷笑を浮かべることになるだろう。

私と仕事のどっちが大事よ、というのは、女の科白として定番だ。つまらない女という性格づけを説明する代わりに、作品中で使う科白でもある。

しかし、現実には、男の方が馴染みがある感覚なのではないだろうか。

仕事を持っている女と付き合っていると判っていても、自分との付き合いより仕事を優先させられると、大抵の男はバカにされたような気分になるのだ。

もちろん、氷野原が男だと言うことは判っている。今までに付き合ってきた相手に対しては、それが男であれ女であれ、仕事を優先させられることを不満に思ったことはない。むしろ、きちんと自分の脚で立っている相手と付き合っていると、安心したぐらいだ。邦光の仕事を理解できない者とは付き合わなかったし、仕事を優先させることに不満を言うような相手とは、即座に手を切った。

もし、氷野原が同じことを考えていたら。

邦光はもう三回は振られていた。

最初は、真冬。出逢ってすぐのころだ。誠心誠意口説いたはずの邦光の言葉を、ただの世迷いごとと信じているらしい氷野原に、ファックス攻撃をして口説こうとした時である。

二度めは、書下ろしの原稿を上げた時だ。

氷野原が来ると信じていたから、原稿を一日早く仕上げて、部屋を整えて、花を買った。現われたのが近藤という、氷野原の同僚だったのは、心底ショックだった。

元々、大陸図書で書いてくれと、しつこく頼み込んできたのは近藤だから、担当して当然だろう。実際、編集作業をするのは近藤だ。しかし、直接会うのは氷野原の役割のはずだった。それを無視されたら、怒りたくなるのが人情と言うものだ。

そして、今日が三度目。

邦光の作品が載った雑誌の見本本を手渡ししてくれと言ったのに、現われたのはアルバイトのニキビ面。再び、ファックスを送ったとしても、責められはしないはずだ。

仕事の相手でもある恋人を、もっと優遇していいはず。そう考えた邦光の元に現われた氷野原は、ものも言わずにベッドに倒れ込んだ。

彼のために買ったキングサイズのベッドだが、キスもせずに眠ってしまったつれない恋人は、邦光の意図など無視して、ベッド本来の用途に使って下さっている。

さすがに、少し虚しい。

「……疲れているのは判るけど……」

雑誌の編集と、単行本の編集が重なったために〝過労死しそうなほど忙しい〟という状況だったらしい。

どこの誰かは知らない作家が、氷野原をここまで消耗させたと思うと、無性に腹が立つ。

自分が他の編集者にしていることより、ずっとマシだと言うことは、この際、無視だ。

「倒れる前に、ちゃんと休めよ……」

一口に出版社と言っても、会社によっては労働条件は全く違う。夏休みに冬休みをたっぷり。七時以降と土日には、まず担当は捕まらないという会社から、いつ休んでいるのか、他人事ながら心配になるような仕事振りの編集者まで。

氷野原が勤めているのは、明らかに後者で、しかも最悪の状況と言ってよかった。

まぁ、中小の出版社はどこもそんなものだろう。

専門書ばかり出している出版社は、縁がないから知らないが、月刊誌週刊誌を出しているような編集部は、会社員と言いつつ、とてもそうは思えない生活サイクルで働いている。自分を含めて、いわゆる世間並みの時間の中で生きていない作家などと言うものを相手にしているのだから、当然と言えば当然だ。

邦光もそれくらいのことは判っているが、知ってはいても、こと恋人に関わることとなれば、話は別だった。もう少し何とかしろと、文句の一つも言いたくなる。

来てくれればいい、顔だけでも見たいと言ったのは自分だが、口も利かずに眠り込んでしまうのはあんまりだ。

しかも、ジャケットとジーンズを脱がして、シーツの間に押し込んでやっても目を覚まさないほど、本気で熟睡している。

この部屋を寝心地のいいベッドのある場所、くらいに思われているとしたら、それはちょっと寂しいかもしれない。

けれども、何より一番困るのは、呼び出されて鬱陶しいと思われることだろう。

「自分がやられて厭なことは、人にもするなって、か」

子供の頃によく言われたことだ。

そんなに疲れているのなら、ゆっくり眠らせてやろう。などと、健気なことを考えながら、邦光はパソコンに向かっているのだ。

はっきり言って、そんなことを考えるのは初めてかもしれない。

とにかく、キスも会話も彼が起きてからのことだ。

せめて、それまでに仕事に一段落を付けなければ。

今書いているのが、自分の心情が反映しようもない冒険小説なのが救いだ。恋愛小説でも書いていようものなら、完全に私小説化していたに違いない。もっとも、その点に関しては、邦光志郎に恋愛小説を依頼してくる編集者など皆無だろうから、心配する必要などなかったが。

万が一、邦光の心情の変化が文章に現れていたとしても、恋愛絡みで邦光が悩んでいるなど、思い付く人間もいないだろうし、次の一文に詰ると、無防備に眠っている氷野原を眺めているなど、想像すらしないに違いない。



ちょっと芝居がかった〝恥ずかしい男〟を主人公に恥ずかしげもなく話を書くのが、邦光のウリである。デビューのきっかけをくれた絵本作家が、〝恥ずかしければ恥ずかしいだけいい〟と請け負ってくれたのを、つい昨日のことのように思い出す。

読者は、作者ほど恥ずかしくないものだ、とも言われた。

書き始めた当初こそ、恰好付けの激しい主人公を書くのに照れていたが、慣れてみるとそれこそが男だ、などという気になってくる。どうせ、やせ我慢して生きるしかない人間を書いているのだから、スタイリッシュにした方がいいに決まっていた。

娯楽小説なのだ。邦光自身それでいいと思っているし、そうでなければいけないと信じている。リアリズムに徹した現実の描写を読みたいのなら、そういう小説を読めばいい。もちろん、その絵空事を嘲る者がいるのも判っていた。

どうやら、その一人が氷野原らしいのだ。

何しろ、邦光に面と向かって、ハードボイルド小説は苦手だと言い切ったくらいである。そのジャンルの小説の根底にある、ロマンチシズムやセンチメンタリズムが嫌いらしい。

溜め息を吐いた邦光は、原稿に意識を引き戻した。

筆に任せて書けるアクションシーンのはずなのだが、何かの弾みに、意識が逸れる。

考えても仕方がないことをぐだぐだと考えてしまう。

「……森谷さんのこと笑えないな……」

「森谷ってもりやいちろう？」
不意に声をかけられて、邦光はばっと振り返った。
氷野原がベッドに寝転がったまま、とろんとした目で邦光を見詰めている。
「そういえば、もりやさんの紹介で、原稿読んでもらったんだよねぇ」
動きはとろとろとしているが、声だけは、しゃっきりとしていた。そう言えば、電話でまともに受け答えしていても信用するなと言われたことがある。
熟睡している最中に電話で起こされても、しっかりとした口調で応じるらしいのだ。ただし、何を喋ったか氷野原自身が憶えていない上に、電話の相手には寝ぼけていたと判らないので、とても不自由をする特技だと力説していた。
数々の失敗の末、最近では自宅の固定電話も携帯電話も、寝ている間は呼び出し音を切って、留守録にしているらしい。
その所為で、邦光は声も聞けないことが多かった。
「森谷さんを知ってるのか？」
「昔、担当だったからね」
起き上がった氷野原は、まだぐらぐらと身体が揺れている。
「コーヒー」
氷野原が命じた。

最初の頃の、他人行儀な言葉づかいが直ったのはいいが、最近は完全に尻に敷かれているような気がする。

が、無理やり呼び付けたという自覚があるだけに、邦光に文句が言えるはずもなかった。

「……何がいい？」

「何でも……。とにかく苦いヤツ……」

「かしこまりました」

「あ、やっぱ、いい。……原稿してて。僕が淹れるから」

起き上がろうとした氷野原が、ふらっと傾いて、ベッドに崩れ落ちる。

「くそぉ……まだだめかぁ……」

「無理しなくていいよ。……どうせ仕事にならないんだから」

「……なんだかなぁ。締切破った挙げ句、どっかの編集に刺されるんじゃないだろうね」

そんな憎まれ口を叩きながらも、氷野原がこてんと寝転がる。

気持ち良さそうにシーツに顔を擦り付ける姿は、肌触りのいいものを選んでよかったと、感じさせてくれるものだった。

「子供の頃さ……しょっちゅう金縛りに遇って、凄い恐い思いしたんだ……。後で考えると、身体が起きてないだけなんだけど。ギャーギャー騒いで、お化けが来るとか、食べられるとか泣き喚いたんだよね。……声だけはまともに出るから始末が悪いったら……」

氷野原情報が増えるのは嬉しいが、どうせなら、子供の頃の話より最近のものがいい。
「……森谷さんの担当って……。大陸図書って、絵本なんか……ああ、そうか、昔は大手にいたって言ってたね」
「そう。ちゃーんと電車で帰ってたし、夏休みと冬休みは、旅行に行って、週末にはデートする余裕もあった」
誰とだ、と問い質したい言葉が喉元まで上がってきたが、邦光は必死で飲み込んでいた。ケトルをコンロに掛けて湯を沸かす間に、豆を挽いて、ドリッパーにセットする。
「もりやさんと飲み屋で知り合ったって本当？」
ベッドに転がったまま、氷野原が聞いてくる。
「アルバイトをしていたんだ。バーテンダーの真似事。……こうやって、シェーカーを振っていたら、森谷氏に、ハードボイルド男って揶揄われたんだ」
シェーカーを振る真似をしてみせる。
にやっと、氷野原が笑った。ちょっと人の悪い、何か企んでいるような顔。
造り物の様に整った顔が、ひどく生き生きとしたものになる。
実のところ、邦光はその顔に一目惚れしたのだ。
胃袋でも惚れた。もっと美味い料理を作る男と付き合ったこともある。プロの料理人だったり、食品開発に携わっていたり。

だが、料理は趣味ではないと言う氷野原が手早く作るものが一番旨かった。舌以上に、胃袋が美味いと訴える料理だったのだ。

けれど今となっては、このちょっと歪んだ性格が一番気に入っているかもしれない。やることはヤッているのに、未だに恋人の代理と思っているふしがある。

これを本物に格上げしてもらうためにも、邦光は会うチャンスが欲しかった。

「もりやさんかぁ。パーティーとかで会っても、絶対に絵本作家だって判らないんだよね。最初に会った時は、製作会社の人かと思ったもんな……」

そう言えば、最初から、氷野原は邦光の顔を知っていた。

賞をもらったことなどない邦光は、パーティーに出たこともない。顔写真の掲載を許したこともないから、世間に顔は割れていないのだ。大抵の編集者は、まず最初に別人の振りをして逃げる、という技で煙に巻いていた。

しかし、何故か氷野原は、最初から邦光と判っていたのだ。

どこぞの編集者が隠し撮りした邦光の手配写真が出まわっているという噂を、危うく信じそうになったぐらいだ。会っていたなら、こんな美人を忘れたということである。

恐る恐る聞いてみた。

「もしかして、俺達どっかで会ったことある？」

くすりと笑った氷野原が、気怠気に半身を起こす。

「……パーティーにも出ないくせに。けど、もりやさんの受賞パーティーには来てたでしょ。あの時、教えてもらったんだよ。いい男のバーテンダーが、実は売り出し中の小説家だって……。人の顔を憶えるのだけは得意だから……」

そのパーティーなら憶えている。

何年も前、小説家としてデビューする切っ掛けを作ってくれた森谷に頼まれ、パーティーの席で久しぶりにシェーカーを振った。

森谷が海外の大きな賞を取った記念のパーティーだ。邦光にしてみれば、パーティーに出たというよりは、バーテンダーとして出張したという程度の認識だったのだが、その席に氷野原もいたとは驚きだった。

「森谷さんに、エンターテイメントの編集を紹介してもらったの？」

「そう。試しに書いてみろって言われて……。渡したら、そのまま見てもらえたんだよ」

「じゃあ、別にもりやさんに弟子入りしてたわけじゃないんだ」

にやにやと笑う氷野原が何を考えているのか、大凡（おおよそ）、判っていた。

普通、作家志望の人間は、コンテストに応募するという方法を取る。いわゆる、賞取りデビューというヤツだ。他にも、同人雑誌に投稿する者もいるし、つてを頼って編集に読んでもらう者もいる。そして、面倒見のいい——あるいは、面倒見がいいと言いたがる作家に貼り付いて、仕事を回してもらう、という者もいるのだ。

後の二つは、元の紹介者に頭が上がらない、という結果を生む。酒場で働いていると、センセイの後をへこへこついて回る新人作家、などと言うものにもお目にかかった。

そういう意味では、ハードボイルド作家の師匠に、絵本作家は向かない。

そもそも、森谷は面倒見のいい男ではなかった。単に邦光を気に入ってくれただけだ。デビューをさせてやったと恩を売るでもなく、時々言い出す妙なことに付き合っていれば、気のいいオッさんでいてくれる。

「もりやさん、ちょっと変わり者だし。……そうか、邦光センセーのルートが判らないはずだ」

楽しげに笑う氷野原を見詰めながら、コーヒーに湯を落とす。

途端に、芳香が立ち上った。

「ルートねぇ。太鼓持ちする時間があるなら、少しでもモノを書いた方が上手くなるだろうに……」

「邦光さん。それは違うよ。そういう連中はさ、実力は充分過ぎるぐらいあって、足りないのはチャンスだけって信じてるんだから。……実力あるなら、自費出版して見ろっての」

編集なら、作家の前では決して言わないようなことをへらへらと喋る。

今、ここにいるのは編集者ではなく、恋人という意思表示かもしれない。だとすれば、邦光にもまだ望みはあるということだ。

「はい。コーヒー」
コーヒーカップを渡す。
「ありがとう」
お礼に、軽いキスを返されて、邦光はでれっと頬を緩めた。
ところが、氷野原が不機嫌そうに眉を寄せる。
「だから、そのカッコツケが激しい顔はやめろって。……見てるだけで肩が凝る」
「それってどんな顔？　別に恰好を付けているわけじゃない」
そりゃあ、スーツで決めて夜の街に繰り出す時は、思い切り格好をつけている。ブランドものの吊るしなどではない、ちゃんとしたオーダーメイドのスーツに、場所を弁えたネクタイ。靴はきっちり磨いているし、時計にも気を使っている。
だが、癒し系の恋人がいい、などという氷野原の前では、なるだけラフな恰好をしているし、表情を作った憶えもなかった。
「なんかムカツク。……本当、あんたって、無意識でそれをやってるんだよね。なんか、余計に腹が立つんだけど……」
そう言われても困る。
「なんか……ゲイ相手のホストと付き合ってるみたいなんだよね」
「付き合ったことあるのか？」

目を剥いた氷野原は、遅れて笑い始めた。
コーヒーを零さないように苦労しながら、ひくひくと背中を痙攣させている。
苦笑を浮かべた邦光は、カップを受け取ってやった。
「……知らない……そんなの……いる…のか？」
ものの例えを真剣に受け止めた邦光が、面白かったらしい。
ベッドに突っ伏して思い切り笑った氷野原は、ようやく起き上がると手を伸ばした。
「……判ってるよ。天然だっていいたいんだろ？　けど……なんかね」
コーヒーを口に運ぶ。
「あちっ……」
猫舌のくせに、熱いブラックコーヒーが好きだという氷野原は、息を吹き掛けながら、ようよう飲み込んでいた。

2

「あんまり、無茶するな。人間、睡眠不足が一番祟るぞ。何をしなくても、しっかり寝とけば何とかなる。だいたい、寝不足じゃ、脳味噌が働かんだろう」

もっともらしい道理を解いてやっても、氷野原は鼻先で笑っただけだ。

「寝る暇がないのは、僕の所為じゃない。スケジュール通りに進むなら、毎日八時間は眠れると思うけど……そうはいかないんだよね」

これこそ、道理だ。世の中、予定通りに進むことなど、ほとんどない。

黙り込んだ邦光の顔を覗き込んで、氷野原はにっこりと微笑んだ。

「でも、邦光さんが時々ごり押ししてくれるから、こうして爆睡できるんだ。……これで、元とってるかな」

「そうなのか？」

「そう。……でも、あんまりしょっちゅうやってると、編集長に愛想尽かされるよ。……どうせなら、ファクスなんて送らずに、近藤に直接電話して。邦光先生の原稿のためなら喩え火の中水の中って人だから。——少しくらいなら融通してくれる」

「少しくらい？」

ベッドの端に腰を下ろして聞き返すと、氷野原は揶揄う顔で聞き返してくる。

「何絡んでるの？」
「絡んでないよ」
真顔で言い返すと、氷野原は声を立てて笑う。
「やっぱり、邦光さんて、可愛いとこあるよ。……きっとそのせいだな」
「何が？」
「全然、癒し系じゃないのに、ここに来ると安心する」
こんなことを言われてしまうと、つい邦光の顔も緩んでしまう。
恰好がいいだの、いい男だの言われるより、こういう科白の方が妙に心に響く。側にいると安心するなどと言われて相好を崩しているなど、絶対に自分のキャラクターではない。
判っているが、こればかりはどうしようもなかった。
氷野原こそ、天性の男タラシではないか、という気がする。
この際、芝居でも手練手管でもいいから、絶対バレないように一生騙し続けてほしい。
始まったばかりの恋は永遠を夢想し、いずれ終焉を望むようになる。もちろん、この恋だけは違うと信じたかった。一生騙すということは、一生側にいてくれるということだ。
正直にそんなことまで、邦光は考えていた。
自分の思いが通じずに悔しがる人間の気持ちが、こんな風に理解できるとは驚きだ。
いや、気持ちは通じているのかもしれない。報われないだけで。

「変なこと言った？」
急に訊かれて、邦光は我に返った。
「変なことじゃないけど。ちょっと……何て言うか、感動したかな」
「感動かぁ。……凄いな」
けらけらと笑ったと思ったら、そのまま、首に手が回って抱き付かれた。
この妙なテンションは、寝起きの所為だろうか。
大抵、寝起きの氷野原は不機嫌だが、時々はこんなこともある。
これがまた、メチャクチャ可愛いから困るのだ。
何が何でも、甘やかしてやりたくなる。
「どうする？　何か食べる？」
手始めに、小さく聞いてみると、ふっと、密着していた身体が離れる。
どうやら、失敗したらしい。見上げてくる顔は、少し意地の悪い笑みを浮かべていた。
「おなか空いてるんですか？　いいですよ。何か作ります」
完全に編集者モードだ。
どうして、こんなに簡単に切り替えがきくのだろう。
考えて見れば、相手が彼でなければ、自分も同じようなものだったかもしれない。それを思えば、不思議でもなんでもないが、不満ではある。

そんな邦光の内心など、まるで気付いていないのか、気付かぬふりなのか、氷野原はあっさりとベッドを離れて、そそくさと衣服を身に着けた。
「何がいい？」
お前は、仕事をしろと命じられたも同じである。
「……何でもいい」
ろくなものを食べていないから、食事を作ってくれるのは有り難い。
胃袋の訴えに負けた形で、すごすごとパソコンの前に戻った。
とにかく、原稿を書き上げて自由の身にならない限り、口説くことも儘ならないらしい。
不意に携帯電話が鳴き出す。
自分のものではない。
無機質な電子音は同じだが、自分の携帯は静かに充電器の上に納まっている。
と、言うことは、音の出所は氷野原の携帯電話だ。多分、社に呼び戻す電話だろう。
「電話だぞ……」
「あ……そうみたいですね」
気乗りのしない様子で応じた氷野原が、キッチンから出てきた。
カバンをどこに置いたか記憶がないらしく、ベッドの周りを見渡している。
「ベッドの下」

「あ、どうも……」
屈み込んで、カバンを引っ張り出すと、携帯電話を手に取る。
「はい……」
電話に応対しながら部屋を出て行く氷野原を見送って、書き掛けの文章を睨む。
狭い路地の真ん中で、正面に銃を構えた男。背後にはナイフを持った男が二人。
数歩走れば、アパートの避難梯子がある。
「まさに、前門の虎、後門の狼……て？　これをどうしろってんだ……」
不死身のヒーローじゃあるまいし。
自分で書いた状況に、文句を付ける。
アクションシーンばかりは、勢いで書き上げるしかない。理詰めで書いても、迫力は半減するし、何より、続かなかった。
「いっそのこと、化け物にするか？　そういや、伝奇小説って書いたことないな……」
また、あらぬ方向に、思考が逃げる。書きたくないというより、小説の世界に入っていけないのだ。だから、簡単に思考が迷走する。
迷走した挙げ句に、廊下で話している氷野原ばかりが気になり始めてしまう。
さすがに、ここまで振り回されていると、マズイと言う気にもなってきた。
「……マジで、今までこんなことなかったよな……」

こういうところで、精神的に弱いことを思い知らされるとは思わなかった。気掛かりなことがあるから、仕事が手につかないなど、言い訳としては最低だ。

「俺って、こんなにメンタル弱かったか……？」

自分が強靭な精神を持っているなどと思ったことはない。しかし、ここまで軟弱者だとも知らなかった。

執着するものがあると人は弱くなる。そんな文章を何度書いたか判らない。

それでも、実感するのは初めてだ。

自分としては、飄々と世の中を渡ってきたつもりだったが、単に執着するものがなかっただけらしい。一人の人間の歓心を買うために腐心するなど、邦光志郎の中にはなかった行動様式だ。

もしかすると、作家である邦光志郎の中にはなくても、青海志郎の中にはあったものなのかも知れない。自分自身のことは、思う程判ってはいないということだろう。

「今日はダメだって言っただろう！」

廊下から、氷野原の怒声が聞える。

珍しい。

編集部の人間に、厭味を並べているのを聞いたことはある。印刷所に泣き落としを掛けているのを聞いたこともあるし、作家を宥めすかしているのも聞いたことがあった。

邦光が氷野原に怒鳴られることはあっても、彼が電話で誰かを怒鳴っているのは初めて聞いた気がする。

もちろん、自分と一緒にいる時のことしか知らない。しかし、ああいう風に本気で怒鳴るような男ではないと思う。

一体、相手は誰だろう。

なんとなく、厭な予感がした。

ほどなく、氷野原が部屋に戻ってくる。

苛々としているのは、背中を向けていても判った。

邦光に声を掛けることもなく、そのままキッチンに引っ込んでしまう。

しばらくすると、また、電話が鳴った。

今度はすぐに鳴り止む。

水の音や、冷蔵を開け閉めする音は聞えても、話し声は聞えない。

呼び出し音も二度と鳴らなかった。

気になる。

原稿どころではなかった。

密かに溜め息を吐いた邦光は、文章を登録すると、パソコンの電源を落とした。

3

料理を終えて、食卓に付いた頃には、氷野原の苛々も随分と納まっていたらしい。
それなのに、他愛もない話をしながら食事も終わってしまうと、彼は手早く後片付けをして帰ってしまった。
「あーあ……」
結局、電話の相手の正体は聞けなかった。
聞いたら最後、怒り出しそうな気がしたからだ。
よく考えたら、まともにキスもしていないではないか。ベッドに誘うのは無理だとしても、恋人らしいキスのひとつもできるのではないかと、期待していた。
もっとも、邦光のスケジュールを完全に把握している氷野原は、原稿が上がらない限り、ベッドまで付き合ってくれないことは判っている。
いつ同業者が襲ってくるか判らない状況では、何もする気にならないだろう。それでなくても、この部屋で鉢合わせするのを嫌がっているのだ。
だからこそ、仕事は手早く上げる。
お蔭で、邦光が心根を入れ替えて、真面目に仕事をするようになったと、評判が上がっているが、それもこれも氷野原と過ごす時間を確保するためだった。

今は、編集者との追い掛けっこに興じる暇はない。それよりは、一刻も早く原稿を上げて、自由の身になる方が重要だった。

実際に、氷野原が帰ってしまってからは、集中している。突然、怪物に変身することもなく、どうにか窮地から救い出した主人公を、再び罠を仕掛けて窮地に追い込む。今度は、上手く勝手に逃げてくれた。最後のクライマックスも、出来は上々。

一応のエンドマークを打って、原稿をプリントアウトをする。その間にキッチンに立って、コーヒーを淹れた。

邦光は、小説家という仕事を肉体労働だと思っている。特に最後の追い込みなど、力技以外の何者でもない。力技を発起するには、それなりの切っ掛けがいる。今までは、編集者の懇願と時間の制約という推進力を得て、と言うより利用して、窮地から脱していた。

ハードボイルド小説の醍醐味は、如何に主人公が追い詰められるかだ。書き手の精神状態も、ある程度は緊迫していなければ、だらけたものになるだろう。現実に体験できる世界を書いていない分だけ、精神状態だけは追い込んでおくしかない。それが、自分の未熟さなのかもしれないし、技量のなさなのかも知れないが、そうしないと邦光には書けないのだ。自分にとっても、編集者にとっても難儀な習癖だった。

当然ながら、締切を乗り越えた後のお楽しみ、などというニンジンは、邦光には何の効果もなかった。それどころか、先にお楽しみを味わおうとしたぐらいだ。

それを思えば、氷野原に会いたい一心でエンジンが掛かるということが、既に驚きである。追い詰められないと書けないと言うのは、ただの思い込みだったのだろうか。

どちらにしても、今となっては、酒やセックスが、さしたるニンジンではなかったということが良く判る。

酒は酒でしかないし、セックスの相手に選ぶ女は、邦光志郎の話に出てくる女と同じで、いちいち名前や顔も憶えていないし、性格などないに等しい。

娼婦と敵とマドンナ。

邦光の話に出て来るのは、この三種類の女だけだと、氷野原が言った。全員が役割だけで、性格もなければ、容姿すらないと言うのだ。

言われて見れば、その通り。ぞっとするような美女か、妖艶な美女か、凛とした美女。あとは符号としての女しか出てこなかった。

今まで、邦光が付き合ってきた人間も、恋人という符号でしかなかったのだろう。しかも、一夜の。一夜が続くこともあるし、本当に一夜で終ることもある。

そんな相手がニンジンになるはずもない。

「……バレたら怒られるな……」

それとも、氷野原ならニンジンと例えられたことより、効果が薄いことを怒るだろうか。ニンジンのためには、締切を一週間は早く上げろと言い出すかもしれない。

「……そうだ。その手があるじゃないか……」

来月の大陸図書の仕事を、締切通りに仕上げる代わりに、氷野原を手伝いによこせと言うのはどうだろう。

原稿さえ上がっていれば、実際の締切まで、氷野原を独占できる。旅行に行くのは無理だとしても、ここから出社して、最低限の仕事だけをするということは可能ではないか。

子供っぽい妄想かも知れないが、近藤なら共犯者になってくれる可能性はあった。

時計を見れば、氷野原が帰ってから、丸一日が経過していた。

「今なら、まだ社にいるか……」

近藤個人に連絡を取った方がいいだろう。妙に硬いところがある氷野原は、邦光が自分の立場を利用することを厭がる可能性がある。しかし、ノリのいい近藤なら乗ってくれるに違いない。

どうせ近藤は明らかに、意識して氷野原を餌にしているのだ。いつの間にか連載ということになった仕事が、更に伸びる可能性はあったが、氷野原と付き合うためにも大陸図書の仕事は、願ってもないものだった。

『はい、大陸図書、第二編集部です』

聞き慣れた声だ。

糸渡り、と称される、優秀でちょっといい加減な編集者は、丁度電話の側にいたらしい。

「邦光ですが」
『早いなぁ。ひょっとして、邦光さん、本職は探偵とか？』
妙に引っ掛かる言い方だ。
「……やっぱり。……で、何時です？」
総てを知っている、というふりをする。作品中で、何度か使ったシチュエーションだ。
『あれぇ？　邦光さん、タイミングが良かっただけ？　ダメだよ、引っ掛けようったって。俺は何にも喋りません』
現実は、こんなものだ。知ったかぶりは、あっさりと看破されてしまった。
だが、基本的にお喋りで、野次馬精神旺盛な近藤が、話の持っていき方次第では、情報を漏らしてくれることは判っていた。
「昨日、変な電話があって、凄く不機嫌になってね……。何か知ってます？」
『氷野原のこと？　それで、探ってるわけ？　うーん。カウンタースパイは、やっぱり報酬次第だね』
けたけたと笑っている。こういう言い方をするということは、喋ってもいいことらしい。
「いいですよ。〝コールドブラッド〟で飲み放題っていうのは、どうです？」
氷野原に関する情報提供の報酬に、一部の作家仲間内で有名なバーでの飲み放題を提示してみせる。

『……て、まさか……。あそこの常連？』
旨い具合に、喰い付いてくれた。
「昔、そこでバーテンダーをやってたんですよ」
『よし乗った。邦光先生、直々にシェーカー振ってもらって……。いいなぁ、それ……』
「判りました。お引き受けしましょう。……で、何があったんですか？」
一瞬間が空く。
それから、一段と声が低くなった。
『昔の男に呼び出されたみたいだけど。……よりを戻したがってるっていうのが、ウチの女史の分析だ』
「どういうことです」
『さあ。……こっから先は俺達には立ち入れないでしょ。プライベートなんだし』
「……近藤さん。楽しんでるでしょう……」
明らかに、面白がっている。
『そりゃあ、天下の邦光センセーが振り回されてるなんて、こんな見物、そうそうないでしょ。シェフィールドのマリちゃんなんか、センセーに妬いてもらいたくって、カレシ連れてきたこともあるんでしょ？』
「近藤さん。本職探偵ですか？」

同じ言葉を返してやる。
ひやひやと、楽しげに笑う近藤は、すぐに種明かししてくれた。
『邦光さん捜して、五、六軒、店を回りましたからね。他の編集さんとも顔見知りになれたし。今や、横のネットワーク、がっちりしてますから』
何やら、ベストセラー作家になったような気がする。
各出版社の担当者が集まり、年間の執筆スケジュールを決めるなどという作家もいたらしい。
「なんか、偉い先生になったような気がするな」
『もしかして、担当編集が集会してるから？　古い話知ってますねぇ。今時、そんな作家いませんよ。マネージャーがいたり、スケジュール管理会社作ったりしてますから』
へらへらと軽口を叩いているのは、肝心の話をしないためだろうか。
「……それで……。どこへ行ったか、判りますか？」
『氷野原？　打ち合わせ。まさか、真っ昼間から、男と逢い引きするわけないでしょ。どっかのホテルで待ち合わせしてんじゃないの？　ラウンジだって言ってたから』
酷く楽しそうに笑っている。
近藤は真っ昼間と言っていたが、外は薄暗くなっているし、打ち合わせと称して、男と会っている可能性もあった。

『邦光さん？　結構マジになってます？　大丈夫ですよ。冗談ですって……』
近藤が何やら喋っていたが、邦光は電話を切った。
充電器から携帯電話を引っ張り出す。
――どこにいる。会いたい。連絡をくれ――。
そう文字を打ち込む。
だが、送信する直前に、総てを消した。
もし、本当に昔の男と会っているのなら、こんな、嫉妬心まるだしのみっともないメールを送るのは逆効果だろう。
――原稿終了。どこかで食事をしよう――。
それだけを送る。ひょっとすると、格好をつけない方がいいのかもしれない。しかし、どうしても、氷野原にはみっともない姿を見せたくないと思ってしまうのだ。
昔の恋人と会うというだけで怒り狂うような、みっともない真似はしたくなかった。
「……バカだな……」
きっと、変な恰好付けをせず、心情を吐露した方が、氷野原の好みだろう。いつも恰好をつけているというのが、一番良く聞かされる文句なのだから。
だが、格好をつけていないと、自分が何をするか判らないのだ。会社に乗り込んで、氷野原はどこだと、暴れ回るかもしれない。

人質を取って、判れた女房に会わせろと喚く愚かな男の気分が、判ったような気がした。無駄だと判っていても、自分はこれだけ必死だと、アピールしたいだけなのだ。あるいは、ここまでやったと自分に言い訳しているのかもしれない。おそらく、結果は破局しかないと判っていて、捨て鉢な方法を取ってしまうのだ。

邦光がそれをしないのは、最悪の事態が訪れてないからかもしれなかった。

キッチンに戻って、冷めてしまったコーヒーを捨てる。

新たな豆をミルに入れて、ゆっくりとハンドルを回し始めた。

騒々しい音を立てて砕かれていくコーヒー。香ばしい香り。

熱いコーヒーを味わう頃には、邦光は少し冷静になっていた。

ついでに、シャワーを浴びて、髭を当たると、益々気分が良くなる。

ひょっとすると、単なる徹夜明の躁状態なのかも知れないが、思ったより疲れもたまっていなかった。

とっくにプリントアウトが終っていた用紙を纏めて、フロッピーディスクと共に封筒に入れる。

簡単に身繕いをした邦光は、珍しく、言い渡された締切通りに上った原稿を持って、家を出た。

4

この出版社の社屋の一階にあるちょっとしたラウンジのような造り応接室には、打ち合わせで何度か行ったことがあるが、編集部まで原稿を届けに来たのは初めてかもしれない。

時間が遅い所為か、原稿を届けた邦光が通されたのは、編集部の応接スペースだった。

大抵は外で会うから、こういう状況も、なんだか新鮮だ。

目の前で、涙を流さんばかりに感動して原稿を受け取った担当編集者が、しっかりと封筒の中味を確認している。しかも、ぱらぱらとではあるが一ページづつしっかりと。

確かに、編集の間で囁かれている〝最初と最後のページしかない原稿〟を渡したというエピソードは、誇張でも何でもなく事実だが、近頃の邦光志郎が締切を守るという評判は、まだまだ風評でしかないらしい。やはり、良い評判というのは、そう簡単には定着しないもののようだ。

と、原稿を封筒に納めた男が、口を開く。

「邦光さん。今度の話は面白いですか？」

これは、この担当の儀式だ。

単行本の書下ろしだろうが、雑誌の原稿だろうが、手元に原稿を受け取ると必ず聞く。

本人が面白いと言えないものは、誰が読んでもつまらないと言うのが、彼の持論だった。

だからと言う訳ではないが、邦光は必ずこう答える。
「もちろん」
まあ、実際、邦光は自分の書く話を面白いと思う。そもそもが、自分の書きたい話を書いているのだから、面白くないわけがないのだ。
楽しんで話を書くことと、話を書く苦労とはまた別の話だった。
それらは、邦光の中では両立する。
「そうですか。じゃあ、お預かりします」
この科白を聞く度に、頭を過る考えがある。
面白いかどうか判らない、とか、さらにはつまらない、と言ったら、この男は原稿は持っていかないのだろうか。その内、一度言ってやろう。
邦光は満面で笑う男の顔を見ながら、これも儀式のようにいつもの考えを思い浮かべた。
「ちょっと、待ってもらえますか……」
多分、飲みに行く誘いだろう。
断ろうと、邦光が口を開き掛けた瞬間、携帯電話が鳴り出す。
通知されている番号は氷野原のものだ。
「はい」
『あ……邦光さん？　僕です。今、どこにいる？』

珍しいこともあるものだ。氷野原は、今から行く、と伝えるだけでもメールの方を使う。
それに、この口調は、編集者モードでもない。
「音羽だよ」
『そっちが終わったら、来てよ』
もちろん行く。
氷野原から誘ってもらえるのなら、願ったり叶ったりだ。
「ああ、どこへ行けばいい？」
『ブライトン・ホテルのラウンジ』
「判った。すぐ行く」
そう応じると、通話はすぐに切れた。
電話を切り、顔を上げると、担当編集者が首を傾げている。
「聞いてたよね？」
「はい」
「じゃ、そういうことで。何かあったら、ファックス入れといて」
「ファックスですか？」
言いながら、男の目は、邦光の手の中の携帯電話に注がれている。
「ファックス。……文字で書いてくれないと……」

屁理屈にしか聞えない理由を告げて、席を立つ。
飲みに行く切っ掛けを失った編集は、少しばかり恨めしげな顔をしていた。もっとも、邦光が付き合わなくても、何かしら理由を付けて飲みに行くのは間違いない。
「わざわざありがとうございました」
頭を下げる編集者に軽く手を振った邦光は、早足で出版社を後にした。
タイミング良く走ってきたタクシーを捕まえて、ホテルに向かう。
車内に落ち着き、ふと、自分の恰好を見て、眉を寄せた。
編集者と会うには何の問題もない。だが、恋人とデートをするには、華やかさが足りなかった。せめて、もう少し鮮やかなポケットチーフで色を加えたい。待ち合わせの時間が決まっているわけではないから、ホテルでチーフを選ぶ時間ぐらいはあるだろう。本当なら、一度帰って着替えたいところだったが、氷野原を待たせるのは嫌だった。
ちらっと、時計を見た邦光は、溜め息を吐いた。
どうにもバランスが悪い。編集と会うのに洒落る気にもならず、デスクにあったスポーツタイプの時計をしている。これぐらいなら、外した方がましだ。
革の書類ケースに腕時計をしまうと、携帯電話の表示を、時計モードにした。
邦光の美意識から行くと、我慢できる限界というところか。氷野原があまり服装にこだわらないタイプだというのが、唯一の救いだった。

それでも、喉元に引っ掛かっているのは間違いない。
そしてその思いは、ラウンジで氷野原を見た時に、余計に強くなった。
急場しのぎのポケットチーフで胡麻化すのではなく、着替えに帰れば良かったと思ってしまう。常にカジュアルな服装をしている氷野原と会うのに、スーツはいただけない。
だが、ここまで来ておいて、回れ右をするわけにもいかない。何より、氷野原を一人で待たせるなどということはしたくはなかった。
入り口を見通せる場所に、席を取った氷野原は、いつもの通り、スーツなど着ていない。アーミーセーター風のスタイルは、イギリスの警官のようだ。細い身体に長い脚という体格が、余計にその印象を強くする。
手にしているのが紅茶の所為もあるだろう。
普段着ているセミチェスターコートは、無造作に纏められてバッグの上に乗せられているようだった。
服装の格は全く合っていないが、如何にも氷野原らしい。アーミー風のセーターも、デスク仕事に便利だからという理由でチョイスしたに違いない。
「……お待たせ」
「あ……」
ふわっと笑った氷野原は、次の瞬間、奇妙に顔を歪めた。

「変か？　何だったら、着替えてこようか」
「どうしてそういちいち恰好付けるかな。編集部に行くのに、その格好？」
心外なことを言われる。
家の中ではもっと隙を見せろというのは判る。だが、外で気を抜いていたら、ただのだらしない人間ではないか。
文句は胸の内にしまって、氷野原の横の椅子に腰を下ろす。
「ブレンドコーヒー」
邦光はタイミングを見計らって歩み寄ってきたウエイトレスに、そう注文する。
まともなホテルだけあって、素っ頓狂な声でオーダーが繰り返されることはなかった。
「――で、ここに誰か来るのかな？」
軽く唇を突き出した氷野原が、カップを口に運んだ。
ちゃんとした大人と言うには余りにも子供っぽい仕草だが、それが妙に似合っていた。
「近藤さんから、電話があったよ。……結構マジになってたでしょ？」
「なるだろう、それは。こっちは大真面目なんだから」
隣の席との距離があり、天井が高いホテルのラウンジは、話し合いに向いている。現に、すぐ傍の席で真剣な顔で向き合っている男たちの会話は、聞こえては来なかった。
その奥の席の中年女たち笑い声さえ、ＢＧＭに紛れてしまっていた。

言葉を選ばなくても大丈夫だろうが、露悪的な話をする気はなかった。
「昨日の電話の相手？」
「……そうです。あれから、原稿仕上げたんですか？」
「そう。感激されちゃったよ」
「そりゃ、感激するでしょう。……締切、明日ですよね。ひょっとして、徹夜ですか？」
「何？　クマでも出てる？」
「……本当、元気ですね」
呆れたような口調は、徹夜の疲れが出ていないことを保証してくれていた。
「何だったら、部屋を取る？」
「なに、ヒヒジジイみたいなこと言ってるんですか」
いつの間にか、氷野原に敬語が復活していた。かといって、編集モードになっているわけでもなさそうだ。
少しばかり甘えを含んだその眼差しは、何でも聞いてやりたい気分にさせるものだ。それこそヒヒジジイの気分を目一杯味わっている。
「ちゃんと、仕事は上げたから」
「……判ってます……」
一瞬の間で、部屋に来ることを承知してくれる。

子供っぽいかと思えば、こういうところはしっかり大人な態度だ。にやっと笑った邦光に、氷野原が小さく溜め息を吐く。
やはり、この笑いは気に入らないようだ。
「おまたせしました」
コーヒーが運ばれてくる。スペースの利用料金の価値しかない旨くもないコーヒーを口に運んだ邦光は、氷野原の様子を伺っていた。
気乗りしない様子で紅茶を啜る氷野原は、ロビーの正面入り口を気に掛けている。
ひょっとすると、新旧の男がこの場で対決、という図を画策しているのだろうか。
それなら、受けて立ってやる。
徹夜開けのハイテンションの所為か、邦光は殴り合いも辞さないという気分になっていた。雌を巡って、ライバルと戦うのは、牡の本能だ。いや、そこまで、直情的でもないか。どちらかと言うと、姫の歓心を買うために決闘をする、バカ貴族かもしれない。
「なぁ、聞いてもいい？」
目を眇めた氷野原は、それでも小さく頷いた。
「ここに来るのって、誰？」
「……聞いたでしょ？」
「え、近藤さんが言ってたの、本当なのか……」

余程、真剣な顔をしていのだろう。
氷野原はくすくす笑いながら、聞き返してくる。
「怖い顔しないでくださいよ。……何、聞いたんです？」
溜め息を吐いた邦光は、正直に告白した。
「別れた男に呼び出された」
「……ま、そんなとこです」
少し人の悪い笑みを浮かべた氷野原は、静かにカップを置いた。
昔の男に呼び出された場所に呼び付けられた邦光の立場は、何なのだろう。
単純に考えれば、牽制だ。
本当のところは知らないが、近藤から聞いた仮説が正しいなら、新しい男がいるからよりを戻す気はない、というヤツだ。もう少し穏便に仕事相手と言うにしても、喜んで呼び出されたのではないと氷野原も主張できる。
悪魔が住み付いている氷野原の脳味噌が、何を考えているのか、邦光には計りかねた。
まぁ、どんな役どころを振られても、こなせる自信はある。格闘家のような男に出てこられて殴り合い、などと言うことになったらさすがに勝てないだろうが。
「……ところで、俺がいること相手は知ってるの？」
「いえ」

「あ、そう」
「ビビってます？」
聞いてきた氷野原の顔は、明らかに揶揄っている。
意地悪な問いには答えず、邦光はコーヒーカップを空にした。
どんな状況になっても、逃げ出すという選択肢だけはない。みじめに負けるかも知れないが、臆病者という誹りだけは避けなければならなかった。
「大丈夫ですって。そんな、危ないヤツと付き合うと思います？」
「振られた男が豹変するっていうのは、よくある話だからな」
くすっと、息を漏らした氷野原は、腕時計に目をやった。
「振られたのは僕です」
ということは、新旧の男を並べて、比べようというのだろうか。
邦光をちらりと目を向けた氷野原が、言葉を続ける。
「凄く好みだったんですよ。こっちから口説いて、振られて。……結構、ショックだったな。それなりに上手くいっていると思ったのは僕だけで、向こうは不満をためていた。——よくある話でしょ」
どういうつもりで、過去の話をしているのだろう。
氷野原の真意が判らず、邦光はただ耳を傾けていた。

「どちらかが厭になれば終りにするしかないでしょう」
氷野原が自嘲気味な笑みを浮かべ、そう締めくくる。
それは、邦光に対しての言葉だろうか。
元々、氷野原は趣味ではないと言っているのだ。今まで続いていたのは、作家と編集という関係があったからかもしれない。しかし、自分から口説くような好みの男が戻ってくれば、お情けで付き合ってやっていた男の存在は邪魔になるだろう。
どっぷりと悲観的な考えに浸っているという自覚は、邦光にもあった。
急に邦光が落ち込んだのは、氷野原にも判るらしい。
「……今日は帰りますか？　実は、結構疲れているでしょう？」
まさか、最悪のシナリオを夢想して、邦光が疲れているとは思っていないだろう。徹夜明けの疲労を不意に自覚した、くらいに思っているはずだ。
「いや、大丈夫だ」
「けど、あれからずっと原稿を……」
言葉を途切れさせた氷野原の視線が、横に流れる。
どうやら、問題の男が現われたらしい。
判っていて、邦光はそちらに視線を向けなかった。
「大丈夫だよ。心配してくれるのは嬉しいが、それほどヤワじゃない」

ほんのわずか、声のトーンを下げる。
敏感に、その真意を嗅ぎ取った氷野原は、苦笑を浮かべた。
「……やあ、久しぶり」
平然と、男が声をかけてくる。
ようやく気付いた振りをして、邦光は視線を向けた。
長身だった。おそらく、邦光と同じぐらいの身長だろう。胸のVゾーンが狭く、襟が広いスーツは、いい生地を使っていたが、男の身体には全く合っていなかった。
値段とブランドで安心するタイプらしい。
そう見て取った途端、邦光の中に奇妙な優越感が湧き上がった。
「……こちらは？」
厭味な態度で、男が聞いてくる。
「ボディーガード」
とんでもないことを告げる氷野原に、男は目を剥いた。
その、間抜け顔の男の前に立って、手を差し出した邦光は、氷野原の大嫌いな唇の端を軽く上げるだけの笑みを浮かべた。
「始めまして。邦光と申します」
「あ……。足立です」



がっちりと、握手をする。
もちろん、親愛の情などではなく、牡としてのディスプレイだった。
まず、最初に力を比べてしまうのは、動物の感性が残っている証拠だろう。
「私、こういうものです」
足立が名刺を出す。
学生に人気の企業の名前と、係長という肩書きを見せたかったに違いない。
力の次は地位を誇示する。情けないほど、パターン通りの牡のディスプレイだが、これには邦光は乗ってやれなかった。
何しろ、切るべきカードがないのだ。そもそも名刺を持ったこともない。
「すみません。自由業なもので、名刺がないんですよ」
「ああ……。なるほど……」
何がなるほどなのかは知らないが、勝手に納得した足立は、スーツのボタンを外して、椅子に腰を下ろした。
身体に合っていないから、ボタンを外さないと座れないのか、それともブランドのタグが見せたかったのか。どうも後者のような気がして、邦光はうんざりとした。
この男が、氷野原に合わせてカジュアルな服装で現われていたら、自分の配慮のなさに、気が咎めたかもしれない。しかし、単なるブランドには、何も感じなかった。

もちろん、手首を飾る高級時計にもだ。本人のこだわりが見えない組み合わせからは、懐具合しか見えてこない。

ひょっとすると、その資金力こそ、足立が誇示したいものかもしれなかったが。

「二度と会いたくないんじゃなかったっけ？」

牡同士のディスプレイ合戦に、氷野原が口を挟む。

その顔には、明らかな怒りがあった。

下らない争いを繰り広げる二人に、呆れるのを通り越して、怒りが湧いてきたらしい。

ひょっとすると、雌を得る権利を、自分たちの戦いだけで決定するのが当然と言う態度が、気に入らなかったのかもしれない。

もちろん、この場合は、氷野原に選択権がある。

何より、氷野原は象海豹（ぞうあざらし）の牝ではないのだ。

「悪かった。……あの頃、ちょっと仕事で行き詰まってて……」

情けない声を出す足立を眺めて、氷野原が小さく笑った。

口元だけを歪めるそれは、苦笑というよりは、嘲笑に近い。

「僕もだよ。ずーっと仕事にかまけてるし、今更、変われない」

きっぱりと言い切る。

「……じゃあ、こいつは……」

「僕は変わっていないんだ。もう変われない……」
邦光のことを変わらなくてもいい相手だ、と言ってくれているらしい。
じわりと、勝利感が湧いてくる。
「こいつならいいのか？」
「そうみたいだ。……自分でも不思議なんだけどね」
にっこりと笑った氷野原が、コートを手に立ち上がった。
「じゃあ、行こう」
こういう態度は、逆効果のような気もする。しかし、自分の会社や洋服のブランドにプライドの根拠を求める男に対しては、いいやり方なのだろう。人目があれば逆上することもないし、みっともない真似はしない。
そう計算した上で、氷野原はホテルのラウンジを選んだようだった。
ごく自然な動きで小さなクリップ付きのボードを持った氷野原が会計に向かう。打ち合わせに使ったコーヒー代を編集が支払う。そんな自然さで、邦光も自然に受け入れていた。
呆然と、ソファーに腰を下ろした足立は、身動き一つ出来ないようだった。
下手に自分に自信があるだけに、完全に否定されるということに慣れていないのだろう。
ゆっくりと立ち上がった邦光は、足立を完全に無視して、氷野原の後を追う。
会計で領収書をもらっている氷野原に、軽く会釈する。

「……ごちそうさま」
「いいえ。……近藤さんに、弱み、握られたでしょう」
「人聞きの悪い」
「原稿ですか？」
「いや。コールドブラッドで奢るって約束を……」
「それ、まずいですよ。まだ退院して一月なのに。確か、まだ禁酒しているはずですよ」
「だったら、ウーロン茶をシェイクしようか」
「え？　邦光さんが？」
あくまでも、仕事上の付き合いという話を続けながら、ホテルを出る。
外に出た途端に、溜め息が出た。
とっぷりと日も暮れて、辺りには人影があまりない。駅までは遠く、近辺にあるのは都庁とオフィスビル、それにシティホテルくらいだから、歩く人間が少ないのも当然だ。
ホテルの前で、すぐにタクシーを拾うことも出来たが、二人はゆっくりと歩き始めた。
駅まで歩けぬ距離ではない。歩くのも一興である。
「……まったく……。どういうつもりだったんだ？」
「外面はいいからね。こういうところで会ったら、大丈夫だと思って……」
「癒し系じゃないのか？」

「そうだよ」
邦光には良く判らない感覚だった。
あの男が癒し系で、自分がカッコ付けが激しいと罵られる。どうしてそんな差が出るのかが、理解できなかった。
邦光の沈黙をどう取ったのか、氷野原が言葉を続ける。
「……だから、ああやって一生懸命格好をつけてるんだよ。底が浅いから、バレバレだっての。……だから身内になるといきなりだらしなくって……」
「それのどこが癒し系だ？」
「二人してだらしなくして、だらだらしてるのが楽しかったんだよ」
それのどこが楽しいのか、邦光には全く判らなかった。何より、だらしなくするのは、一人でもできることだ。そもそも、だらたらするのに、切っ掛けが必要などということは聞いたことがない。生活態度を正すために、切っ掛けや監視が必要だというのなら判るが、邦光が知る限り、氷野原はだらしない生活とは無縁に思えた。
「……よくわからない……」
正直に感想を言う。
「……まぁ、そう言われれば……」
「何がだ！　何が判らないって？」

足立だった。
まるで、気配を感じなかった。
気配を消していたのではなく、ひどく存在感が薄い所為で、気付けなかったという方が正しいようだ。すぐ背後に立っているのに、声を上げるまで気付かなかった。
男が追ってきたことに、氷野原はかなり驚いたらしい。
氷野原は珍しく狼狽えた様子で、振り向いた。
だが、男を見据えた顔は、いつもの氷野原だ。
「何してんの？」
呑気な言いようは、相手の怒りを煽るだけだと思うのだが、氷野原はそんなことはおかまいなしだ。
もっとも、言われた相手も、氷野原など見ていない。
足立が睨み据えているのは邦光だった。
溜め息が出る。
邦光を睨んで、足立が喚く。
「何も判ってない癖に！」
何が言いたいのか、判らない。
と、言うより、判りたくもない。

「判らんよ。……けど、あんたも判ってないだろ？」
そもそも、二度と会いたくないと言い放った相手に、にこやかに迎えてもらえると信じている感覚が理解できない。
多分、氷野原が何故、自分を拒絶したのか、この男は判っていないのだ。
それ以前に、判ろうともしていない。氷野原が離れていくのが、気に入らないだけだろう。自分から関係を切るのはよくても、相手から切られるのは我慢がならない。
自分から関係を切っても、未練たらたらでいつまでも待っている——まるで古臭い演歌に出て来るような〝別れた女〟を氷野原に期待したに決まっている。まさか、奇麗さっぱり切り捨てられるなどと、想像もしていなかったに違いない。
本当は自分のことが忘れられないはずだ。
そんな妄想を根拠に引き止めようとしても、相手は離れていくだけである。
よりを戻したいのなら、まず拒絶された事実を認めなければ駄目だ。その上で、新たに関係を築き直すしかない。恋愛関係に限らず、人間関係というものはそういうものだろう。
もちろん、邦光だって、氷野原の本心など判らない。
自分は氷野原ではないのだから。
だから、何を考えているのか押し測ろうと努めるのだ。
「ちょっとは考えろよ」

「いい加減なこと言うな！」
あたりも憚らず怒鳴った足立が、ずかずかと近付いてきた。
どうやら、本格的に切れてしまったらしい。
まずい。
邦光にしか、意識が向いていないところが、救いと言えば救いだ。
「お前みたいなヤツがどうして⁉」
まず、邦光に喧嘩を売るというところが、この男の性格を現わしている。
氷野原に対する所有欲より、何より、自分を負かした男が気に入らないのだ。
「さぁ、あんたが、鼻持ちならないナルシストだからじゃない？」
多分、今自分の顔は、冷笑を浮かべているはずだ。
「なんだと！」
なんだか、ガキの喧嘩だ。
相手を挑発して、先に手を出させて、などと考えているところが、大人の理性か。ついでに言うなら、相手から掛かってきたという証言をしてくれる目撃者が欲しいところだ。
ホテルの正面ならともかく、人目といえば、通りを走る車ばかりである。
「やめとけよ」
火に油だと知りながら、ついそんなことを言ってしまう。

それこそ、やめておけと、自分を窘める心の声には、目を瞑った。
ここで、ヒーローにならなかったら、どこでなるか、だ。
唖然と成り行きを見ていた氷野原が、邦光が戦闘意欲満々なのに気付いて割って入る。
「ちょっと……」
一瞬、引いた邦光と違って、男は益々い切りたった。
「煩い！　退け！」
氷野原を押し退けて、邦光に近付く。
本当に氷野原が目に入っていないらしい。
押し退けられた途端、氷野原が切れたのが判った。
足立の動きを見るべきだと、邦光にも判っていたが、思わず氷野原に目を奪われる。
ふわっと、踊るような動きで腕が動く。
軽く肩を叩いたように見えた。
次の瞬間、足立は腕を後ろに捻られて、その場に踞っていた。
「……氷野原……」
「ちょっと、押さえてくれます？　久しぶりだから……」
「あ、ああ……」
慌てて、足立の腕を掴む。

その途端に、足立が激しく暴れ始めた。
邦光は必死になって腕を掴んでいるのだが、自分と大差ない体格の男を押さえ付けるのは、難しい。
力一杯、腕を捻り上げて、動きを止めようとする。
「うがっ！」
「ちょっと、待って、待って……。そんなにしなくても……」
氷野原が手首を掴む。
ちょっと風変わりな腕の組み方、という雰囲気だが、足立の動きはぴたりと止った。しかも、かなりの痛みを感じているらしい。
夜になるとまだ寒い時期なのに、びっしりと汗をかいている。
思わぬ危機に、主人公を助けに現われたのは、自分が庇うはずの美女だった。そんな間抜けなシチュエーションを、自分で演じる破目になって、邦光は内心で溜め息を吐いた。
それなのに、氷野原は平然として、冷や汗を浮かべる男に声をかけた。
「……落ち着いた？」
「わ、判ったから……」
「ちゃんと、おとなしくしてる？」
「判ったって……」

用心深く注意しながら、氷野原が手を離した。
「……バカなのは可愛いけどさ、ものには限度があるって知ってた？」
ぺちぺちと額を叩く氷野原は、頭半分大きい足立より完全に優位に立っていた。
ひょっとして、この馬鹿さ加減を可愛いと思い、簡単に裏が透けて見える態度を癒し系などと表現しているのだろうか。
「悪かった……。けど……もう一度やり直したいんだ」
「だから……。もう戻る気はないって言っただろ？　もう終ったんだよ」
「こんなヤツがいいのか？　何がいいんだ？」
つくづく物分かりの悪い奴だ。
そんな問い掛けに意味がないとどうして気付かないのだろう。
氷野原は、比べて選んだ訳ではないのだ。単に、今は足立に興味がないのである。邦光と付き合っていることとは、また別の話だ。
それに気付かぬ限り、幾ら訴えようと無駄だった。
「それは関係ないだろ。僕が付き合ってるんだから、僕の好みだった。それだけのことだ」
にっこりと笑う氷野原は、つくづく容赦のない男のようだった。
「だったら、俺だっていいはずだろう。……俺だって……。凄く好みだって、言ってたじゃないか！」

取り縋る男に、氷野原は首を横に振った。
「もう遅いんだよ。一年前なら、考え直したかも知れないけど、あの時、なんて言った？　もう一緒にいられないって言っただろ？　二度と会わないって言っただろ？」
穏やかに、あくまでも穏やかに話を続ける氷野原の前で、足立は下を向いていた。
「……だから…ごめんって……」
「謝ってくれなくてもいい。原因は僕にもあったんだろうし……。だから終ったんだよ」
押し黙った足立は、ぶつぶつと何事が呟いていた。
「行こう」
氷野原が、邦光の腕を引いた。
「ああ……」
ゆっくりと歩き出す。
しかし、今度は邦光も背後に注意を払っていた。
のろのろと後ろから着いて来る男は、ある程度の距離を保っている。二人の後を付けているのか、駅に向かっているのか。どうとでも言い訳が出来そうなその間が気になる。
「……あいつ、バカでさ。いい大学出て、いい会社入って、だから自分が上等の人間だって信じてたんだよ」
声を落としもせずに喋り始めたのは、後ろから着いて来る足立に聞かせるためだろう。

これは下手な受け答えをしない方が良さそうだ。そう判断した邦光は、氷野原と歩調を合わせながら、話も適当に合わせ始めた。
「まぁ、そういうヤツは多いだろう」
「けど、普通、ちゃんと仕事をし始めたら、それだけじゃないって気付くだろう？　それがさ、取引先のオヤジが中学しか出てないくせに偉そうな顔をする、とか言ってたんだよ」
「あ？」
「工場で機械動かすしか能がないジジイのくせに、一人前の顔をしてるって言いやがって。……地の底を見るバカだろう？」
その通りだが、さすがに即座に賛同してしまっては、後ろを歩く男に気の毒になってきた。
「うーん。大学で教わったことだけが知識の総てなら、世の中さぞや判り易いだろうな」
「それそれ。熟練工の持っている技術を認められないぐらい薄っぺらいヤツでさ。だいたい、大学出たばっかの若造には何もできないってことも判ってないぐらいバカなんだよ」
酷い言いようだ。
確かに、かなり程度の悪い男のようだが、それでも氷野原は自分が惚れたと言っていた。どうしてそういう男を理想などと思ったのだろう。
「そういうのがタイプだったのか？」

「まさか。お前の方がバカだって説教してやったんだよ。……どうやら、僕は、飲むと結構説教魔になるらしくてさ……」

〝魔〟というほどではないが、アルコールが回ると説教が始まるのは邦光も知っている。恰好付けをどうにかしろと、何度も言われているのだ。

「結構、普段から説教が好きだろ？」

「まぁ……それは認める。……でさ、あのバカ。しゅんとしちゃって、結構、真面目に反省してたんだよ。それが可愛くってさぁ」

足立が距離を縮めてくる。

「けど、同じことを繰り返すってのは、ちょっとうんざりしたかな。……何もあんなところで会社の名刺持ち出すことないじゃないか。あんたが聞きたがったら、僕が教えられるんだし……。ああいうディスプレイって、すごく人をバカにしてるし、相変わらず、それしかないってのを見せられた気がするし……」

「まぁまぁ。それが通じる相手もいるんだし……」

「だから、僕には通じないってことだよ。いい大学を出たとか、いい会社に努めてるとか、金回りがいいとか。——それがウリなら、そういうのがいいっていう相手を見付ければいいんだ」

「あいつ、女も大丈夫なのか？」

いきなり、後頭部を平手で叩かれた。
「それって、差別発言」
「どうして。男同士で付き合うのに、そういうのは関係ないだろう。結婚するっていうなら、財力とか、考えるだろうが。……それが全部じゃなくても、判断材料にはなるだろ」
ぴたっと足を止めた氷野原は、真っ直ぐに邦光を見た。
少しばかり視線を上げて、きゅっと唇を引き結んだ顔が、どうしようもないぐらい可愛い。
思わず、この場でキスしてやろうかと思った時。
「……どうして付き合えるのか判った」
氷野原が言った。
「あいつはバカで可愛かったけど、あんたは間抜けで可愛いんだ」
ちょっと待て、と言いたかった。
恰好付けるなだの、気が休まらないだのと言っておきながら、間抜けで可愛いとはどういうことだ。
「本当。昔っから言われてるんだよね。僕って男の趣味が悪いって……」
ちらっと背後を伺う。
そこには、棒立ちになっている足立がいた。

何やら、気の抜けた顔をしている。
今更、何を言っても無駄だと、理解したのだろう。
何故だか、少しばかり同情の籠った目で、ぎこちない笑みを投げてきた。
笑みを返してやる代わりに、ひょいと、邦光は片眉を上げる。
「だから、そういう顔をさ……」
言いかけた氷野原が、溜め息を吐く。
「……帰ろう」
再び、駅に向かって歩き始める。
今度こそ、足立は付いてこなかった。

5

恋人の昔の男を追い払って、自宅に戻った後、することといえば、メイクラブだろう。普通。

今の愛を確かめて、幸せを味わい尽くす。

ところが邦光は、ベッドに入ると同時に眠ってしまった。

まさしく爆睡という表現がぴったりの、夢も見ない眠り。眠ったという意識すらない眠りは、唐突な目覚めで終った。

「あ……」

掠れた声が出る。

と、いい匂いが漂っていた。

「よく寝られるね……」

少しばかり呆れた声が降り掛かる。

「え？」

振り返ると、氷野原がいた。

「一度も目が醒めなかったでしょ」

「そんなに？」

「だいたい……」
時計に目をやった氷野原は、きゅっと眉間に皺を寄せた。
「二十時間」
「嘘だろう……」
「僕もあれから、ここで一眠りして、会社に行って、打ち合わせ二件熟して戻ってきたんです」
氷野原は妙に嬉しそうだ。
「この匂い……おでん？」
「そうです。この前、食べたいって言ってたでしょう？　言っときますけど、温め直してるだけですからね」
「そうなの？」
機械的に聞き返しただけだったが、氷野原は不満と受け取ったらしい。
「こういうのは、大量に煮込んだ方が絶対においしいの！　だから、屋台のおでんて、おいしいでしょう。一人分二人分、ちまちま作っても駄目なんだ。三日間、おでんが続いてもいいなら、作ってあげてもいいけどね」
「そういうものなんだ」
なんだか、妙に納得してしまう。

シチューなども、そういう類の料理かもしれない。
「で、食べるんですか？」
「もちろん、食べる」
むくりと起き上がると、氷野原が笑った。
「なんだよ……」
「そのカッコ」
自分を見下ろすと、バスローブが開けて、何ともみっともない有り様になっている。
そう言えば、シャワーを浴びて、ベッドに上がった途端に、眠ってしまったのだ。
「ホントによく寝てたよね。……髪を乾かしてたの気付いてた？」
「いや……」
本当に記憶がない。
「ドライヤーまで使ったのに」
呆れ顔で、氷野原が呟く。
さすがにそれは驚きだ。
小さく咳払いをして、ベッドを降りる。
と、氷野原が手を伸ばして、くしゃくしゃと髪を掻き混ぜた。
「オールバックにするの止めたら？」



「なんで？」
「髪下ろすと、随分若くなるよ」
それがいやだから、オールバックなのだ。
「……気が向いたらな」
言いながら、クローゼット向かい、着替えを取り出す。
ローブを脱ぐと、背中に視線を感じた。
シャツの袖を通す間も、スラックスを穿く間も。
「何見てんだ？　人の着替えが面白いか？」
視線は向けずに聞いてやる。
「……面白いって言うか……。邦光さんのスーツって、全部テーラーメイドでしょう」
「……そうだけど……」
何を突然、だ。
また、誹謗されるのかと、ぼそぼそと応じる。
別に格好を付けているわけではないのだ。自分の身体に合わせて作るのだから着易いし、何より、体格にあったものを見付けるのが面倒だから、仕立てるのである。第一、ブランド物のスーツを買う金を払うなら、仕立てても大差はない。
「最初に見た時ね。きっと中味は弛んでるんだろうなって思ったんだ」

「失礼な」
「だって、イギリスのスーツって、凄い締まって見えるだろ？　イギリスのテレビドラマとか見たことある？」
「さぁ、意識して見たことはないかな」
「出て来る俳優が、みんな細いんだよ。けど、スーツ脱ぐと、笑っちゃうくらい弛んだ腹してたりするんだ。イギリスの仕立て屋は、細いシルエットを作るのが自慢なんだって」
なんとなく、何を言わんとしているのかが、見えてくる。
「もしかして、スーツで体形カバーしてると思ったってことか？」
「あたりー。……なのに、脱いだら、いいガタイしてるからさ。ちょっと、うっとりだったな。邦光さんならイタリアのスーツでもバッチリだ。カッコいいと思うんだけどな」
「お褒めに預かり、恐悦至極にございます。……でもなあ……」
イタリアのスーツには、ちょっと厭な思い出がある。
苦笑を浮かべた邦光を、氷野原は訝しげに見返した。
「なに、笑ってんのよ？」
「昔、イタリア旅行したことあってな。一緒に行った奴にそそのかされて、作ったんだよ、スーツ。ところがさ。仕立て上がって着た途端に、イタリアン・マフィアとかいわれて、大笑いされたんだ」

一瞬、目を剥いた氷野原が、次の瞬間、爆笑する。
「想像したな」
ひとしきり笑った揚げ句、氷野原は一人で頷いて納得している。
「言えてる、言えてる」
「何が言えてるだ。スーツの仕立方に種類があると思わなかったんだ。国内で作れば、大抵イギリス式だろ」
「そうか。スーツなんて、作ったことないからなぁ」
「その割には、変なこと知ってるじゃないか」
「誰だったかなぁ。担当の作家さんが言ったんだ。吊るしのブランド物買うくらいなら、同じ値段で作れるって。……そん時、レクチャーしてくれた。結局、作らなかったけどね。確かに、日本でブランド物っていうとイタリア製が多いじゃない。あれって服の中で身体が泳ぐと、超絶カッコ悪いんだよね」
氷野原が眉を顰めてぼやく。
「作って、やろうか」
「え？」
「細い割に、肩幅とかしっかりあるから、中々あうスーツないだろう」
ひょいと肩を竦め、氷野原はキッチンの方に行ってしまう。

「なんだよ。怒ったのか」
「別に。……いいんだよ。スーツなんて着ないから。礼服一式あれば、それでいい」
そうは言うものの、明らかに、機嫌が悪くなっている。
もしかして、細いと言われることに、コンプレックスでもあるのだろうか。
やっぱり、氷野原の感性は良く判らない。思わぬ反応を返される度、邦光はびっくり箱を開けたような気分になる。
それが嬉しいのだから、困るのだ。不機嫌な氷野原の機嫌を取り結ぶのも、この頃では楽しみになっている。我ながら、ちょっと自虐的だと思う。
こっそりとキッチンに侵入して、鍋の前に立つ氷野原に近付いた。
「なぁ。明日の予定は？」
「明日？　明日ねぇ。いつも通りかな。次の号は、近藤が総括だから……」
冷蔵庫の中を漁る振りをしながら、キッチンに居座る。
「ビール飲む？」
鍋を見詰める氷野原に、聞いてみる。
「いらない。説教魔神になりたくないから。……邦光さんも、ビールばっかり飲んでると、腹出るよ。少しは運動してるの？」
「してるよ。暇ができたら泳いでる」

「へぇ、今度連れてってよ。スポーツジムって行ったことないんだ」
珍しく、氷野原が話にあっさり乗ってくる。
「ジム？　行かないよ、そんなもん」
「え、泳いでるって……」
訝しげな顔で振り向いた氷野原に、笑いながら事実を教えてやる。
「焼却場の隣の区民プール。ただ泳ぐんだから、それで充分。かなり奇麗だぞ」
途端に氷野原が溜め息を吐く。
「……そういうこと、あっさり言っちゃうとこがなぁ」
「だって、本当なんだから……。時間帯さえ間違わなきゃ、調子いいぞ。時々、水中ウォーキングやってるおばちゃんの集団にあったりするけどな」
「変なの」
呟いた氷野原が、鍋の火を止めた。
「何がいい？　大根だけは一杯あるよ」
「うーん……まだ、胃が起きてないな。……君っていうのは駄目？」
氷野原の身体を、背後からそっと抱き込む。
「そうだなー。どうしようかなー」
迷う言葉とは裏腹に、声音には妙に艶っぽい響きがある。

「選んでくれたんだろ？　だったら……」
ふっと、氷野原が消える。
次の瞬間には、腕が捻り上げられた。
「どうしてそういうこと言うかな。……興醒めだろ？」
全身の力を拭いて、逆らわないようにする。この技に抵抗しようとするとどうなるか、邦光は嫌というほど見せつけられたのだ。
「……ひょっとして合気道とか？」
「どうだろ。柔術とか逮捕術とかいうヤツだと思うけど……。ガキの頃に爺ちゃんに教えてもらったんだよ。ほら、ボクってガキんちょの頃から可愛かったから、変なヤツに狙われたり、悪ガキに喧嘩吹っ掛けられたりしてたんだよね」
「そうか……」
腕が解放される。
「駄目だよ、そこで納得しちゃ。ガキの頃から生意気だったって言わなくちゃ」
「そんなこと言ったら、思い切り捩じ上げられそうだ……」
「まぁ……ちょっとはね。思い切り捻っといて、逃げるんだよ」
どうやら、かなりサバイバルな少年時代を送ったらしい。
付き合い始めて三ヶ月。

十一月末から始まって、まだ二月。
時間に余裕がない所為で、ゆっくりと話したことは数えるほど。知らないことはいくらでもあった。お互い、正月にも仕事をしていたことだけは判っていたが、互いの両親が存命なのかどうかも知らないのだ。
「生兵法は大ケガの基って知ってる？」
「知ってますよ。でも、あいつがスポーツがからきしなのは知っていたし……。邦光さんはそんな酷いことはしないでしょう？」
ちょっと上目遣いで見られたら、うんと言うしかない。
いささか乱暴に抱き締めた邦光は、久しぶりの唇をたっぷりと味わった。
負けず嫌いの性格が、キスの一つにも表れている。感じさせられるのが嫌いなのではないかと疑ってしまうぐらい、対抗意識を燃やしてくるのだ。
ベッドに入ってもそれは同じだった。
何があっても主導権は手放さない。
前を煽りたてられながら、後ろを慣らされている間も、邦光の身体に手を這わしてくる。
ゆっくりと挿入したものをうねる肉が煽りたて、引こうとすればぎちぎちに締め付けた。
「あっ……いやっ……。もっと……そこっ……」
尖った顎を突き出して、甲高い声で鳴き始める。

その声は、男に勝利感を味わわせるものだった。
自分のテクニックが、負けず嫌いの一人前の男をここまで乱している。そう思うと、肉体だけではない、精神の充足感まで味わえる。
ゆっくりと、だが、深く犯しながら、あられもない声を上げる氷野原の中を堪能した。身体で感じる直接の快楽と、上気した身体を視線で侵す快楽。
耳に届くあえやかな吐息や声も、舌先に感じる味も、鼻孔を擽る汗の臭いも。総てが邦光の官能を煽る。
何故、こんな生き物が、存在するのだろう。
考えるだけ無駄なのは、邦光も知っている。
答えを出す余裕がないことも。
こんな時だけ素直な氷野原が、理性的な思考など無駄だと教えていた。
感じるままに、本能の赴くまま、貪ることを許してくれる、特別な存在。
それだけだ。
「突いて、突いて……そこっ……あああっ……」
柔らかい草むらから勃ち上がったものが、涙を流して震える。握り込んで、擦り上げてやれば自分のものが痛いほど締め上げられる。
だが、邦光はそれには触れなかった。

しっとりと汗の浮いた太股を抱え上げて、自分の腹も触れないようにして、突き込んでゆく。
少しでも引き伸ばしたいと思うのは、牡の本能だろう。
この、美しい牡を、もっと乱してやりたい。
きゅうきゅうと締め付けてくる肉を、存分に味わいたい。
しかし、悪戯な指は邦光の乳首を摘み上げた。
「うっ……」
牡に向かって、電流が走る。
「あああっ……い、いい……。ああっ……あっ……あっ……」
びくびくと、勝手に踊る牡に翻弄されて、氷野原が声を上げる。
そして、引き千切られそうな勢いで締め上げられた。
ふわっと緩み、じわじわと締め上げる。かと思えば、激しく腰が動き、全長をくまなく絞めていく。
燃えるように熱い肉に、どこまでも飲み込まれていく。
まるで、総てを搾り取る、底なしの快楽だった。
それに溺れる邦光に、抗う術などない。
「くそっ……。こ、のっ……」

相手を屈伏させようなどという思いは、とっくに霧散した。
引き摺られて、こちらが先に降参させられそうだ。
「そこっ……もっと突いて……えぐって……」
膝を肩に担ぎ、総てを使って追い上げていく。
「いいっ。いっ……ひいぃぃ……」
がくがくと痙攣する身体。
内側も激しく痙攣して、邦光を追い詰めた。
「うっっ……」
完璧な同調（シンクロ）。
完全な解放。
どさりと、ベッドに倒れ込み荒い息を吐く氷野原に、小刻みなキスを落とした。
「……愛してる……」
目許にキス。
薄く開いた口で身体の熱を逃がす氷野原は、何か喋ろうとして、ごくりと喉を鳴らした。
「……急ぎ…すぎ……」
声が掠れている。
「がっついて、ごめん……」

鼻にキスして、ベッドを降りる。
キッチンに向かい、ミネラルウォーターにライムを絞って、氷野原の元に運んだ。
「……何か着ろよ」
一気にグラスを空にした氷野原が、眉を顰めて邦光を見ていた。
「……悪い……」
床に落ちていたバスローブを羽織る。
「んなエッチ臭い身体見てたら……その気になっちゃうだろ」
「そんな嬉しいことを言って……」
軽いキスを受けていた氷野原は、ねっとりと唇を舐めると、胸を押した。
「……駄目だよ。死んじゃう……」
男のプライドを擽る断り方だ。
だが、状況によっては逆効果にもなる。そして、睡眠の足りた邦光にとっては、間違いなく逆効果だった。
「やさしく殺してやるよ」
「ばーか。……だから、ハードボイルド男は嫌いなんだよ」
鼻を摘んだ氷野原は、軽いキスをしてきた。
「……けど、クサイのも、間抜けなのも、可愛いよ」

思い切り引っ掛かる言葉だが、この際、褒め言葉として受け止めておこう。
複雑な邦光の表情を正確に読み取った氷野原は、頬にキスをした。
「ごはん食べよう」
現金なもので、途端に胃袋が存在を主張し始めた。
「続きは、後で……」
下半身にくる声。
食欲と性欲がせめぎ合う。
しかし、その勝負は氷野原がジャッジした。
「ベッドメイクして、テーブルを拭いといて」
それだけ言い残して、バスルームに消える。
やはり、氷野原には適わないようだ。
主導権は、彼にある。
苦笑を浮かべた邦光は、自分が剥ぎ取った氷野原の服を拾い集めて、きっちりと畳み始めた。

6

黒い上着に、白いドレスシャツ。さらに自分はバーテンダーではないと主張するように、ブルーグリーンのネクタイをクロス・ノットで結んでいる。

その装いでカウンターの中に入った邦光は、シェーカーを振っていた。

「偉くなったわねぇ。ウチで編集さんに奢るだなんて」

アルバイトをしていた頃から婆さんだったママは、やっぱり婆さんだった。

若造にとっての八年は長いが、老人の八年はさして影響がないのだ。白髪の具合も昔と同じだし、急に皺が増えるなどと言うこともない。

鏡張りの棚の前にずらりと酒が並び、カウンターの中にはママとバーテンダー。二人の他に邦光が入っても、充分余裕がある造りだった。

カウンター席の他に、テーブル席が三つ。それぞれが、完全に独立していて、隣のスペースの声はほとんど聞えないし、一番奥のコーナーは、酔っぱらった常連が寝転がれるように、ベンチシートになっている。

実は、奥に大きなキッチンがあって、結構本格的な料理も出す店だった。

ただし、邦光がいた頃は、である。当時、裏を取り仕切っていた男は、数年前にレストランを開業したという話だ。現在、キッチンがどうなっているかは、邦光も知らない。

カウンターの前には近藤と氷野原。
シェーカーの中味を大きめのゴブレットに入れる。
「どうぞ……」
差し出されたゴブレットを、近藤がじっとりと睨んでいた。
「何？」
「ウーロン茶です」
「そんなもんシェーカーで振らないでくださいよ」
「編集長命令ですから」
「だめよぉ。お医者さんの許可が出たらもう一回いらっしゃい。あたしが快気祝いで飲ましてあげるから」
けらけらと笑うママは、彩り良く盛られたカナッペを近藤の前に差し出した。消化に良さそうなものばかり選んでいる。
カウンターの中に入らせてもらうにあたって、邦光はママに事情を話してあった。
もちろん、氷野原との関係は喋っていないのだが、どうもばれているような気がして、居心地が悪い。
「もりやさんも、いらっしゃるんですか？」
「森谷さん？　ええ、相変わらず。お知り合い？」

「ええ、以前、担当をさせていただいていましたから」
「あらぁ、じゃあ、呼び出したら？」
楽しげに笑うママは、やはり、邦光と氷野原の関係を察しているのかもしれない。旧悪のほとんどを知っている森谷になど、絶対に同席してほしくない。ママなら、節度を守って暴露話をするだろうが、酒が入った森谷は、まるで信用できなかった。
「勘弁してくださいよ」
「何？　昔の悪さがバレるって？」
勘のいい氷野原は、邦光の危惧などすっかり判っているようだ。
苦笑を浮かべて口を噤んでいると、近藤まで妙なことを言い出す。
「邦光さん、謎の人だからなぁ。……経歴どころか、出身校も謎。判ってるのは電話番号と銀行口座だけだし」
「住所も判ってるでしょう？」
「まぁね。けど、仕事上必要なモノだけってのが、引っ掛かるんだよ。せめて、どこの大学か、教えてよ」
「知らなかった？　高卒ですよ」
「えぇ？　そうなの？」
「そうです」

きっぱりと言い切った邦光は、ちらりと氷野原を見た。ブランドを振りかざす男をバカにしていた氷野原が、どういう反応をするのか確かめたかったのだ。
「どこの高校？」
明らかに、興味津々という顔で、氷野原が聞いてくる。
「秘密です。……ひょっとして、何か弱みを掴めるとか、思ってるでしょ」
「えええぇ？　そんなことはしないって。ねぇ、近藤さん」
「そうそう。弱みはもう充分握ってるから……。けど、どっかにオールマイティカードがないかなって……。結構高く売れそうなネタだろ？」
「残念でした。バレて困るようなネタはないな……。正直者だもんで、隠し事が出来ない」
如何にも疑わしい、という顔で二人は邦光を見詰めている。
「何？　疑ってるの？」
「正直者って言うのが嘘臭い。……だって、作家ってのは、嘘吐くのが商売でしょ？」
氷野原がしれっと言い放つ。
容赦がないと言うか、それこそ正直者と言うか。
「嘘を吐くのが商売だから、実生活では正直なの。キャパの問題だよ。嘘を吐くのって頭使うだろ？　面倒じゃないか」
満更嘘ではない。

「ふーん」
信じていないと、表情が言っている。
「まぁ、いいけどな。……で、氷野原くんは何が飲みたい？」
「レインボー。……七色のヤツね」
「ヤだ。面倒くさい。ドライマティーニにしとけ」
笑った氷野原が、それでも文句を付け加える。
「えー。オリーブ二つとか入れないでよ」
と、横で近藤がぶつぶつと言い出す。
「……いいよなー。仲良しで……。俺なんて、ウーロン茶なのに……。酒と違って、こんなん飲んでたら、腹がちゃぷちゃぷしちゃうよ」
「まぁまぁ、病気なんだからしょうがないでしょ。十二指腸に穴開いたんだから……」
近藤の相手は氷野原に任せて、マティーニを作る。
ドライジンとドライベルモットをステアして、グラスに注ぐ。
オリーブをオマケするのはやめて、コースターに乗せてやった。
羨ましそうに見詰める近藤を尻目に、氷野原が優雅にグラスを口元に運ぶ。
邦光のことを、恰好付けが激しいのなんのと文句を付ける癖に、この男は自分を見せる演出をちゃんとするのだ。無意識なのは、見ていても判る。

もしかすると、無意識にそうしている自分を自覚しているから、余計に邦光を詰るのだろうか。

一種の同族嫌悪だとしたら、甘んじてその誹りは受けてやろう。氷野原が、自分自身をあまり好きではないらしいのは、短い付き合いの中でもなんとなく判ったから。

「近藤さんも、お代わりいかがです？」

「ああ、ください。ください。……ああ、医者にＯＫ貰ってくるべきだった。こんなの返ってストレスじゃないか」

自棄糞気味の近藤には、ちょっと同情したくなった。

今日くらいしか暇がないと、勝手に日時を指定したのは、邦光の方なのだ。

「悪かったね。……でも次の締切があるから……」

「判ってます」

近藤が溜め息を吐く。

「完治したら、て言うか、医者のＯＫ出たら教えてよ。改めて付き合いますよ。ママも飲ませてくれるって言ったしね」

「ホントに？」

「嘘言ってもしょうがないでしょ」

照れたように笑った近藤が、ひょいとスツールから立ち上がる。

「よーし、じゃあ、腰据えて飲むかな。……トイレ行ってこよう」
「え……あ、どうぞ」
腰を据えて、ウーロン茶を飲むのか。本当に自棄糞になっているらしい。
奥の扉に消えていく近藤を見送り、邦光は溜め息を吐く。
次を約束することで、お引き取り願おうと思ったのに。
「……知ってる？　近藤さんて、水でも酔っぱらえるんだよ。……トイレは近くなるけどね。もともとお酒は強くないんだ。好きだけどね」
氷野原が楽しげに教えてくれた。
「変なヤツ」
「大学の頃から、ウーロン茶飲んで場を盛り上げるんで有名だったんだ」
「セーブすること知ってるなら、たいしたもんよ。弱いくせに、潰れるまで飲む人間なんて、山ほどいるもの」
横から、ママが口を挟む。
どうやら、近藤はママのお眼鏡に叶ったらしい。
「青海ちゃんのお酒も始末はいいわよ。記憶がなくなる時はあるけど、乱れないから」
「知ってます、それ。ちょっと見素面なんだよね」
「そうでもなきゃ、高校生なんて雇わないわ。どうしたって飲む機会も多いからね……」

「ちょっとママ！」
「時効だもん。最初に来た時から、今と変わらない体格してたしね。顔だって大して変わってないもの」
「うそー。コーコーセーでバーテンダー？　それって、でき過ぎ」
氷野原はマティーニ一杯で、まるで酔っぱらいのテンションだ。
「氷野原くん！」
「老けた高校生でさ。最初は騙されたのよ。……この人生経験豊富な、私が」
ころころと笑ったママは、如何にも楽しそうだ。
いい加減にしてほしい。
「……確か、大学入学するまで、バイトしてたのよね」
「そうでしたね」
「えっ……さっき、大学行ってないって」
立て続けにデータが与えられ過ぎて、パニックを起こしてしまわないだろうか。互いの誕生日も知らない徐行運転中の恋人同士には、データ流入が急すぎないか。
そんな邦光の不安をよそに、氷野原の視線は好奇心に満ちていた。
「行ってないも同じ。三日でやめた。……入学金とか、パーだぜ。——入学ガイダンス出ただけだったなぁ。せめて、前期の授業料は返してほしかった」

「なんでまた……」
「忙しかったんだよ。デビューしてたいして経ってなかったし、依頼を断る度胸も機転もなかったんだ。……小説家で喰ってくつもりだったしね。その内、面倒になっちゃって」
言ってしまってから、口を滑らせたことに気付く。
氷野原も聞き流してはくれなかった。
そんな邦光の不安をよそにいつも冷静な目が、驚きに見開かれている。
「聞いちゃった？」
死亡記事が出るまで——死亡記事を書いてもらえるような作家になっていたとして——年齢詐称を続けるつもりだった。そう決めてしまえば、隠すことが楽しみにもなる。顔写真も含めて、極力自分のデータを公表しないのは、幼馴染に発見されないための努力だったのだ。
しかし、ここにいる編集兼恋人には、バレてしまったかもしれない。
「しっかり……。邦光さんて……デビューして、七年？　八年だっけ？」
今更、どう言いつくろっても無駄だろう。
だから、邦光は正直に言った。
「足かけ八年……」
「高校生でデビューしてたの？」

「……まあな……」
「てことは……ボクとタメ!?」
「多分……そんなもんじゃない。あれ、誕生日何時？」
「七夕。――て、そうじゃないでしょ。……確か、三十とか言ってなかった？」
「あれはなー。卒業と同時にデビューって言ったら、インタビュアーが大学卒業と勘違いしたんだよ。あんまり若いと舐められると思って、そのままにしといた」
「年齢詐称だ」
氷野原が呟くと同時に、奥のドアから、近藤が出て来るのが見えた。
「その話は、後で……ね？」
察したのか、氷野原は意地の悪い笑みを浮かべた。
「これって、オールマイティカード？」
「さぁ……今更じゃない？」

END

あとがき

今更言うまでもありませんが……。

この話はフィクションで、登場する人物、団体名は総て架空のものです。

喩え、昔、糸渡りの××と呼ばれていた編集者がいたとしても、本作とは一切関係ありません。……見ちゃいないだろうけど、もしこれに気付いたら……。××さん、ごめん。

いやぁ、社会人モノを書く場合、どうしても普通のリーマンが書けなくて……。何しろ新田は、会社勤めの経験が皆無。アルバイトの経験さえないんです。印刷屋でデザインやったとか、版下作ったとか。電気工事士とかクリーニング屋でスチームアイロン掛けてたりとか……。きっと、普通のリーマンが一番謎の職業なんだろうな。そもそも、普通のリーマンの普通が、どこまでなのかが全く判らないし……。編集も普通のリーマンだって言った人もいたしな。しかし、夜中の二時に会社から電話を掛けてくる普通のリーマンはいないと思います。出版社とワシらが住んでいる田舎には時差はない…はずだ。

最後になりましたが、藤河さん。こんな変な職業シリーズ（ワシらの間での符丁）のイラストを引きうけてくださってありがとうございました。

新田一実

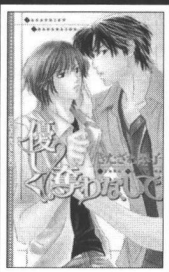
ECLIPSE ROMANCE



yy・ダブル・ワイ

高崎ともや　ill.桜城やや

便利屋『yy』を開業した矢蔵。お人好しでアクシデント体質の矢蔵には、何かとフォローしてくれる唯一の部下・柳が、欠かせない存在。…だからって「可愛い」「大好き」ってのが口癖の柳に迫られてもどう対処すりゃいいんだ!?



優しく奪わないで

きたざわ尋子　ill.永瀬由成

倉木に体も心も奪われて、更に強引に同棲させられた真宮。戸惑いながらも真宮は、倉木の本気を受け入れようとするが、そんな気持ちとは裏腹に自分のどこにそんな価値があるのか理解できない不安があって……。



ダブル・トラブル・ラブ

櫻井ちはや　ill.かんべあきら

青翔学園高等部の制服採寸日。双子のおっとりお兄さんの咲夜が、やんちゃな弟・菜月の世話を焼いていると、突然、長身の男・此花が菜月に声をかけてきた。どうやら女の子と間違えたらしく、咲夜と菜月が離れようとしたら!?



白衣のーNモラリスト

高円寺葵子　ill.三島一彦

最低最悪にツイてない日、高校一年生の美黎は不意の事故で入院するハメに。担ぎこまれた先は、入院するとどんな軽症も悪化すると有名なお化け病院!天才外科医・風間の適切な治療と担当医である早田の好青年ぶりに気を許した美黎だが!?

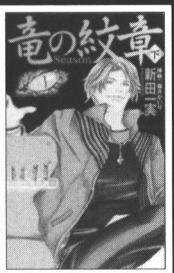
ECLIPSE ROMANCE



竜の紋章（上）

新田一実　ill.霜月かいり

巨大宇宙ステーション・ダレスの支配者・ラグイルは、整いすぎた顔と冷静な振るまいゆえにアンドロイドのようだと評されていた。そんなラグイルを王のようにも娼婦のようにも扱い、愛を語る謎の宇宙貿易商人ドレイク。煩わしさを感じつつも次第に惹かれていくラグイルだったが…。



竜の紋章（下）

新田一実　ill.霜月かいり

巨大宇宙ステーション・ダレスに君臨するラグイルは、未来を見ることのできる〝未来見〟を傍仕えとして所有していた。その未来見であるユヴェールの短命を救える方法を知っているという宇宙貿易商人・ドレイク。しかし彼がその情報の見返りとして要求してきたのはラグイルの体だった。



イケナイ恋の罠

森本あき　ill.すがはら竜

イベント会社に勤める遠山薫は、素直でかわいらしいが仕事は不器用でトロい。ところが、ある日突然、社内でも有名なエリート社員・土屋の秘書を命じられる。土屋の下で始まる新しい仕事を前に、期待と不安で胸がいっぱいの薫を待ち受ける昼&夜のお仕事とはいったい!?
とびきりキュートでエッチなリーマンラブ。



夢中なリトルにキス

杜家つきひ　ill.冬乃郁也

低い身長がコンプレックスの元気いっぱいのサッカー少年・真鍋光流。ある日、お気に入りの場所で一人昼食をとっていると、校内一の人気者・室田彬が現れ、光流に向かって「豆（チビ）」と言い放つ。キレた光流はサッカーで鍛えた自慢の左足で蹴り倒す。その後、誤解は解け、友達になったはいいが、今度は光流をペットがわりにする室田に困って…。

ECLIPSE ROMANCE



飲んだら最後!?

月野りんこ　ill.北里亜美

生徒思いの優しい高校教師と評判の宮原亮介。しかし、本人は全く覚えていないのだが、アルコールが入ると人格が豹変するという悪癖をもっていた。不始末をしでかした宮原は、町までバスで30分の僻地の落ちこぼれ高校へと転任させられる。そこで、かつて赴任していた高校の生徒で、本人に記憶はないのだが手を出していた水島という生徒に再会し…。



スーツの玩具

六本木曜　ill.DUO BRAND.

シライシグループの社長を務める兄の白石亜郷から玩具のように抱かれ続ける三島真生。それは社長室でも広大な邸宅でも繰り返される情事。父違いの兄は自分をおいて出ていった母を憎むように真生を抱くのだ。有無を言わせぬ夜の接待、兄をどんなに愛しても愛されない孤独。だが、そこに年下の男・咲谷司が現れ、「オレを愛人にしてよ」と言い放ち――



聖華学院へようこそ!

篠原まこと　ill.えのもと椿

生徒会長は「大統領」と呼ばれ、寮長は「皇帝」と呼ばれる由緒ある男子校、聖華学院!。三上響は、念願叶って大好きな義兄・小田切大河の通う聖華学院へ転校する。だが、大統領として学園をとりしきる大河は響にそっけない。そんなある日、響は皇帝の西園寺に愛を告白され……。いい男揃いの男子校を舞台にしたちょっとHな学園ラブ♥



密室のポーカーフェイス

京橋ナルミ　ill.祭河ななを

高校生の小笠原蛍は、幼い頃に誘拐された経験から「密室恐怖症」になってしまう。そんな蛍を発作のたびに力強い腕で抱きしめてくれるのは、8歳上の幼なじみで敏腕弁護士の戸川真雪。だけど真雪は、エリートで顔もよくっていくらでも女にもてそうなのに、男の蛍に「好きだよ」って頻繁に言ってくるからとまどってしまう……。これって本気なの!?

エクリプスロマンス 最新刊　本体価格857円＋税

エクリプスノベルズは毎月20日発売♥

好評発売中

お坊ちゃまにセクハラを♡



名倉和希　illustration.笹生コーイチ

次から次へと襲ってくる
セクハラの嵐に世間知らずの
お坊ちゃまはどうなる!!!?

●STORY●
日本有数の大企業・FUZIビールの御曹司である志藤香流は、10歳上の恋人・御神康博に夢中♥　御神の、眼鏡の奥のクールな瞳で見つめられると、香流は胸の奥がキュンとなってドキドキが止まらないのだ。しかもベッドの中での御神は、香流にお仕置きしたり、イタズラしたり…。
いろんなHなことをしてきて、世間知らずの香流には刺激がいっぱい。
始めたばかりのお仕事では、取引先の社長に迫られたり、とトラブル続きで——。
お坊ちゃまはどこまでセクハラの嵐に耐えられるのか!?
絶対必読！　お坊ちゃま飼育ラブコメ♥



ECLIPSE ROMANCE

この本を読んでのご意見・ご感想
ファンレターをお寄せ下さい。
〒153-0051　東京都目黒区上目黒1-18-6　NMビル3F
（株）桜桃書房　第一編集部
「新田一実（にったかずみ）先生」係／「藤河るり（ふじかわ）先生」係

締切前はキスだけ！

2003年11月20日　第一刷発行

著　者　新田一実（にったかずみ）
発行人　長嶋正博
発行所　株式会社桜桃書房
〒153-0051
東京都目黒区上目黒1-18-6
【営業】TEL.03-3792-2411
FAX.03-3793-7048
【編集】TEL.03-3793-8012
FAX.03-5722-7626
郵便振替　00170-7-581612
（加入者名 オークランド）
印　刷　共同印刷株式会社
装　丁　田原幸則（きゃらめる）
Printed in Japan

本書に掲載されている作品はすべてフィクションです。実在の人物・団体・事件などにはいっさい関係ございません。無断複写・複製・転載を禁じます。乱丁・落丁はお取り替えいたします。当社営業部までお送り下さい。

© Kazumi Nitta 2003／© Outoushobou

9784756731869

1920093008570

ISBN4-7567-3186-4

C0093 ¥857E

定価: 本体857円 +税

急病の先輩編集のピンチヒッターで氷野原春海が担当となったのは、人気ハードボイルド作家・邦光志郎。締切破りの常習、編集泣かせとしても有名な邦光の原稿を取るため、氷野原は意気込んで邦光の家に泊まり込むことに。腹が減ったといえば食事を作り、資料がほしいといえば書棚に直行して原稿を書かせていた。

ところが缶詰め状態となって三日目のこと、なんと邦光は「俺を監禁しておくためならなんでもするんだろう?」と宣い、氷野原にセックスを要求してきたのだ!

締切守ればなんでもアリ、の出版界を舞台にしたワガママ作家×美人編集のクレイジービターラブ

Illustration▶藤河るり

